

TOHOKU GAKUIN ARCHIVES CENTER

# 東北学院史資料センター年報

*LIFE*  
*LIGHT LOVE*

Vol. 7  
2022.3.1



## 寄稿

「ランカスターに保存されていた日本関係フィルム」

日野 哲

「40周年フィルム」とは何か ～記念映画「東北学院の40年」制作秘話～

安部 茂徳

## 資料紹介

「学生新聞『東北学院学生時報』の概要とその特徴」

佐藤 匠

## 調査報告

「東北学院関係者墓地調査報告 ～雑司ヶ谷霊園・多磨霊園を中心に～」

安部 茂徳

## 活動紹介

仙台市戦災復興記念館戦災復興展企画展「戦時下の東北学院Ⅱ」

東北学院史資料センターWEBコラム「敬神愛人」2018年3月～2021年10月



「院長退任・新院長就任式」が終わり礼拝堂から出てくる来賓が靴を履き替えている様子。当時は礼拝堂に入る際、靴を履き替える必要があったようである。(50周年フィルムより)



創立50周年記念式での賛美。現在は正面左側に設置されているパイプオルガンが当時は2階左側に設置されていたことがわかる。(50周年フィルムより)

# CONTENTS

---

## あいさつ

『東北学院史資料センター年報』第七号発行にあたって 伝統と革新	院長 大西 晴樹 ……………	1
------------------------------------	----------------	---

## 寄稿

「ランカスターに保存されていた日本関係フィルム」	日野 哲 ……………	2
「40周年フィルム」とは何か ～記念映画「東北学院の40年」制作秘話～	安部 茂徳 ……………	24

## 資料紹介

「学生新聞『東北学院学生時報』の概要とその特徴」	佐藤 匠 ……………	48
--------------------------	------------	----

## 調査報告

「東北学院関係者墓地調査報告 ～雑司ヶ谷霊園・多磨霊園を中心に～」	安部 茂徳 ……………	55
-----------------------------------	-------------	----

## 活動紹介

仙台市戦災復興記念館戦災復興展企画展「戦時下の東北学院Ⅱ」……………	58
東北学院史資料センターWEBコラム「敬神愛人」2018年3月～2021年10月 ……	60
受贈資料一覧（2021年2月～2022年1月） ……	80
東北学院の沿革 ……	81



創立50周年祝賀行事の一環として仙台市公会堂で行われた音楽会。この音楽会には東北学院の同窓生で教会音楽家として有名な安部正義もソリストとして参加した。



創立50周年を記念して開催された記念展覧会。同窓生や教職員から寄贈されたアルバムや雑誌などの「校史関係資料」が展示された。

## 『東北学院史資料センター年報』 第七号発行にあたって 伝統と革新

院長 大西 晴樹



「イノベーション」ブームである。といっても、産業革命前夜のように自発的に発明が起こり、新たな技術革新が連続的に起こっているような状態を指しているのではない。現在の日本の状況はむしろ逆である。世界はIT技術を応用したデジタル社会に突入したのに、日本がそれについていけないような状態になることを懸念する警告が「イノベーション」という言葉遣いの濫用の背景にあるように思われる。

ところで、「イノベーション」(革新)は、突然降って湧いてくるものではない。イギリスの産業革命を例に挙げれば、職人の長年の経験と技術がボトルネックに突き当たり、それをブレークスルーすることによって産業革命につながるような発明を引き起こしたように、イノベーションには自らの伝統を振り返り、それを突破していくというプロセスが大切である。

東北学院大学は現在、2023年春の五橋新キャンパスの供用開始にむけて、カリキュラム改革の只中にある。同じカリキュラムを長年提供してきては、時代の要請、地域の必要から取り残され、未来を担う学生たちからも、振り向いてもらえなくなるのは必定である。東北学院大学は教養教育において高い評価を学外から獲得しているが、それは、キリスト教教育の長年の伝統、教養学部存在のみならず、1991年から始まった大学設置基準の大綱化の波を受けて、東北学院大学自身が2010年度から全学教育課程委員会の下に策定し、2015年度から実施してきた基礎教育(TGベーシック)と全学共通科目が功を奏してきた結果のように思

われる。とりわけ、キリスト教学を含むTGベーシック科目は教育内容の統一化、同一シラバスを教員に求め、学院生に対しては、知識や理解、汎用技術、態度と志向性の向上を求めてきた。それが、学院卒業生には、論理的能力、批判的精神、多様な知識がある、と学外から評価される所以なのである。

今回の教学改革では、これまでのTGベーシック等の教養教育の伝統を踏まえ、それを主体的に担う教員組織である教養教育センターを組織し、「東北学院史の探究」という自校史教育科目を設置する。とりわけ、「東北学院史の探究」は、課題探求科目群の中に設置されるので、少人数の課題探求型授業となる。そうするならば当然、五橋の新キャンパスで開講される授業と歴史的資料の宝庫である東北学院史資料センターとの連携が授業レベルにおいて求められ、東北学院の教育研究における新たなイノベーションが期待されるのである。



# ランカスターに保存されていた日本関係フィルム

東北学院史資料センター 調査研究員

日野 哲

## はじめに

当センターでは、アメリカのランカスター神学校内にある福音・改革派歴史協会（Evangelical & Reformed Historical Society、以下「ERHS」）の資料保存室（Archives、以下「アーカイヴ」）から日本関係の16ミリフィルム6巻と幻燈フィルム1本を借用してデジタル化を進めていましたが、このたびその作業を終え、すべて再現できるようになりました。アメリカではほとんどが再現不可能と言われたこれらのフィルムは、最も古いもので撮影から90年は経過していると思われ、大切に保存されてきたとは言え、相当劣化が進んでいるものばかりでした。それらのタイトルは次のとおりです。

### 16ミリフィルム（番号はアーカイヴで付されたもの）

1. Field Day at North Japan College (#425)
2. A Visit to the Yamagata Kindergarten (#426)
3. An Educational Jubilee in Japan: North Japan College 50th 1936 (#435)
4. Christian Efforts in Rural Japan (#437)
5. Evangelistic Field Trip in Japan (#445)
6. Going to Church in Japan (番号なし)

### 幻燈フィルム（カセットテープ付き）

Hope and Vision Translated: Life Story of the Schroers

## 借用の経緯

これらのフィルムを当センターが借用することとした経緯について、あらためて簡潔に記してみます。

2018年に続いて行われた2019年の2回目の調査の際に、これまで足を踏み入れたことがない別の資料保存庫(写真1)に案内され、そこで130巻ほどの16ミリフィルムと大量のスライドやアルバムを見せていただきました。その中に日本関係のフィルムも数巻あることが確認できましたが、それ以上の調査は時間の関係でできませんでした。その後、12月になってアーカイヴでは所蔵している16ミリフィルム



写真1 資料保存庫の映像資料（アリソン女史と筆者）

を貴重な歴史的遺産としてデジタル化するための資金援助をアメリカの公的機関に申請することとなり、日本関係のフィルム（当時、アーカイヴでは5巻をリストアップ）も含まれることから本院にも推薦状を書いてほしいとの要請がありました。本院から当時の松本宣郎理事長と大西晴樹院長・学長の公的な推薦状、さらにアーカイヴを訪れて資料を利用した者としてその価値を証明する出村彰名誉教授と筆者の文書も添えて提出しましたが、残念ながら採択されませんでした。

翌2020年度の調査は、新型コロナウイルス感染拡大の影響から断念せざるを得なかったため、アーカイヴを管理するアリソン・マリン女史にこれらのフィルムを本院の費用負担でデジタル化することはできないか打診してみました。幸い本学が採択されていた文部科学省の私立大学研究ブランディング事業の一環として予算も認められたことから、早速アメリカの業者にデジタル化を依頼してもらいましたが、フィルムの劣化が相当進んでいるため、5巻のうち1巻しか再現できなかったという返答でした。そこで、日本の業者なら再現することはできないものかと思い、厚かましくもフィルムの借用を願い出たところ、特別の配慮により5巻すべてを早速送っていただきました。

日本の業者に調べてもらったところ、確かに劣化



写真2 劣化し変形したフィルム

が進んでおり(写真2)、変形箇所を平面化し、強度が不足している箇所を補強するなど、相当な手間がかかるが、どのフィルムも再現できるであろうとの判断が示されました。そこで、2019年の調査の際に確認していたもう2巻のフィルムも追加借用し、合計7巻のデジタル化を行い、2021年3月に無事作業が完了しました。ERHSのアーカイヴには、借用したフィルムと共に再現できた映像のDVDも同封して返送し、感謝の意を表しました。

なお、アメリカの業者が再現不可としたことについては、多少説明が必要と思われます。すなわち劣化が進んでいるフィルムを再現するには相当の費用が見込まれ、その価値があるかどうか判断が分かります。アメリカの業者は通常のやり方と費用では再現が不可能と判断したのであり、日本の業者は我々の強い要望に応じて、何とか再現しようと努力してくれたのです。その分、費用と時間が余計にかかったことは言うまでもありません。

### フィルムの内容

各フィルムには、場面ごとにその内容を示す短い英文の標題が付されています。さらに上記のフィルムの内、“Field Day at North Japan College”(東北学院の運動会)と“Evangelistic Field Trip in Japan”(日本の福音宣教地への旅)には、そのフィルム全体の概要を記した説明書が別に添えられており、フィルムの内容をより深く知ることができますが、他のフィルムは画面に現れる短い標題からその場面を理解するしかありません。いずれにしても、撮影の時期や場所についてはどのフィルムにも全く明記されていません。

動画フィルムですから、本来なら文字通り“一目瞭然”、ご覧いただくのが一番ですが、本稿では一つひとつのフィルムについて、それらの記録を基に内容を紹介しながら、可能な限り撮影された時期や場所を推測していただくことにいたします。

### 1. “Field Day at North Japan College”

(時間：17分、白黒)

このフィルムは、唯一アメリカでも再現可能と判断され、デジタル化されましたが、残念ながら不鮮明であったため、あらためて日本の業者に依頼したものです。その結果、鮮明な画像が得られ、人物の特定ができるようになりました。フィルム缶の中には2枚の説明文が封入されており、その冒頭には次のように記されています(写真3)。

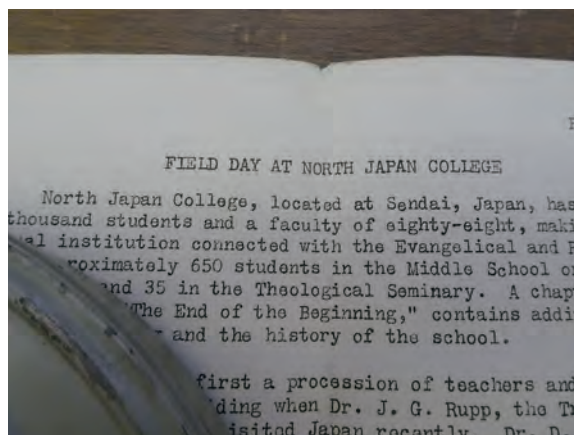


写真3 フィルム缶の中の説明文

東北学院(North Japan College)は、日本の仙台市にあり、一千名以上の学生と88名の教職員を擁する福音改革派教会が連携する教育機関としては最大の学校である。中学部に約650名、高等学部に350名、神学部には35名が在籍している。A.V.キャッセルマンの著作 *The End of the Beginning* には、学校の創立と歴史が詳しく記述されている。

さらにフィルムの内容に関しては、次のように説明されています。

フィルムは、最近来日した外国伝道局財務担当幹事のJ.G.ルップ博士を迎えて、中学部校舎から出て来る教員と学生の行進から始まる(写真4)。当時の院長D.B.シュネーダーとルップ博士が先頭に立ち、これにミセス・シュネーダーとミセス・ルップが続く。第三のグループは神学部長のゾーグと、1936年の創立50周年を機にシュネーダーの後継者として東北学院の院長に選任された出村博士である。次に続くのはP.L.ゲルハード博士、F.B.ニコデマス、ロバート・ゲルハード、チャールズ・リガレイ、カール・シップル、アーサー・スミス、そしてO.M.ス



写真4 先頭を歩くシュネーダーとルップ

タウトである。

運動会は学校の一大行事である。日本人はゲームやスポーツをアレンジするのに優れており、運動会のプログラムには幾つもの楽しく奇抜な競技や演技が含まれている。競走は熾烈を極めるが、良いスポーツマンシップが行き届いており、少年たちは勝つことだけでなく楽しむために競技に参加している。

続いて、フィルムの中にも映し出される各場面の標題が列記され、中にはそれに加えて短いコメントが付されているものもあります。例えば、運動会のある競技の場面では、次のような標題とコメントが記されています。

標 題：ENVELOPES CONTAIN INSTRUCTIONS FOR PROCEDURE

コメント：Contestants stop for envelopes containing instructions which must be carried out before the race can be completed.

この競技は、いわゆる「借り物競走」で、標題では「封筒にはやるべきことが指示されている」とだけ表示されますが、コメントでは「出場者は封筒の前で止まり、競技を終えるために行わなければならない指示を確認する」とその競技の内容を説明しています。このコメントはおそらく実際に上映する時に解説者が会場で読み上げたものだと思います。

また、次のように画面に登場する人物を紹介するコメントもあります。

標 題：IN FRONT OF THE PRESIDENT'S TENT (院長のテント前で)

コメント：Dr. and Mrs. Schneder with Baron Date, descendant of the feudal lords of old Japan. His son was a recent Middle School graduate. Dr. Demura joins them.



写真5 「院長のテントの中」(左から五十嵐正、ゾーグ、出村悌三郎、シュネーダー、ミセス・シュネーダー、伊達伯爵)

院長のテントの中(写真5)には、シュネーダー院長夫妻のほかにも伊達興宗伯爵と出村悌三郎がおり、伊達伯爵の息子は最近中学部を卒業したことがわかります。

そして、運動会の最後の場面には「HERE THEY ALL ARE」という標題が現れ、コメントには「Here we see again some of the students and the friends of the school. In the crowd near the end may be seen Miss Mary Gerhard, Mr. Carl Sipple and Mr. Charles LeGalley, missionary teachers in North Japan College.」と、生徒たちに交じってメリー・ゲルハード、カール・シップル、チャールズ・リガ



写真6 運動会を見学する三人の宣教師(左からミス・ゲルハード、シップル、リガレイ(右端))



レイなどの宣教師も紹介されています(写真6)。

このフィルムの撮影時期については、前号の拙稿(「Our Trip to Japan and China (1) —ランカスターの所蔵フィルムから見えたもの—」)でも検証を試みましたが、その後の調査で、「J.G.ルップ博士を迎えて」行われた中学部校舎でのセレモニーの場面と、これに続く「中学部校庭での運動会」の場面は、一見連続しているようで全く別の時期に撮影されたものであることがわかりました。冒頭の部分は、ルップ夫妻が三度目に来日し、シップルが東北学院に就職した1930(昭和5)年と考えるのが自然であり、さらに言えばルップ夫妻が中学部を訪問した9月8日であったとも考えられます(前出の拙稿78ページ)。

それでは「運動会」はいつ行われたのか。運動会の最後の場面に登場する二人の宣教師、即ちメリー・ゲルハードとチャールズ・リガレイの在日記録を見ると、おおよその年代が推定できます。メリー・ゲルハード(通称、ミス・ゲルハード)が1930年4月から賜暇休暇を得て、ヨーロッパ経由で帰米し、翌年の8月31日に帰仙したことは既に報告しましたが(前出の拙稿80ページ)、リガレイも1933年の6月には休暇で帰米しており(『東北学院時報』108号、1933年10月1日)、1934年は「帰米(中)」と報告されています(同116号、1934年11月30日)。時期的にはこれ以後に開催されたものとは考えにくいので、二人がそろって参加できるのは1931年9月から1933年6月までに開催された運動会に絞られることになります。

この間の運動会の開催について『東北学院時報』で調べると、以下ようになります。なお、運動会は例年創立記念式に合わせて開催されており、1926(大正15)年の専門部校舎(現大学本館)落成式とあわせて行われた創立40周年記念式典以降10月に開催されていましたが、1933年に高等学部の三学期制を二学期制に改制したことから、この年からもとの5月に行われるようになりました。

1931年：10月16日開催の予定であったが、角田桂嶽教授解職を巡る高等学部騒擾事件により中止(97号、1931年11月30日)

1932年：10月18日午前8時より開催(104号、1933年1月1日)

1933年：5月16日午前8時より開催(107号、1933年7月1日)

さらに、フィルムに映し出される中学部校舎の周

囲の樹木や校庭に生い茂る雑草の具合から、季節は秋と推測できるので、1932年10月18日の運動会とするのが妥当と思われます。

以上の推定から、このフィルムの冒頭部分は1930年9月8日、運動会は2年後の1932年10月18日に撮影され、実際に上映されたのは創立50周年記念式典(1936年5月)の後ということになります。フィルム缶に封入されていた説明文に言及されていたキャッセルマンの著作*The End of the Beginning*が1936年に発行されていることから、このことが裏づけされます。

このフィルムは、借用した中で最も保存状態が良く、鮮明な画面が再現できたので、当時の教職員一人ひとりの顔がはっきりと判別できます。また多彩な種目が次々と展開する当時の運動会は躍動感があり、本院にとって貴重な資料がまた加えられたことになります。

## 2. “A Visit to the Yamagata Kindergarten”

(時間：18分、白黒)



写真7 缶に入ったフィルム

このフィルム(写真7)は、「山形の幼稚園訪問」というタイトルと後述する登場人物から推測すると、1916(大正5)年に山形市内に設立された千歳幼稚園(現在は学校法人山形つのぶえ学園千歳認定こども園)を撮影したものと思われます。この幼稚園は、合衆国改革派教会(The Reformed Church in the United States、以下「ドイツ改革派教会」)が在日宣教師団(Japan Mission、以下「ミッション」)に資金を提供して設立されたもので、初代園長には山形の地に幼児教育の必要性を強く訴えたC. D. クリーテ宣教師の夫人(Bess Martin Kriete)が就任しました。当時、ミッションは仙台、岩槻、三春、日詰そして山形に幼稚園を運営していました(『神

と人』第6号、1922年5月1日)。ちなみに、「千歳幼稚園」の名は、米国でこの献金運動に大きな貢献をしたマチルダ・B・チッドセー (Mrs. Matilda B. Chidsey) に感謝の意を表して命名されたもので、米国への報告書にはMrs. Chidsey Memorial (Chitose) Kindergarten (ミセス・チッドセー記念(千歳)幼稚園)と記されています(『千歳幼稚園100周年記念誌』2016年)。

映像は、ひな祭りの祝いで踊りを披露する少女<sup>1</sup>から始まり、普段の園児たちの生活の様子や花の日礼拝後に母親に花をプレゼントする少女、そしてクリスマスページのセント(聖誕劇)まで、幼稚園の一年の生活と行事が記録されています。園庭で園児が教師の指導を受けながら野菜や花を栽培する場面には、「ガーデン・プロジェクトを計画するヌージェント宣教師夫人とヘルパーたち」(写真8)が登場します。また、クリスマス礼拝では園児にお話



写真8 「ヌージェント宣教師夫人とヘルパーたち」



写真9 園児にメッセージを語る渡邊牧師

<sup>1</sup> この少女は、後に紹介する“Christian Efforts in Rural Japan”のフィルムにも、「The pastor's daughter presents the “butterfly girl”」として登場している。

をする渡邊良亮牧師(写真9)(1920年、神学部第22回卒業生)の顔もはっきりと見ることができます。K. W. ヌージェント宣教師夫人(Pearl Graul Nuzent)は、1932(昭和7)年から1940(昭和15)年まで園長に就任しています。また渡邊牧師は、神学部卒業後、弘前伝道所を経て、1921(大正10)年から仙台教会(現在の日本基督教団仙台東一番丁教会)に転任する1944(昭和19)年まで山形伝道教会(1926年から日本基督教団山形教会(現在の日本基督教団山形六日町教会))の牧師に就任し、1941年から1944年までは園長を兼任しています。

この幼稚園の園長には、1940年までは宣教師夫人が就任しており、フィルムにはヌージェント宣教師夫人以外の宣教師夫人は登場しないことから、撮影年代はヌージェント宣教師夫人の園長在任中と考えられ、渡邊牧師は歴史的に深いつながりのある教会の牧師としてクリスマスのメッセージを担当したものと思われま。

前掲の『千歳幼稚園100周年記念誌』には、「1940年(昭和15年)」の出来事として、以下の興味深い記事が掲載されています。

ヌージェント宣教師は宣教師団の写真班に所属しており各地の写真を撮っていた。このため警察の特高課の監視下に置かれた。その様な状況からヌージェント宣教師夫妻に本国の宣教師団から帰国命令が出されたため12月18日に離日した。

この記事については、あらためて関係資料を検証してみたいと思いますが、いずれにしてもミッションに「写真班」があったとすると、このフィルムを含む以下の日本関係フィルムすべてについて撮影者はだれかを特定する手がかりになると思われま。少なくとも、この「山形の幼稚園訪問」のフィルムは、ヌージェント宣教師が撮影した可能性は大きくなります。

このフィルムの検証に最も有益な情報を提供してくれた『千歳幼稚園100周年記念誌』の編集に際して、当史資料センターも初期の資料調査の段階から協力と資料提供を行ったことが同誌の巻末に記されています。同誌の編集責任者であった波多野保夫先生(当時、千歳認定こども園園長、日本基督教団山形六日町教会主任担任牧師)と何度も情報の確認をしたことを懐かしく思い出します。その幼稚園のフィルムをこのように再現できたことに不思議な縁

を感じています。

### 3. “An Educational Jubilee in Japan: North Japan College 50th 1936”

(時間：18分、白黒)

このフィルムには、タイトルから1936（昭和11）年5月に行われた東北学院創立50周年記念式典の様子が記録されていると思われ、当初から最も再現してほしいフィルムでした。もしかしてシュネーダーの院長退任という歴史的イベントや、NHKのラジオを通じて全国に中継放送された院長としての最後の説教の場面も収録されているのではないかと、期待は膨らむばかりでした。しかし、借用したフィルムの中で最も痛みが激しく、果たしてどの程度再現が可能なのか、大きな不安もありました。

このような中、国際伝道局の機関紙『メッセンジャー』<sup>2</sup>（1936年7月16日）に、このフィルムの撮影に関する次のような記事を見つけました。

Rev. Mr. Schroer was present and took movies of both these services, so I hope that many of our W. M. S. women will sometime be able to see the pictures of these two fine services. (下線は筆者)

前出の拙稿（80ページ）でも紹介しましたが、1936年の東北学院創立50周年記念の際に、日本と中国を私的に訪れた福音改革派教会の3人の女性たちが旅行記を残しており、その中に書かれていたものです。「シュレーヤ宣教師も出席して、これら二つの礼拝を撮影したので、いずれ婦人伝道

会（Woman's Missionary Society）の方々にもご覧いただけたと思います」という内容です。撮影者のシュレーヤ宣教師については、本稿の最後でカセットテープ付きの幻燈フィルムとして借用したシュレーヤ宣教師夫妻の生涯を描いた“Hope and Vision Translated: Life Story of the Schroers”の中で紹介したいと思いますが、「二つの礼拝」については、次のように書かれています（同上の『メッセンジャー』）。

The anniversary Service Monday, May 11, was a very formal occasion. A complete account has already appeared. Miss Ruth Heinmiller was the only woman speaker, as she brought greetings from the Board of Foreign Missions, reading a letter sent by our Dr. A. V. Casselman.

Again, on Saturday, May 16, the Inauguration Service, when Dr. Schneder laid down his great work and turned over his presidency to Dr. Demura, his Japanese co-worker, was a very impressive occasion. … this time your Column Editor was the representative speaker for the Board of Foreign Missions. (下線は筆者)

一つは5月11日の創立50周年記念式、もう一つは5月16日に行われた院長退任・新院長就任式のこと、いずれも現土樋キャンパスのラーハウザー記念東北学院礼拝堂を会場に礼拝形式で行われました。外国伝道局を代表して祝辞を述べた二人の婦人については、拙稿の“*Our Trip to Japan and China*”の続きとしてあらためて記したいと思います。Miss Ruth Heinmiller（ハインミラー）（写真10）は



写真10 ミス・ハインミラーの祝辞

<sup>2</sup> ドイツ改革派教会が1934(昭和9)年6月に、同じドイツ系移民が母体であるエヴァンジェリカル教会と合同し、エヴァンジェリカル・アンド・リフォームド・チャーチ(福音改革派教会)を形成したことは、前号の拙稿でも触れた。その際、二つの教会の海外伝道機構も合同して、新たに「国際伝道局」(Board of International Missions)と呼ばれるようになり、教会の機関紙も合同して『メッセンジャー』(Messenger)となった。ドイツ改革派教会の機関紙の正式名称は『リフォームド・チャーチ・メッセンジャー』(Reformed Church Messenger)であり、これまでは略称として『メッセンジャー』という名称を用いたことになる。

なお、合同してもしばらくの間、『メッセンジャー』の記事は内容によって(E)と(R)に分けて掲載されている。ただし、本稿で紹介している東北学院と宮城女学校の創立50周年記念式での伝道局の祝辞は、「外国伝道局」(Board of Foreign Missions)からと記録されている。



写真11 ミス・ズィーグラールの祝辞

福音改革派教会の General Secretary of the Girls' Missionary Guilds であり、"your Column Editor" と表記されているのは『メッセンジャー』紙上で "Woman's Missionary Society" のコーナーを編集担当し、記事も執筆している Miss Rose Ellen Ziegler (ズィーグラール) (写真11) の二人です。当然のことながら、フィルムの中では他の祝辞者の誰よりも長く撮影されています。

### (1) 東北学院の創立50周年

さて、フィルムの内容ですが、シュネーダーが院長として最後の説教を行い、全国に中継放送された5月10日(日)の「感謝礼拝」は残念ながら記録されていませんでした。翌11日の「創立50周年記念式」は、午前8時半からの教職員、同窓生、在校生対象と、午後2時からの一般来聴者及び在校生の父母対象の2回に分けて行われ、画像から午後に行われた記念式を撮影したものと思われる。フィルムは、シュネーダーを先頭に本館から礼拝堂に向かう来賓の一行(写真12) から始まり、パイプオルガンの伴奏による当時宮城女学校の音楽教師であったミス・マリー・ライダルの独唱、文部省と日本政府代表に



写真12 本館から礼拝堂に向かう来賓一行



写真13 ゾーグに校鍵を手渡すシュネーダー

よる祝辞、ミス・ハインミラーの祝辞(伝道局幹事キャッセルマンの手紙を代読)、シュネーダー院長の式辞<sup>3</sup>、そして終わりの賛美歌を歌う会衆へと続きます。

画面は5月16日(土)午前10時から行われた「院長退任・新院長就任式」へと変わります。退任するシュネーダー院長がゾーグ理事<sup>4</sup>に校鍵を手渡し(写真13)、ゾーグ理事がそれを新院長出村悌三郎の手に渡す様子が記録されています。『東北学院七十年史』(以下『七十年史』)には「シュネーダーはザウグの手より校鍵をうけとり、これを新院長出村悌三郎の手に譲り」(595ページ)と書かれていますが、画面から校鍵の受け渡しはゾーグ理事を介して行われたことがわかります。続いて新院長出村悌三郎による就任の挨拶<sup>3</sup>、宮城県知事の祝辞、アメリカの教

<sup>3</sup> シュネーダーの院長式辞と出村悌三郎の院長就任挨拶は、『東北学院時報』126号(1936年7月1日)に記録されている。

<sup>4</sup> この時のゾーグの職務については、さまざまな表記がなされている。まずフィルムの画面には「Dr. D. B. Schneder, the retiring President, hands the key of the institution to the Dean of the College, Dr. E. H. Zaugg」と表示されるが、当日の式次第には「シュネーダー院長辞任の挨拶並にゾーグ理事局長に校鍵を返還し改めて出村新院長に交付」と書かれている。さらに『東北学院七十年史』は、「右側にシュネーダー、同左側に出村悌三郎、その中央に神学部教授、会計理事のザウグの三氏が鼎立し…」と記録し、『東北学院百年史』には「シュネーダーから司式者のゾーグ理事長に返還された校鍵が改めて新院長の手に渡され…」と記述されている(下線はいずれも筆者)。

当時ゾーグは神学部長で会計担当の理事であったが、財団法人東北学院の理事長に就任するのはこの式典終了後の6月1日である。東北学院理事会は、シュネーダーからゾーグへの理事長交代を既に決議し、実質的にはその体制で運営されていたが、法的手続きがまだ完了していなかったと思われる。



写真14 出口で履物を替える来賓

会代表のミス・ズィーグラの祝辞、そして終了後に礼拝堂を出る来賓や教職員が映されています。画面で見える「校鍵」はシュネーダーの手のひらにおさまるほど小さな物で、現在のような大きさではなかったようです。

また、礼拝堂の東側正面から出て来る来賓が出口で靴や下駄に履き替えている様子(写真14)から、当時礼拝堂は土足ではなかったことがうかがえます。『東北学院百年史』(以下『百年史』)には、この創立50周年記念行事に押川家の遺族として父清とともに参列した昌一の記憶として、「創立者の遺族を車の後部座席に請じ入れ、みずからは客人のスリッパを手にして前の助手席に乗り込んだ院長シュネーダーは、高等学部正面玄関に到着するや、まず車を下りて押川一族のためにスリッパを揃えた」(785ページ)と語っていますので、当時は高等学部校舎(現在の大学本館)もスリッパに履き替えていたのかもしれません。

フィルムには、記念行事の初日10日(日)の午後4時から北山のキリスト教墓地にある創立者押川方義の墓前で行われた「校祖墓前祭」の様子がよく短く加えられています。奨励者は押川の弟子の



写真15 校祖墓前祭の木村清松(左)

一人の木村清松(1892年予科入学後、中退)で、同じ敷地内にある押川の生母橋本只子に言及しながら、「母堂の母性愛が押川方義の後日の大をなさしめた所以を説き、神の経綸の悠久にして、高遠なる目的のあることを讃嘆し、われわれも創立者の遺志に副わんと決心を誓った」と『七十年史』(582ページ)は記しています。

## (2) 宮城学院の創立50周年

フィルムはこの後、思いがけない映像を映し出します。同じ年の秋に行われた宮城女学校の創立50周年記念行事です。フィルムのタイトルからは全く予想していませんでしたが、ドイツ改革派教会の日本伝道の中では東北学院(男子校)と宮城女学校(女子校)の二つの教育機関を仙台に生み出したことは大きな誇りであり、在日宣教師団が両校の記念すべき行事を記録に残すことはごく自然なことであったと思われます(写真16)<sup>5</sup>。撮影者は、東北学院と



写真16 外国伝道誌に漢字で掲載された両校名

<sup>5</sup> *The Outlook of Missions*, Vol.XV, No.12 (Dec. 1923) より

じシュレーヤ宣教師なのか、あるいは宣教師団の写真班の中の一人なのかは不明です。宮城女学校の創立50周年については『宮城女学校五十年史』（以下『五十年史』）の巻末に、「宮城女学校創立五十周年記念行事」として詳細に記録されており、それを参考にしながらフィルムの内容を紹介いたします。

宮城女学校の創立50周年記念式典は、1936年11月に行われました。画面には国旗を掲げた正門が映し出されます。記念行事は「11月の祝賀週間に先んじて早くも十月十六日運動会を以て始められ」ました。運動場にはテントが並び、多くの来賓や保護者の姿が見えます。プログラムには30もの種目が並んでいますが、収録されているのは5年生によるダンス「菊水の流れ」、同窓会員による「源平毬入」、2年生の「ドリブル競走」、そして4・5年生と専攻部生合同の「綱引き」と思われる4種目です。

続いて、画面は11月2日午前9時から第一講堂で行われた創立記念式で式辞を述べるC.D.クリーテ校長に変わります。その後記念式を終えて講堂から出る来賓の中には、宮城女学校校歌の作詞者土井晩翠の顔も見えます(写真17)。翌3日の明治館には、記



写真17 記念式を終えた来賓（和服が土井晩翠）



写真18 談笑する同窓生たち

念同窓会が行われました。ほとんどの同窓生は和装で、互いに談笑し合う姿からは華やかな雰囲気を感じられます(写真18)。『五十年史』には出席者は230名を数えたと記録されています。当日は記念文芸会も催され、貴族に扮した家政科の学生たちが演ずる劇「黒木御所」(小野晴通作)が「The literary program includes an old Japanese play in period costumes」というタイトルで紹介されています。

フィルムの最後には、「祝賀週間」の第一日目(11月1日)の夜に上演されたメンデルスゾーン作曲のオラトリオ「エリヤ」の音楽会から幾つかの場面が収録されています。クリーテ校長は開演に先立って次のように説明します(『五十年史』巻末の「宮城女学校創立五十周年記念行事」21~22ページ)。

只今から演奏されますオラトリオ「エリヤ」の中には、約三千年昔ユダヤのパレスタインに起つた出来事が寫されて居ります。即ち眞の預言者エリヤと、偶像崇拜の邪教に惑はされた民衆との間に葛藤が生じました。民衆は眞の神を忘れ異教の神バールを拝しましたが故に三年間少しも雨が降りませんでした。然るに彼等は尚も異教の神に雨を降らす事を祈り求めました。遂にエリヤは眞の神を示す為一つを眞の神にして他をバールの神にと二つの祭壇を作りました。神は天から火を降し、祭壇上の供物をやきつくしエリヤを義とし給ひました。遂に民衆が再び眞の神にかへり来つた時に神は天より雨を降し渴ける地は濕ひ再び實り豊けくなさいました。

旧約聖書の列王記上第18章に書かれているエリヤとバールの預言者450人とのカルメル山での対決の場面です。録画されているのは、冒頭に「収穫の時は過ぎぬ。されど助けは来ず」とエリヤに叫び求める民衆のコーラス、「汝ら衣を裂かずして、心を裂け」と悔い改めを迫るエリヤを敬愛するオバデヤの独唱、「汝らの目を上げよ」と民衆とともに神に祈るエリヤの独唱、そして最後に「神に感謝せん」と祈る民衆のコーラスの各場面と思われます。エリヤには東京から賛助出演したバリトンの中田羽後が扮し、エリヤと対峙する北イスラエルの悪王アハブには、先に紹介した「東北学院の運動会」にも登場したりガレイ宣教師がバスとして出演しました。

音楽会の記事は、次のように結んでいます。「深秋十一月一日開校五十年記念の行事第一夜も一時間

半に余る此の『エリヤ』の演奏に依つて更けてゆきました。終始してあのステイヂ真正面のGlory to Godの金文字(写真19)は常にも増して、燦と輝き、主の御栄えを讃め稱えるやうに見えました。』



写真19 ステージ正面の金文字「GLORY TO GOD」

#### 4. “Christian Efforts in Rural Japan”

(時間：21分、白黒、一部カラー)

このフィルムには、今では見ることのできない東北農村の農作業の様子が記録されています。画面に現れる人物や背景に見える文字などから、撮影場所はノッス宣教師が伝道の拠点とした福島県の会津地方や、「山形の幼稚園訪問」で登場したヌージェント宣教師が活動した山形県や青森県の地方都市と思われる。中には賀川豊彦が青年たちに講義する場面もあります。賀川は、杉山元治郎(1909年、神学部第12回卒業生)等とともに1927(昭和2)年に農民福音学校を開設し、各地で農閑期の青年たちにキリスト教の精神に基づく新しい農業のあり方を教えていますが、貧しかった東北農村の救済を目指して熱心に指導する賀川の姿を見ることができます。

画面に表示される英文の標題を紹介しながら、短く解説を加えてみることにいたします。

Farming is still the leading industry in northern Japan where the work of our church is located.

伝道局が拠点としている東北では農業が主要な産業です。農家の若者が馬に引かせて馬鋤(まぐわ)で田のしろかきをしています(写真20)。

Rice is grown in flooded fields and in the early spring the seedlings must be transplanted.

稲の苗は水を張った畑で育てられ、春先にはその苗を移植します。男たちが苗代(なわ



写真20 しろかきをする青年

しろ)で束ねた苗を女性たちが田に植えています。

Many of the farmers live in villages and do their work cooperatively.

農作業は地域の農家が互いに協力して行われます。一列になって協同で田植えをする様子子どもたちがあぜ道に立って見えています。

A good dinner is an important event of the day.

作業の後は、農家の庭先でみんなに食事が振舞われます。疲れを癒しながら、歓談のひとつです。

Silk is another farm product and silk worms require considerable care.

(この場面はカラー撮影)絹(シルク)も大事な農産物で、蚕は注意深く世話をする必要があります。女性たちが蚕の腹や背を棒で擦っています。

When the cocoon stage arrives, the worms are placed on large wicker nests.

(この画面もカラー撮影)繭の段階になると、蚕は大きな籐の巣に置かれます。

Winter in northern Japan usually brings plenty of snow.

北日本の冬にはいつも大雪が降ります。メイン道路に積もった大雪を総出で除雪する男たち、凍った雪をつるはしで砕いて馬櫃(ばそり)に乗せて運び出し、川に捨てる連携作業が続きます。画面には「堤橋高等女学校」<sup>6</sup>の生徒募集

<sup>6</sup> 堤橋高等女学校は、当時青森県にあった私立高等女学校で、戦災で校舎を焼失し、生徒は青森市の星高等女学校(現在の青森市の星中学校・高等学校)に編入されている。



写真21 豪雪地域の除雪作業（「提橋高等女学校」の看板が見える）

の立て看板が写っており、青森県の地方都市と思われま（写真21）。

The Noss family seems to enjoy digging out.

ノッス一家は雪かきを楽しんでいるようです。ノッスが小さい娘さんを2メートルも積もった雪の上に放り上げると、娘さんは何度もそこから笑顔で滑り降ります（写真22）。ノッス一家は福島県の会津地方を拠点に伝道活動をしていました。



写真22 積もった雪で遊ぶノッスと娘

Missionary Nugent starts on a trip through his rural field.

ヌージェント宣教師は農村地帯へ伝道旅行に出発します。大型の外車に家族と荷物を乗せて出発です。車には「山形1.790」のプレートが付いています（写真23）。

Detours and delays are not uncommon.

迂回や遅延することは珍しいことではありません。でこぼこの砂利道を進み、今にも崩れ落



写真23 農村伝道に出発するヌージェント一家

ちそうな橋も一気に渡ります。

Road work is done largely by hand.

道路工事が手作業で行われています。鍬やシャベルでかき集めた碎石を作業員が二人でもっこ担ぎで運び出しています（写真24）。



写真24 手作業で行われる道路工事

Kindergarten work is widely employed to interest the children and gain entrance into their homes.

幼稚園事業は子供たちのためだけでなく、その家庭と触れ合う糸口を得るためにも大切な働きです。子供たちが室内で滑り台を楽しみ、園庭で砂遊びをしています。

The pastor's daughter presents the "butterfly girl".

牧師の娘が晴れ着で「蝶の少女」（踊り）を披露しています（写真25）。この少女は、「山形の幼稚園訪問」の冒頭に「ひな祭り」の一場面として踊る少女と同一人物であることから、場所は山形の千歳幼稚園で、少女は渡邊牧師の娘と考えられます。





写真25 踊りを披露する「牧師の娘」

A Christian service concludes the program and here the phonograph serves a useful purpose.

(この場面はカラー撮影) 礼拝後、子供たちは蓄音機に興味津々で、操作する女性の周りを取り囲んでいます。

Attractive public gardens are frequently seen even in the smaller villages.

(この場面もカラー撮影) 小さな村でも手入れの行き届いた公園がよく見られます。回遊式庭園を散策しながら、カラフルな池の鯉にえさを与える婦人と子どもたちです。

A cultured Christian friend gives us a lesson in the art of flower arrangement.

クリスチヤンの婦人が丁寧に花を生ける様子が映し出されています。

The great Christian leader of Japan, Dr. Kagawa, is especially interested in the rural cooperative movement.

日本の偉大なクリスチヤンの指導者である賀川(豊彦)博士は、地方の協同組合運動に特別な関心を抱いています。賀川は「農村設計(第三講)」というテーマを掲げて、黒板に「土地資本」や「自作農創造」などの文字を書きながら熱心に指導しています(写真26)。

These young men are attending his training school of leaders.

青年たちが賀川の指導者養成学校で学んでいます。ネクタイ姿の社会人や学生服の若者、和服の青年など、受講生は多種多様です。

We visit a model cooperative farm.

受講生たちは経営者の案内で彼の模範的な農場を見学します。



写真26 賀川豊彦による農村指導者養成学校

Improved breeds of livestock have been introduced.

改良された品種の家畜が導入されています。この農場には、豚、山羊、羊、乳牛などが飼われており、養鶏や養蜂も行われています。

Bread making and the preparation of meat products are also featured.

パン作りや肉の加工食品の製造も行われており、経営者が自らオープンで食パンを焼き、従業員が腸詰めやソーセージを見学者たちに披露しています。

In the home of the manager of this farm lives a happy useful Christian family.

この農場の経営者一家は、幸せで快適な生活を送っています。

フィルムの最後には、経営者夫婦が幼い子ども二人とともに笑顔一杯で画面に映し出されます(写真27)。宣教師の働きが東北の農村の生活改善に大きな役割を果たしていることを本国の支援者に知らしめるのに有効なフィルム("Christian efforts in rural Japan")だったと思われます。



写真27 農場の経営者一家

## 5. “An Evangelistic Field Trip”

(時間：17分、白黒)

このフィルムには画面に表示される標題のほか、2ページにわたる説明文が添付されており、冒頭にはその概要が次のように記されています。

“Evangelistic Field”という言葉は、直接人々に関わり、その土地にアメリカの教会と同じような教会を建てあげる活動を説明する際に用いられます。これは興味深い働きであり、我々の宣教師たちは宣教地にある教会や伝道所を訪れるたびに、非常に珍しい経験をしています。このフィルムを通して、彼らが伝道旅行中に注目した興味深い出来事を幾つか垣間見ることができます。この旅には自転車が使われることもあり、フィルムには自転車で活動するノッス博士が登場します。ほとんどの場面は、訪れるのも容易でなく頻繁でもない山奥の辺りな村々を訪ねた時に撮影されたものです。このような宣教地への旅によって、宣教師はその働きの中でも最も喜ばしい体験をしているのです。

フィルムにはノッス宣教師のほか、東北学院神学部を卒業した牧師たちが次々と登場します。しかも画面の映像から撮影年代は少なくとも最初の場面は1929（昭和4）年であったことがわかります。<sup>7</sup>

<sup>7</sup> 1929年は、ドイツ改革派教会が最初の宣教師アンブローズ・D・グリング夫妻を日本に派遣してからちょうど50年となる。同年5月2日に福島県飯坂日本基督教会で開催された第46回東北中会の記録には、「第十六 リフォームド、ミッション伝道記念に関する件」として、「本年は合衆国リフォームド、ミッション日本伝道開始五十年に相当するを以て之を記念し、決議を以て感謝状を外国伝道局本部に送ること及び作新伝道委員に托して特別伝道を行はしむることに決す」と記されている。「作新伝道」とは、東北中会常置委員会と協力伝道委員会が「教会内部の信仰復興、自給促進と外部に対する神国の進展を実現せんがため」（『神と人』第74号、1928年1月1日）に伝道委員会を組織し、2年間にわたって北関東を含む東北6県の教会を挙げて実施した一大伝道活動である。9月にはミッションが主催する「日本伝道開始五十年」の記念式が宮城女学校講堂で行われている。

このフィルム（An Evangelistic Field Trip）と前のフィルム（Christian Efforts in rural Japan）は、日本伝道開始50年を記念して、ミッションが宣教師の過酷な伝道活動とその成果を母国にアピールし、外国伝道への意識を高揚させるために撮影されたものとも推測できる。

添付されていた説明文を基にフィルムの内容を解説いたします。

ノッスの一行は、始めに郡山教会の中山眞平牧師（1918年、神学部第20回卒業生）<sup>8</sup>を訪ね（写真28）、1929年5月12日に行われた同教会の新礼拝堂献堂式に参列しました。礼拝堂正面の立て看板には「十二日午後三時 献堂式執行 日本基督教会」と大書されています（写真29）。式の後に出口で参列者一人ひ



写真28 中山牧師



写真29 郡山教会の献堂式

<sup>8</sup> 中山眞平の礼拝堂新築について、『神と人』91号（1929年6月1日）は、「中山牧師の牧せらるる郡山教会は約一萬円を投じて建築中の所、竣工せられたるを以て五月十二日盛大なる捧献式を行はれた」と記録している。中山はその後、1932（昭和7）年には青森伝道教会（現在の日本基督教団青森松原教会）に転任した。郡山教会の在任中に生まれた長男年道も東北学院神学部に入學したが、1937年に神学部が日本神学校と合同したことに伴い転学し、1940年3月に日本神学校を卒業、最後の任地は父眞平が牧会した青森松原教会であった。

なお、郡山教会はその後日本基督教団郡山細沼教会と改称され、新会堂は2002（平成14）年に国の登録有形文化財に登録された。しかし、2021年2月に発生した福島県沖地震により会堂は甚大な被害を受けて解体を余儀なくされ、教会は日本基督教団郡山教会（旧日本福音教会郡山教会）と合併することとなった。

とりと挨拶を交わす中山牧師と、参列したノッス夫妻や福島教会の城生安治牧師（1917年、神学部第19回卒業生）などの顔も確認できます。

一行は会津田島で教会員が営むお茶屋（teashop）に立ち寄りました。画面には「茶舗 静岡屋商店」の看板が見えます。最近教会に加わったばかりの青年が大八車を引いて、「田嶋日本基督教会」と書かれた教会の前を通って行きます。

田嶋教会の松本政隆牧師（1928年、神学部第30回卒業生）<sup>9</sup>は、このフィルム撮影の一週間ほど前（5月10日）に結婚したばかりです。ノッスがこの結婚の仲人を依頼されました。松本牧師はテニスのチャンピオンで、大学や地元の大会で勝ち取った素晴らしい銀のカップを保持しており、画面では和服姿の新妻がテニスラケットを夫に手渡す初々しい姿が見られます（写真30）。教会の隣では新居を建てるため



写真30 新婚の松本牧師夫妻

の地突き（地固め）が行われており、20人ほどが輪になって中央の重石と結ばれている縄をそれぞれ手に持ち、調子を合わせながら何度も重石を打ち下ろす作業が行われています。松本牧師も薄着で輪に加わっています。

画面は切り替わり、ノッス一行が細い山道を通る

様子を映し出します。途中の道路では新しい橋を架けるための工事が行われており、険しいがけをつるはしで切り崩す男たちと、その土を天秤棒ともっこで担いで運び出す女たちがたくましく働いています。ノッスは自転車で小道を通り抜け、次の村へと急ぎます。

一行は村の宿屋に宿泊しました。ノッスのもとにはやがて多くの聴衆が集まり、礼拝が行われました。ノッスが宿屋の主人とその家族を紹介します（写真31）。この主人は80歳を過ぎた敬虔な仏教徒ですが、



写真31 宿屋を集会に提供する主人と家族

キリストの教えにも関心を持っているので、ノッスは賀川豊彦が書いたトラクトを手渡して説明しています。前日の夜の礼拝には百名近い村人がこの宿屋で行われた礼拝に参加しました。

この村の人々はよく働きます。牛で畑を耕し、女たちは鋤で田起こしをし、山から木材を運び出し、重い荷物を背に山の小道を越えて行きます。当時女たちの手助けが必要な仕事が次々と映し出されます。

一行は鴉（トキ）ノ巣（説明文には“Torrosu”と表記）に到着しました。村人が祭りのように丸提灯を一行にロープにつないで飾って歓迎します。この大きな家屋は教会として使われており、中から日曜学校の子供たち（50～60人）が八巻傳牧師（1927年、神学部第29回卒業生）<sup>10</sup>に先導されて一列になっ

<sup>9</sup> 松本政隆の結婚については、同じ『神と人』91号が「ノッス博士の媒介により丹牧師の司式にて去月十日齋藤京子姉と華燭の典をあげらる」と報じている。第46回東北中会記録には、「福島県南会津郡田島に松本政隆氏を定住せしむることとした」と記録されているが、同じ年の『神と人』（1929年12月1日）には、松本氏は「南会津田島より須賀川教会に転ざられ、田島教会は「当分無牧となります」と報じられている。

<sup>10</sup> 八巻 傳は、「南会津四郡の農村伝道をなさるために、九月廿日仙台を立てて任地会津郡大宮村鴉巣に向」かい（『神と人』83号、1928年10月1日）、以後「福島県南会津郡大宮村鴉巣 御蔵入担当」と毎年の東北中会記録「教役者一覧」には記録されている。



写真32 八巻牧師ともんぺ姿の子ども達

て出て来ます(写真32)。鴉ノ巣は訪れるのが困難な山村ですが、この日曜学校はこの地区で最初に組織されました。説明文には「雪深い地域で、老人も子供も男も女も穿いている独特のズボン (peculiar pantaloons、「もんぺ」のこと) に注目してください」と書かれています。

この地区を担当する八巻牧師一家(夫婦と幼い三人の子ども達)と、教会の熱心な信徒として提灯に筆で描く男性が紹介されます。彼は飲酒から解放され、現在は酒に酔わず熱心なクリスチヤンの手本となっています。

近くには近隣の村にも知られている温泉があり、ノッスと八巻牧師が小高い山から下の町並みを見えています。ここからは素晴らしい景色が眺められ、教師の引率で生徒たちが遠足に訪れています。

画面は一転して激しい濁流の河川を映し出します。標題には「大雨と洪水が前途多難を予想させる」(heavy rain and high waters forecast trouble ahead)と書かれており、一行は途方にくれて川岸に佇んでいます。さらになだれが完全に道路を覆っ



写真33 自転車を担いで登るノッス一行

ていますが、遠回りしてでも行かざるを得ず、ノッスは自転車を橋脚の高い木橋に引きずり上げ、雪山では自転車を担いで登って行きます(写真33)。

続いて「八巻牧師は福音の伝道者であると同時に、優れた獣医である」(Pastor Yamaki is a skilled veterinarian as well as a minister of the gospel)という表示がなされ、八巻牧師が農家の馬を聴診器で診察しています(写真34)。彼は毎月8つの村々を



写真34 農家の馬を診察する八巻牧師

訪ねますが、いつも途中で病気の家畜の手当てを依頼されます。彼が農家の近くを通ると、道路脇に「八巻先生、立ち止まってください (Mr. Yamaki, please stop)」というメモ書きが貼られた札を見つけます。これが農家の人たちが医者を呼ぶ時のやり方なのです。

この農家はクリスチヤン一家で、丁寧なお辞儀で一行の訪問に感謝を表してくれました。画面には見事な脱穀用の水力装置が映し出され、その脇ではノッス宣教師が八巻牧師の診察の様子に見入っています。<sup>11</sup>

次に一行は、都会の教会を訪問しました。日曜学

<sup>11</sup>『神と人』第79号(1928年6月1日)には、「村落伝道の先駆者 升崎外彦氏のことを述べて、八巻傳、松本政隆両君に饒す」という一文がある。仏教からキリスト教に改宗し、家族や村人から激しい迫害を受けながらも農村伝道一筋に生きた升崎外彦氏を紹介しながら、八巻と松本の働きに次のように期待を寄せている。

「近年、基督教界の各方面からしきりに農村伝道が叫ばれる。わが東北でも、会津のノッス博士が多年心血を注がれた福島県南会津の、山村、農村の間に福音を徹底的に宣伝しようといふので、八巻傳、松本政隆の両君が、少壮精銳の意気を以て、近く赴任せられんとしつゝあることは、私どもの意を強くする所であり、ひたすらその成功を祈るものである。」

校の遠足では、弁当を食べてから女の子たちはゴム跳びをして遊んでいます。子供たちの服装は農村とは明らかに異なり洋服が中心で、制服、着物なども見えます。画面には「Sunday School in Tokyo」と表示されますが、日曜学校の生徒たちと一緒に吉田鞠(菊)太郎牧師（1898年、神学部第5回卒業生）夫妻が登場することから、場所は埼玉県の大宮日本基督教会と思われます。吉田夫妻は「二人とも日本における優れたクリスチャン・リーダー」(two of our very fine Christian leaders in Japan)と紹介されています(写真35)。



写真35 吉田牧師

ドイツ改革派教会の埼玉伝道について、『百年史』は吉田牧師の父兼三郎を紹介しながら次のように記しています（163～164ページ）。

土地の名士吉田兼三郎はかねてより日本橋の教会とも深い関わりを持ち、自分の家族や村人への伝道を願っていた。グリングは時にはモールを伴ってしばしばこの地を訪れ、やがて有力な教会が吉田家および隣村の中村家の一族を中心に形成される。グリングが日本を去ってからも、モールの手で伝道活動は続けられて大宮、岩槻、川口、川越などにも及び、長く東北学院神学部出身者の伝道圏として留まった。

フィルムの最後には、仙台及び東北各地で活動した後、東京近郊の伝道地を巡回伝道したミス・パイファー(写真36)とヘンリー・K・ミラー(写真37)の両宣教師も登場します。

このフィルムは、「会津の使徒」と呼ばれたノッスの伝道活動を中心としながらも、困難な地で懸命に伝道に励む神学部卒業生の働きとその成果を知る貴重な資料です。



写真36 幼子を抱くパイファー宣教師



写真37 礼拝後に吉田牧師と共に挨拶するミラー宣教師  
(右の女性は吉田牧師夫人)

## 6. “Going to Church in Japan”

(時間：14分、カラー)

このフィルムには、1950年代と思われる日本基督教団銀座教会の礼拝の様子が映されています。礼拝堂入口の看板には、次のように礼拝が告知されています(写真38)。



写真38 入口に掲げられた礼拝の告知

朝礼拝 八月十二日 午前十時 「神と私」  
 説教 鵜飼主任教師  
 夕礼拝 八月十二日 午後七時 「人の道」  
 奨励 望月昭雄

参列者は入口で礼拝案内のようなパンフレットを受け取って中に入り、礼拝に出席します。賛美歌を歌う会衆が大写しにされており、現在の銀座教会員の中には人物が特定できる方がおられると思います。そして鵜飼牧師の祝祷をもって礼拝が終わります。

銀座教会の沿革を見ると、画面の会堂は1928（昭和3）年に献堂され、その後1945年の東京大空襲で被災して1953年に改修された第三次会堂と思われます（写真39）。「鵜飼主任教師」は、1956（昭和31）年に前任の三井勇牧師の召天に伴い、伝道師から第13代目の牧師に就任した若き鵜飼勇師のようです。<sup>12</sup>



写真39 銀座教会礼拝堂

その後、画面は「芝幼稚園」と表示された別の建物に変わります。中に入り、教会学校の礼拝が始まります。賛美歌を歌い、献金を捧げて、教師が「聖書数え歌」を指導した後、旧約聖書の創世記に登場する「ヨセフ物語」の紙芝居を見せながらメッセージを語っています（写真40）。生徒数はおよそ130から150名で、全員園児用の小さな木の椅子にきちんと座っています。

続いて画面にはどこかの録音スタジオを映し出されます。各種の録音機材や音響を制御する操作盤が配置されているコントロール・ルーム（調整室）で

<sup>12</sup> 日本国憲法制定に貢献した鈴木義男（1912年、普通科卒業生）は、1918（大正7）年に第4代目の鵜飼猛牧師の司式によりこの銀座教会で結婚式を挙げている（鈴木義男伝記刊行会編『鈴木義男』268ページ）。



写真40 芝幼稚園での教会学校

は、責任者と思われる方がこのスタジオについて説明をしています（写真41）。続いて実際に録音や録画が行われる部屋に入り、聖書の物語をペープサートや影絵で撮影する様子を紹介しています。

このスタジオについては、まだ明確な特定は出来ませんが、1949（昭和24）年にNCC（日本キリスト教協議会）の「聴視覚事業部」として設立されたキリスト教視聴覚センター（通称「アバコ



写真41 スタジオの説明をする責任者



写真42 「アバコの沿革」に掲載されている写真

(AVACO)』である可能性があります。その沿革によれば、設立翌年の1950年3月に事務所を銀座にある教文館ビル8階のNCCの一室に設置し、スタジオを同ビルに設けています。そして同じ3月には第1回キリスト教聴視覚教育講習会が近くの銀座教会を会場として開催されています。さらに、沿革に「スタジオを銀座教文館ビル8階に建設」として掲載されている写真の人物(写真42)<sup>13</sup>が、上に記したコントロール・ルームで説明する責任者と思われる方に酷似していることも、その理由の一つです。いずれにしても、この人物もカラーではっきりと写っており、関係者にご覧いただければ特定できると思われます。

このフィルムもアーカイヴに保存されていたものですが、実はフィルムケースには以下の文字が貼付されていました。

PROPERTY OF OFFICE COMMUNICATION  
UNITED CHURCH OF CHRIST, 105 Madison  
Avenue, New York, NY (1985)

CANNOT BE USED ON ORDINARY PROJECTOR  
Original pix & sound tracks (A&B rolls) for  
OFF TO ADVENTURE kids TV series

すなわち、このフィルムの所有権はニューヨークに本部を置くUnited Church of Christ (UCC)にあり、“OFF TO ADVENTURE”という子供向けのテレビ番組の音声付のフィルムであるため、通



写真43 “OFF TO ADVENTURE”

<sup>13</sup>一般財団法人日本聖書協会キリスト教聴視覚センター「組織情報」(<https://avaco.info/organization/>)より

常の映写機は使用できない、というものです。確かに最初の画面には、離陸する飛行機と“OFF TO ADVENTURE”という文字が表示され(写真43)、日本に「冒険にでかけよう」という雰囲気を感じられます。さらにアメリカ人の冒険者二人(アナウンス担当の男性と子供代表らしい少女)と、同行した日本人の男性(芝幼稚園の教会学校で紙芝居を見せながらメッセージをした教師)が、銀座教会の礼拝や芝幼稚園での教会学校に出席し、スタジオを見学しながら、その体験を視聴者に説明している場面が多く見られます(写真44)。残念ながらこのフィルムの



写真44 視聴者に解説する三人の人物

音声は見つかっておらず、したがって撮影時期やスタジオの場所の特定も明確に出来ないままとなっています。

アーカイヴのアリソン女史には、音声テープや再生する機材の有無を問い合わせましたが、アーカイヴには見つからないとの返答で、他に“OFF TO ADVENTURE”シリーズのフィルムは保存されていないとのことでした。さらにアリソン女史が所有者のUCCとそのアーカイヴを保存しているPresbyterian Historical Society (in Philadelphia)にも確認したところ、このシリーズのフィルムは保存されていないとの返答でした。

このフィルムはデジタル化を終えています。その利用については所有権の問題からまだ慎重な取り扱いが求められるようです。

## 7. “Hope and Vision Translated: Life Story of the Schroers” (時間：約28分、白黒)

最後に紹介するフィルムは、16ミリではなく幻燈フィルムです。96枚のスライドでギルバート・W・シュレーヤ宣教師夫妻の生涯が記録されており、フィルムを解説する音声もカセットテープで残され

ています。スライドから、このフィルムはシュレーヤ夫妻の金婚式（1971年）を記念して、東京のアバコ（AVACO）で製作されたものと思われます。

1枚目のスライドは当時のシュレーヤ夫妻の写真（写真45）で、解説は次のような言葉で始まります。



写真45 金婚式当時のシュレーヤ夫妻

私たちは人生の中でさまざまな人と出会います。ある人たちは私たちの生き方に深い影響を与え、またある人たちは私たちから影響を受けることもあります。そしてそれは私たちも気付かないうちによく起こるのです。

そして、「これはギルバートとコーネリヤ・シュレーヤ夫妻自身が、彼らの希望とヴィジョンを日本人々に伝えていく（translated their hope and vision to the people of Japan）中で経験したたくさん出来事の物語です」と続きます。

物語は、「二人の故郷オハイオ州ニューノックスビル出身の宣教師ハーマン・H・クック夫妻<sup>14</sup>と出会い、深い影響を受けて日本に行くことを決断したギルバート少年から始まります。そしてクック夫

<sup>14</sup>クック宣教師は、東北の農山村を巡回する直接伝道を中心とし、自ら伝道紙『両羽の光』を創刊するなど、積極的な活動を行った。主な活動舞台となった山形・秋田両県の古い呼び名（羽前、羽後）から取って「両羽の使徒」と呼ばれたが、1915（大正4）年4月、37歳の短い生涯を終えた。彼の墓は仙台市北山のキリスト教墓地にあり、シュネーダー家の隣に置かれている墓石には、「わたしは福音を恥としない」（ローマの信徒への手紙1章16節）との聖句が英文で刻まれている。

人はコーネリヤの叔母だったのです」として、シュレーヤ夫妻の様々な「出会い」や日本での出来事が次のように紹介されます。

ギルバートが13歳の頃、7年間の両羽地方（山形・秋田）での働きを終えたクック宣教師は、帰郷した際にギルバートの家を訪れ、夕食を共にしました。クックは日本から当時秋田教会の牧師をしていた土田熊治（1897年、神学部第4回卒業生）を伴っていましたが、ギルバートにとっては初めて出会う日本人でした。クックと土田牧師（写真46）との



写真46 クック宣教師と土田牧師

出会いは、ギルバートの心に未知の国日本への関心を芽生えさせました。この出会いから間もなくのこと、ギルバートは大腿部の骨の感染症により命にかかわる病となりました。医者が「奇跡でも起こらない限り、この少年は助からない」というのを聞き、ギルバートは神に祈りました。「神様、私の足を治してくださいましたら、私は宣教師として日本へ行きます。」これはギルバート少年にとって神との「やくそく」でした。

この後、彼の決心をさらに強める出来事が起こります。それは1916（大正5）年4月7日、クックが肺炎のために日本で亡くなったという知らせです。母教会で行われた追悼礼拝で、「誰かクックの跡を継ぐものはいないか」との呼びかけに、高校生だったギルバート少年は心の中でこれに応答する決心をするのです。他方、同じ高校に通っていたコーネリヤは、未亡人となった叔母のクック夫人から「宣教師として日本に行ってみない？」との誘いを受け、日本への関心を高めていました。同じ志をもってい



た二人は出会い、1922（大正11）年6月に結婚して（写真47）、9月には宣教師として日本に到着します。



写真47 結婚したシュレーヤ夫妻

東京の日本語学校で学んでいた時（1923年）に関東大震災に遭遇した彼らは、仙台にしばらく滞在した後、1924年9月に「生涯の地」となる盛岡に着任し、ここを拠点として岩手、青森、秋田の教会を統轄する担任宣教師に任命されます。スライドには付近の農村や漁村を自転車ですりよめるギルバートと、幼い子供を抱えながらそこで懸命に生活する地元の女性たちが映されています。1927年には盛岡の下ノ橋教会牧師として着任した土田牧師と感動的な再会を果たし、二人は協力して宣教活動を行うことになります。

シュレーヤ夫妻の宣教活動の大きな実りとして、1931（昭和6）年10月に献堂された盛岡善隣館があります（写真48）。当初の計画は、盛岡に4カ所しか



写真48 献堂された盛岡善隣館

なく地域からも要望があった幼稚園を建設することでしたが、帰米中に各国から休暇で帰国している宣教師たちとこの計画を分かち合う中で、幼児だけを対象とする幼稚園建設ではなく、すべての人々が利用できる建物を作るという計画が明確に示されました。夫妻はこの計画のために募金活動を行う許可を

外国伝道局から得て、1万ドルの献金を携えて盛岡に戻りました。5月に行われた献金式の入場式はギルバートの良き理解者で協力者であった土田牧師が行い、二人は新しいスタイルの宣教活動に着手できる希望とビジョン（hope and vision）に満たされていました。名称は日本名としてふさわしい「盛岡善隣館」となりましたが、単に社会事業だけを行う印象を与えらるゝとして、本来の目的である宣教活動を行うセンターという意味から、「盛岡キリスト教教育センター（Morioka Christian Education Center）」という名称も併せて用いることになりました。

その後、シュレーヤ夫妻に最悪の出来事が起こります。彼らが愛する日本と祖国アメリカとの衝突が避けられない事態となりました。アメリカ大使館から婦女子は帰国するよう警告がありましたが、ギルバートは「日本での働きはまだ終わっていない。私は戦争のための戦士ではなく、平和のための戦士だから」と言い続けていました。コーネリヤは自分も娘のエブリンとナンシーも帰国しないことに決めました。そして、1941（昭和16）年12月8日の「パール・ハーバー」の翌朝6時に、ギルバートはスパイ容疑で逮捕されました。刑務所と裁判所の往復には手錠をかけられ、菅笠のような被り物を被らされました（写真49）。そして5ヶ月半もの間、独房生活を



写真49 手錠と菅笠姿のギルバート

強いられました。独房内での生活は寒くて辛く厳しいものでした。1942年6月、ギルバートは無罪判決を受けます。出迎えたのは土田牧師でした。

シュレーヤ一家が他の1500人もの在日アメリカ人たちと一緒に、捕虜交換船に乗せられて、南アフリカとブラジルを経由してニューヨークに到着したのは、8月25日でした。彼らを待っていたのは、多くの講演依頼でした（写真50）。はじめの一年間だけでも500以上の全国の教会や学校、奉仕団体でいろいろ

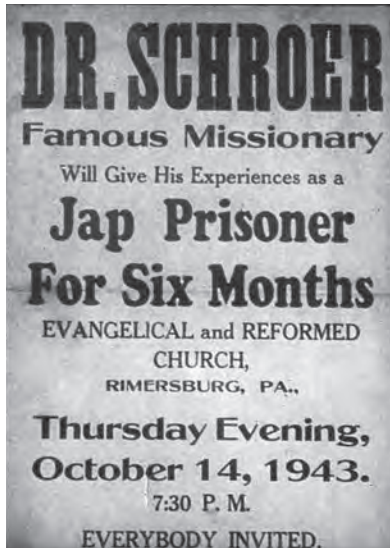


写真50 シュレーヤによる講演会のポスター

ろな年齢層の人たちに日本のことを話しました。彼らがいつも確信をもって伝えたのは、こうした戦争中にも日本にはたくさんの友人たちが残されていること、そして彼等が抱いている希望や恐怖はアメリカ人の誰もが抱くのと全く同じであることでした。

そして1945年、戦争が終わると、シュレーヤ夫妻はただちに日本に向けて食料や衣服、薬品などを小包にして送りました。また日本の友人たちの名前と住所をアメリカの教会の人たちにも知らせたので、さらにたくさんの小包が日本に送られることになりました。ギルバートは国際伝道局で海外宣教の広報活動のディレクターをした後、1954（昭和29）年に神との「やくそく」を果たすために再び日本を訪れます。そして1961年には日本基督教団の要請を受けて、盛岡善隣館（盛岡キリスト教教育センター）の館長に再び就任します。スライドからは、ギルバートとコーネリヤが多くの家庭に招かれて子どもたち



写真51 家庭に招かれて食事を共にするギルバート



写真52 宣教師館に招いて食事を提供するコーネリヤ

や婦人たちとも親しく交流し、盛岡善隣館を拠点として精力的に活動を行った様子が伺えます(写真51、52)。

1971（昭和46）年にシュレーヤ夫妻は金婚式を迎えます。お祝いの席でギルバートは、「神さまがお召しになるまで、この仕事をとおして人々を励まし続けたい」とスピーチしました。スライドには彼らの「生涯の地」、盛岡を象徴する岩手山が映し出されます。解説は「シュレーヤ夫妻の生涯は、日々新たなチャンスと思いがけない出会いに満ちていました。…彼らはその人生を会った人々と共有することによって、彼らの希望とヴィジョンを伝えました（Hope and Vision have been Translated）」という言葉で締めくくります。そして最後のスライドには二人が出会った人々が映し出され、その希望とヴィジョンが受け継がれてさらに「この物語」が続いて行くことが、次の言葉で表示されます(写真53、54)。

Through these lives, also …… and the story goes on ……



写真53 シュレーヤ夫妻が「会った」人たち



写真54 「この物語は続いて行く」

シュレーヤ夫妻の長女エブリンが1950年に宣教師クレーラ (Armin H. Kroehler) と結婚して会津伝道を行っていることも、この物語が続いていることの証しです。

シュレーヤ夫妻の生涯に関しては、岩手日報社が1980年に発行した『やくそく』(A Promise Fulfilled) があります。ギルバートが1980 (昭和55) 年5月に亡くなった後、彼が岩手日報に連載 (1964年12月～1979年5月) した随筆をまとめたものですが、巻末にはコーネリヤが二人の生涯を丁寧に書いています。掲載されている写真の多くは、スライドの写真と重複していますが、引用されている年齢や年代に多少違いがあります<sup>15</sup>。コーネリヤの記憶違いによるものかも知れませんが、本稿ではフィルム of 解説をそのまま採用していますので、いずれ検証する必要があります。

ギルバートは、前に記したとおり「東北学院の50周年記念」フィルムの撮影者であることがわかっており、『やくそく』巻末の写真ページには、「撮りますよ」(Gilbert was always recording in pictures people and scenes he saw) と題する写真(写真55)も掲載されています。ERHSのアーカイヴには、写真の愛好家であった彼が撮影した写真が十数冊のアルバムに収められて保存されています。<sup>16</sup>

<sup>15</sup>『やくそく』の中で、コーネリヤはクック宣教師と土田牧師がシュレーヤ家を訪れたのはギルバートが10歳を迎えた1907 (明治40) 年とされていますが、土田牧師の生涯を記した菊池孝育氏の著書『蒼々たる天に—日本キリスト教団下ノ橋教会牧師 土田熊治の生涯』では、「その頃 (明治40年) 熊治はまだ秋田教会の牧師を務めていて、時にクックとペアを組み、両羽地方の伝道に従事していた。この部分は、シュレーヤあるいは同夫人の記憶違いと思われる」と述べている。

<sup>16</sup>当センター年報Vol.6 (2020) の拙稿「ランカスター神学校での調査報告」(83ページ) でも報告。



写真55 「撮りますよ」

## おわりに

紹介したフィルムの撮影時期や場所については、はっきりとわかるものもありますが、ほとんどは推測であり、さらに調査する必要があります。写っている人物がかなり鮮明であり、関係すると思われる方々に見ていただければ、すぐに特定できる方もおられそうです。またフィルムの撮影者については、在日宣教師団の中に「写真班」があったとすれば、誰がメンバーで、どのような活動を行っていたのかを明らかにしたいと願っています。

ランカスターの調査は、新型コロナウイルス感染拡大により中断されたままとなっていますが、日本関係の映像資料 (写真、スライド、フィルム類) がまだまだ多く残されており、早く再開できることを期待しています。

最後に、これらのフィルムの借用とデジタル化を特別なご好意により許可して下さったERHSのアーカイヴ管理責任者、アリソン・マリン女史に重ねて感謝いたします。

日野 哲プロフィール

HINO, Satoshi

1949年生まれ。東北学院大学文学部英文学科卒業。1972年東北学院勤務。大学総務部長をもって2015年3月定年退職。同年4月から現職。

# 「40周年フィルム」とは何か ～記念映画「東北学院の40年」制作秘話～

東北学院史資料センター

安部 茂徳

## はじめに

2020年度に「東北学院大学ブランディング事業」の継続事業の一つとして、東北学院創立40周年時の式典の様子などが撮影されたフィルム（以下、「40周年フィルム」と呼称）をクリーニングしてデジタル化し、再編集して、記念映画「東北学院の40年」を制作した。2021年度になってようやく機会を得て学内で公開することができ、次いでYouTube（東北学院広報チャンネル）上で一般に向けても公開された。

このフィルムが撮影されたのは今を遡ること95年前の1926（大正15）年のことである。このフィルムはその歴史的価値の高さにも関わらず、撮影してから最近に至るまで非常に不遇な扱いを受けてきたが、令和の時代になってようやく脚光を浴びる時を迎えた。来る東北学院創立150年、その先の200年を見据えて、後世の学院関係者のための資料となるよう本稿を残したいと考えた。

本稿では、第一章では東北学院創立から40周年までの歴史を振り返り、映画本編では語ることが出来なかった発展の過程を確認し、東北学院創立40周年の持つ意味を考えた。第二章ではこのフィルムがどのような歴史を辿り、どのような扱いを受けたのかを明らかにしようと試みた。第三章では記念映画製作についての記録として、映画本編には盛り込めなかった制作過程や諸事情を記した。

## 第一章 東北学院創立40年の道程

本章では、「東北学院の40年」の冒頭部分でも触れている、東北学院創立から専門部校舎（現土樋キャンパス本館）建設までの校舎建設の歴史を中心に、映画内で語ることができなかった情報を交えて40年にわたる東北学院初期発展の歴史を『東北学院百年史』を中心に紐解きながら簡潔に辿っていく。校舎建設の歴史は生徒数の増大、学校規模拡大の歴史であり、まさに東北学院発展の歴史である。しかしその道程は決して平坦なものではなかった。東北学院創立40周年をいかにして迎えたかを知らずして

このフィルムの貴重さはわかり得ないため、今一度振り返ってみたい。

### 第一節 仙台神学校の創設

東北学院の前身である仙台神学校が創設されたのは1886（明治19）年のことである。初めは仙台市木町北六番丁角（現在の東北大学病院敷地内）にあった民家を借り、押川方義（写真1）とW.E.ホーイ（写真2）の二人の教師と、7名の生徒（写真3）から始まった小さな私塾であった。



写真1 押川方義



写真2 W.E.ホーイ



写真3 押川(手前右)、ホーイ(手前左)と最初の生徒たち

この小さな私塾は順調に生徒を増やし、1888（明治21）年には南町・東二番丁角（旧東本願寺跡地）に移転した。ここにホーイが私財を投じて教室兼寄宿舎の「ジョン・オールト記念館」（写真4）を建設し、1891（明治24）年には「東北学院」へと改称する。同年9月には「仙台神学校校舎」（写真5）



写真4 ジョン・オールド記念館



写真5 仙台神学校校舎

が完成した。『東北学院百年史』には「1945年7月の空襲で焼失するまで、仙台で最も美しい建造物の一つとして知られた」と書かれている。

「全体は赤煉瓦造りのいわゆるカレッジ・ゴシック様式の二階建てで、一部は四角の五層の塔を持ち、内部には四つの教室と礼拝堂、それに教授たちのための個室をいくつか備えていた。その壮麗さは当時の仙台の人々の耳目を奪っただけでなく、1945年7月の空襲で焼失するまで、仙台で最も美しい建造物の一つとして知られた」（『東北学院百年史』302頁）



写真6 D.B.シュネーダー

1900(明治33)年にホーイが辞任し中国伝道へ旅立ち、翌1901(明治34)年には押川が院長を辞任して大日本海外教育会の活動へと転身していった。二人の後を受け継いだ形となったD.B.シュネーダー(写真6)は、1901(明治34)年に第二代院長に就任し、その後

1936(昭和11)年までの35年の長きに渡って院長を務めることになる。

## 第二節 シュネーダー時代のはじまり

院長に就任したシュネーダーの最初の大きな仕事は、学制の刷新と校舎建設であった。当時、生徒数は百数十名にまでなっていたが、多くの生徒が卒業まで残らず、中途退学して官公立学校へと移って行ってしまうことが問題となっていた。その最大の理由は、東北学院が徴兵猶予の特権を持つ学校ではなかったことである。そのため、普通科・専門科を卒業した生徒は、さらに上級の学校に進学する特権を与えられていなかったのである。シュネーダーは徴兵猶予の特典が、東北学院、特に専門科の維持・発展に不可欠であると考えていた。

徴兵猶予の認定を受けるためには、校舎から三丁(約330m)以内に、最低三万六千平方フィート(約一千坪)の運動場が必要であった。幸いにも東二番丁に手頃な土地が売りに出ており、これを取得した。その後、文部省との粘り強い折衝の末、1902(明治35)年に認定を受けることができた。

徴兵猶予および上級学校進学の特典は効果絶大で、シュネーダーは手紙の中で「徴兵猶予の特典を獲得して見て、これまでそれが東北学院の発展にとって、どれほど大きな妨げとなっていたかが良くわかりました。新学年がちょうど始まったところですが、志願者は百九十名に上りました。」と述べている。しかし、同手紙には「実際に受験したのは百三十一名ですが、七十五名に入学を許可していただけです。」とも述べている。これは、当時すでに校舎(南町・旧仙台神学校校舎)が手狭になっていたことを意味し、新校舎の建設は喫緊の課題であった。

普通科が徴兵猶予と上級学校進学の特典を獲得したからには、その上の専門科文学部および神学部のためにも徴兵猶予の特典を得なければならなかったが、そのためには2年以上に渡る官公庁との忍耐強い折衝が必要となった。1903(明治36)年に「専門学校令」と「公立私立専門学校規程」が相次いで文部省により制定され、徴兵猶予の特典はこの新しい学校令に準拠することが必須条件であり、東北学院の施設・設備および教員を、この条件に満たす必要があった。教授陣については十分に強力な陣容を抱えていたが、問題は校舎であった。この時は既存の施設をなんとかやり繰りして、1904(明治37)年2月に設立認可を受け、同年4月に念願の徴兵猶予を与えられた。ちなみにこの年、専門学校令によって

設立認可を受けた私立学校は全国で僅か二十二校であった。

こうして普通科および専門部がそれぞれ中学校令・専門学校令によって正式に認可を受け、徴兵猶予と上級学校進学の特典を獲得したことが、その後の学校の隆盛をもたらした。認可に際しての条件が、より良い教育環境の整備へとつながったためである。ここにきてシュネーダーの差し当たっての目標は、生徒数の上で圧倒的に多数を占め、授業料収入の点でも依存度の高い普通科の整備・拡張であった。すでに取得していた東二番丁の土地を買い増しし、同時に校舎建設のための募金活動が精力的に進められた。時を同じくして、シュネーダーは普通科生徒定員を従来の全体で170名から250名に増員する認可を文部大臣宛てに提出した。普通科の整備・拡張が急務であったことと、校舎建設資金の目途がある程度たったからである。こうして、東二番丁の土地に新校舎建設が始まったのは1904（明治37）年6月のことである。

しかし、土地取得と校舎建設のための資金は、アメリカ側にせよ日本側にせよ、有り余る中からの支出ではなく、並々ならぬ労苦があったことは忘れてはならない。事実、この頃シュネーダーは複数回に渡り機関紙を通じてアメリカの教会員たちに募金を呼びかけているし、校舎建設開始の直前、シュネーダー自ら渡米して四ヶ月もの間アメリカ各地を巡回して募金を呼び掛けている。

現代の我々教職員・学生・生徒は想像もしないことだが、東北学院が存立し得たのは、創立当初からの米国ドイツ改革派教会からの莫大な資金援助があったからである。もちろん、創立初期のホーイによる多額の私財の投入や、香味チカによる「12枚の銀貨」<sup>1</sup>（写真7・8）に代表される個人の献金も忘れてはいけないが、継続的かつ大規模な資金提供という意味では、やはりドイツ改革派教会からの資金援助が最大である。



写真7 香味チカ



写真8 香味チカの一分子銀(現物)

### 第三節 東北学院への献金の大きさ

東二番丁の新校舎建設のための総費用は、当初2.5～3万ドルと試算されたが、この当時の米国ドイツ改革派教会外国伝道局から日本への総支出額は年間約5万ドル<sup>2</sup>であった。この金額は、十数名の宣教師たちの俸給、旅費、伝道費、東北学院および宮城女学校（現宮城学院）への経常費補助、その他一切を含む金額である。これほどの建設費用がアメリカからの資金援助で賄われたわけである。ドイツ改革派教会はけっして豊かな階層を成員とする教派ではなく、教会員の多くは小農民層、中小企業主や従業員、教師や会社員であった。当時の一人の教会員の献金額が5ドル程度であったことを考えると、校舎建設費用がいかに巨額であったか、またいかにアメリカからの資金援助が莫大であったのかわかるものである。

巨費を投じた東二番丁新校舎建設であったが、翌1905（明治38）9月に完成した。現在、我々はこの校舎を「普通科校舎」（写真9）と呼称しているが、写真を見てもわかるように、それは美しい校舎であった。『東北学院七十年史』には次のように書かれている。

「この校舎は極めて典雅な外観と内部の装備とをもつていた。様式は先年建てられた仙台日本基督教会堂とよく似たルネッサンス式の建築で外壁の赤煉瓦と窓の周辺の白は御影石と尖った屋根の黒いスレートの赤、白、黒の色がよく

<sup>1</sup> 仙台神学校創立当初、香味チカというクリスチャンである貧しい寡婦が、老後ために長年蓄えていた12枚の古銀を寄付した。写真の一分銀は、ランカスター神学校に保管されていた実際に香味チカが寄付した一分銀のうち一枚である。現在は東北学院史資料センターで保管している。大変興味深いエピソードであるので、詳細は『東北学院百年史』をご覧ください。

<sup>2</sup> あくまで大まかな目安程度に考えていただきたいが、筆者が試算してみたところ、当時の5万ドルは現代の価値にして約2億円くらいか。

相映じていかにも気高い明朗さを示していた。当時は仙台のみならず全国的にも珍しい建築物であつた」(『東北学院七十年史』313頁)



写真9 普通科校舎

#### 第四節 降りかかる災難

##### ～「訓令十二号」と「仙台大火」～

少し時を遡るが、1899(明治32)年、キリスト教学校の存立を脅かす「文部省訓令第十二号」が発令された。これは、宗教教育を禁じる政府の圧迫であった。キリスト教主義教育を続けると、中学校令による中学校としての特権を失うという大きな危機であった。前述のように、普通科が中学校の認可を受けたのは発令から3年後の1902(明治35)のことである。詳細は割愛するが、東北学院は発令当時はまだ認可を受けていなかったため、同じような状況にあった他のキリスト教主義学校(明治学院、青山学院、同志社など)と歩調を合わせて、事実上中学校令に準拠する学校と同等の扱いを受けるようになることを目指し、「訓令十二号」の内容的な崩壊を計ったのである。その後の政府側の姿勢の変化もあり、この方策は一応の成功を見た。1902(明治35)年に普通科が認可を受けた後、正式に中学部へと改称の動きがみられたのは1905(明治38)年のことであるが、この時は普通科から中学部への変更は認められなかった。名称変更が認められたのは、それから10年後の1915(大正4)年のことである。しかし、「訓令第十二号」が廃棄になったわけではないので、毎日の礼拝を行い、聖書の授業を続ける東北学院は「中学校」という名称は許されなかったのである。

このような苦難の状況下でも、シュネーダーの東北学院発展への思い・勢いは止まらなかった。

シュネーダーは遠くない将来、東北学院において中学部がそれまで占めてきた大きな役割(生徒数・

収入額)を、専門部が取って代わる日が来るであろうと予想をしていた。そのためにはまず、専門部のための土地の確保が必要であった。1916(大正5)年から1918(大正7)年にかけて、東北学院は南六軒丁(現土樋キャンパス)に5,600坪余りの校地を取得した。この土地は中学部校地から徒歩十数分、古くからの宣教師館(写真10・11)にも近かったので、立地条件は申し分なかった。後は校舎建設のための資金を調達するだけとなっていた。シュネーダーはこの頃60歳(写真12)を迎えており、この土地での専門部校舎建設が自分の最後の仕事になるかもしれ



写真10 デフォレスト館



写真11 ブラッドショー館



写真12 当時のシュネーダー

ないと考えていた。

順調に見えた専門部校舎建設への道であったが、ここで大きな危機に直面する。折しも第一次世界大戦に伴う物価急騰がおこり、せっかく募金で集めたドルの価値は半減してしまった。外国伝道局の側でも資金難となり、借金をしてでも専門部校舎を建設するべきだというシュネーダーの提案は却下されてしまった。

このような厳しい状況の中、追い打ちをかけるようにして思いもかけない大災害が東北学院を襲う。1919（大正8）年3月2日の明け方、仙台の中心部約700戸を焼き尽くした未曾有の火事が発生した。いわゆる仙台大火である。南町の民家から発した火の手は、強風に煽られて瞬く間に東南へと広がり、辛うじて神学部校舎（南町）は延焼を逃れたものの、中学部校舎（東二番丁）が火の粉を浴びることとなった。当時の河北新報は以下のように伝えている。

「魔風の遠く南に走る勢に送られて黒煙と火塊とを飛ばせる危険は遂に意外にも東二番丁に巍然たる仙台名物の一なる壮麗なる赤煉瓦洋式建築東北学院中学部の上層楼に天を摩して高く聳立せる尖塔に魔の炎の忽焉として立ち登るよと見る間に紅蓮は物凄く塔の窓口より吐き出され尖塔の影は全く火炎に包まれて黄色の塔と化しアレヨアレヨと叫ぶ間に階上の各房に延火せるものか多くの窓より濛々たる黒煙と舌火を吐きさしも壮麗の学院の校舎も灰燼に名残を留むる無惨さを呈せり」（『河北新報』大正8年3月3日）

こうして、僅か14年前に幾多の労苦と巨費を投じて建設した「普通科校舎」<sup>3</sup>は焼失（写真13）した。当時のシュネーダーの様子を「失望の余り長椅子に倒れこみ、顔色は真っ青で疲れ切っていました。私は夫の一命を案じたほどでした」と妻アンナが記している。



写真13 焼失した普通科校舎

### 第五節 中学部校舎再建

しかし、シュネーダーは程なくして立ち上がり、再建へと動き出す。災害から二週間後には復興計画をいくつか作成し、その検討にとりかかった。どの案にせよ再建には莫大な費用が必要であり、またしても多くの募金を募ることになった。集まった募金は目標額には程遠かったが、災害から一年後にはシュネーダーが単身渡米し、募金を呼び掛けた。その努力もあって、外国伝道局からは当時の経常費補助一年分と同額の7万ドルが、中学部新校舎建設のために別途計上され支出された。

当時、第一次世界大戦後の進学率上昇によって、中学部入学希望者は大幅に増加していた。大火直後ですえも例年の二倍の志望者があった。中学部の生徒は近くの東二番丁小学校、YMCA、神学部校舎などに分散して授業をうけていた。それだけに中学部校舎の再建は喫緊の最重要課題であった。

大火から二年が経った1921（大正10）年、ようやく中学部復興の基本方針が決定した。しかしながら、いまだに財源の確保には至らず、資金集めは難航していた。専門部長・同窓会長であった出村悌三郎は、再三にわたり『東北学院時報』紙上で募金を訴え続けた。シュネーダーの長年の理解者・支援者であった渋沢栄一は、盛大な昼食会を開催し、八千円の寄付を集めた。このときの寄付者には、大倉喜八郎（実業家・東京経済大学の前身である大倉商業学校創設者）、安田善次郎（実業家・安田財閥の祖）、高橋是清（内閣総理大臣・仙台藩士）などの名前がみられる。

1922（大正11）年9月、ついに中学部新校舎（写真14）が完成した。新校舎は耐火防火上の理由から、平らな屋根と頑固な外壁を備えて設計されたので、焼失前の校舎のような明るく瀟洒で、天を指すような伸びやかさは失ってしまったが、その堅固さ故に、

<sup>3</sup> 焼失時はすでに中学部に改称（1915年）済み。



1945（昭和20）年の仙台空襲でも、内部は焼失したものの外部の枠組みは残存し、なお十数年間の使用に耐えることになる。



写真14 再建された中学部校舎

新校舎の南面した正面入口の真上には、「LIFE LIGHT LOVE」の三文字（写真15）が鮮やかに刻み込まれ、以後東北学院の3L精神として、長く・広く・深く親しまれるようになる。『東北学院百年史』には、「この三語の組み合わせの根拠や意図、またいったい誰が選んだのかなど、肝腎のことは資料的には確かめようがないのは残念である」とあるが、これについては、後にドイツ改革派教会の機関紙『The Missionary Guardian』（1891年～）の表紙に「LIFE, LIGHT AND LOVE FOR THE WORLD」とあることが判明し、おそらくこれが元になったのではないかと推測されている。もしくは、ドイツ改革派教会の中では、機関紙の表紙に記載するほど既に一般的な標語として使われていたのではないかとの見解もある。いずれにせよ、シュネーダーが新校舎の正面入り口に掲げた理由を示す明確な文献は今現在も存在していない。



写真15 中学部校舎正面入口「LIFE LIGHT LOVE」

## 第六節 専門部校舎建設

普通科校舎の焼失・中学部校舎の再建という大きなアクシデントのため、専門部校舎の新築計画は大幅に遅れることになったが、シュネーダーの次なる目標は1918（大正7）年までに南六軒丁に取得した土地に、専門部校舎を建設することであった。当時、日本は第一次世界大戦後に国際的立場が向上し、資本主義体制が急速に成熟した。また国民所得の増大とともに教育への関心も急激に上昇し、上級学校進学の希望が大幅に上昇した。事実、1918（大正7）年に86名であった専門部三科の学生は、5年後の1923（大正12）年には161名、さらに4年後の1927（昭和2）年には333名と、著しい増加を見せていた。それだけに、専門部校舎建設が急務であったことは想像に難くない。

中学部校舎が完成した翌1923（大正12）年、シュネーダー夫妻は再び募金活動のため渡米し、約一年半に渡って各地を巡回した。苦勞の末、シュネーダー夫妻が帰任する時には、母教会の会員たちから捧げられた12万ドルという巨額の建築資金を手に入っていた。この時シュネーダーはすでに67歳を迎えていた。仙台帰任の歓迎会での席上、シュネーダーは、「仙台に帰ってみればこゝが矢張り私にとって一番なつかしいホームです」と述べたという。そして「居並ぶ五十幾名かの教職員を見渡して『はじめて私が仙台に来た当時の学院のことを回顧すると、今の此盛況はまるで夢ではないかと疑ふ程です』と涙ぐまれておられた」と記されている。

仙台帰任から半年が経過した1925（大正14）年7月、ついにシュネーダーは『東北学院時報』六十一号紙上で、総計33万6千円にも上ると予想される専門部校舎の概要を発表した。専門部校舎を正面にして右手に講堂を兼ねた礼拝堂、反対の左手には図書館を配する基本設計は、知識の訓練に加えるに靈の訓練をもってする建学の精神の具体的表現であった。シュネーダーの計画によれば、このほかに増築校舎、神学部校舎、体育館兼集会室、寄宿舎などの建設が構想に入っており、遠い将来にすべてが完成すれば、「殆ど理想的な校舎になりませう」と考えられた。

しかし、いつものように問題は建築資金であった。手元にあったのはシュネーダー夫妻が募金した23万8千円だけで、外国伝道局からの特別援助金4万8千円は期待できるにしても、なお5万円ほど不足していた。理事会はこの不足分は日本国内で募金したいと考え、今回は主として1300名の卒業生

とその父兄に寄付を募った。専門部長兼同窓会長であった出村悌三郎は、『東北学院時報』紙上で強く呼びかけた。その甲斐あって、寄付申込みは好調に見えた。教職員・卒業生は当然として、東北学院教会<sup>4</sup>の婦人会は、ミセス・シュネーダーの指導のもとに盛大なバザーを開き、その利益2300円を献金した。そのほか、政財界の著名人からも多数募金が寄せられ、アメリカの姉妹校であるアーサイナス・カレッジ、現役の学生・生徒からも献金が捧げられた。校舎建築工事は1925（大正14）年夏から始まったが、工事着工から1年後までに、募金総額は2万円を超えていた。しかし目標の5万円達成は容易ではなかった。同年11月、校舎定礎式において、同窓生の一人で生物学者として知られた理事の畑井新喜司は、たまたまアメリカ出張中に目の当たりにしたシュネーダー夫妻の募金の労苦に言及し次のように演説した。「此建物は実に院長夫妻の血と涙の結晶である」「米国は金満家の多い国だが此資金は決して富豪の余財から得たものではなく、篤信家の浄財から基督教主義の教育を施す目的の為に喜捨されたものだといふことも記憶されたい」（『東北学院時報』63号より）

23万円余の巨費を投じて建設された専門部新校舎（写真16）は、工事着工から1年後の1926（大正15）年7月末にようやく完成した。延べ600坪、耐震性を念頭に置いた構造で、窓枠や床のリノリウム（床材）はアメリカからの輸入、外壁は近郊の秋保で産出される灰白色の自然石で、当時の学校施設としては最高・最善を誇るに足る造営物であったし、仙台空襲を潜り抜け、戦後の東北学院再興の本拠となり得たのも、そもそもの堅牢さの故であった。



写真16 専門部校舎

<sup>4</sup> 仙台教会から分かれて、東北学院内に作られた教会。現在の仙台広瀬河畔教会の前身。

専門部校舎建設のシュネーダーの苦労は、資金繰りだけではなかったことも忘れてはならない。アメリカの伝道局本部や、あるいは日本在住のドイツ改革派教会の宣教師たちの間でさえも、このような巨額の資金が教育機関に注入されることを良しとしない者もいた。かつて神学部で教授を務め、長く会津で顕著な伝道成果を収めて「会津の使徒」と仰がれたクリストファー・ノッス（写真17）は、外国伝道局の莫大な資金が東北学院や宮城女学校に注がれることに対して極めて批判的で、この度のシュネーダーの募金活動にも疑念を投げかけていた。これは、教育機関に依拠する「間接伝道」と、教会や伝道所を拠点とする「直接伝道」との間の一種の対立関係によるものであった。



写真17 クリストファー・ノッス宣教師

1926（大正15）年9月には専門部新校舎は使用を開始した。この年は奇しくも東北学院創立40周年の記念の年に当たることから、献堂式（落成式）は創立記念式を兼ねて10月16日に行われることになった。この時の様子は是非「東北学院の40年」をご覧ください映像でご確認いただきたい。なお、ホーイが副院長を辞任した1899（明治32）年、その2年後に押川が院長を辞任したあの時から、三校祖が一堂に会するのは実に25年ぶりのことであった。しかしこの翌年、ホーイは中国からアメリカへ向かう船上で死去、押川もその翌年に亡くなったため、この3人の創立者が再び地上で相まみえることはなかった。

#### 第七節 40周年以降の東北学院とシュネーダー

以上、駆け足で創立から40年間の足跡を辿ってみたが、他にも重要な出来事はたくさんあった。今回は紙幅の関係上かなり端折ったため、興味を持たれた方は是非『東北学院百年史』をご一読いただきたい。今回制作の「東北学院の40年」がさらに興味深いものとなること間違いなしである。

さて、本章の最後に少しだけこの後のことに触れておく。40周年を迎えた後、1932（昭和7）年に礼拝堂が建設され、1936（昭和11）年の東北学院創立50周年を機に、シュネーダーは35年の長きに渡り務めた院長を辞任する。シュネーダーの院長辞任をもって東北学院の歴史に一区切りがついたと言えるのかもしれない。しかし、学校として一つの完成形を迎えたのは、専門部校舎の完成に求めることができるであろう。

また、シュネーダーの院長在任の最後の10年は苦悩の連続であった。世界恐慌（1929年～）に起因する世界的な経済不況や、満州事変（1931年）をきっかけとした日本国内のナショナリズムの高揚といった社会情勢の中、東北学院にあっては、神学部の内紛、商科事件、外国伝道局による大幅な経常費補助削減、高等学部ストライキ事件など問題が頻発した。特に高等学部ストライキ事件（1931年）では、ナショナリズムの高まりの影響もあり、シュネーダーが直接批判される事態となった。他方、シュネーダーのプライベート面では、1934（昭和9）年に宮城女学校で音楽教師をしていた長女のメアリ（写真18）が病気で4歳の若さで亡くなっている。この年は、学内においてもストライキにまで発展しかけた事件も起り、シュネーダーは「わが生涯の最悪の年」とまで言っている。



写真18 メアリ・シュネーダー

このように、専門部校舎完成後の10年間は、社会情勢的にも東北学院内においても、そしてシュネーダー個人にとっても、決して最良の時期とは言えなかった。三校祖が存命中に最後に揃い踏みして盛大に開催された創立40周年記念式典と、シュネーダーの念願であった専門部整備の集大成である専門部校舎の完成をもって、東北学院初期全盛時代を迎えたと言って差し支えないであろう。

## 第二章 数奇な運命を辿った「40周年フィルム」

本章では、東北学院創立40周年記念式を記録したフィルムについて取り扱う。どのような経緯で撮影されたのか、撮影されたフィルムがどのように扱われたのか、その映像が現在どのように利用されているのか、などを明らかにしていく。

### 第一節 フィルムの撮影

前章でみたように、東北学院創立40周年記念式典並びに専門部校舎落成式は、三校祖の歴史を語るうえでも、東北学院という一私立学校の歴史を語るうえでも、一つの大きな節目と言えるビッグイベントであった。

式典開催に際し、この栄誉あるイベントを永く記録に留めたいと、東京同窓会の発案で撮影してフィルムに残すことが決まった。当時の撮影に至る経緯は、同窓会長出村悌三郎が『東北学院時報』で「母校創立四拾年記念活動寫真寄附の檄」という記事を掲載している。

「此祝典に際し、我同窓會は母校の光輝ある歴史を永く記憶に留め母校及び在米國の同情後援者に対する感謝の微衷を表さんが爲に最も適當なる贈物の一つとして、創立者並にシュネーダー院長の温容、整備せる母校の實況を活動寫真に撮影して贈呈致す事になりました。

此の議は本年春の修學旅行團が上京して在京同窓會員諸君の歓迎を受けた際、其席上に於て提議されたもので、それが本年九月の東京支部秋期大會で満場一致の賛成を得、支部の手で着々手順が運ばれたのであります。」（東北学院時報69号 大正15年12月10日）

これにより東京同窓会の発案でフィルム撮影が提案されたことがわかる。なお、当時の修学旅行では、現地の同窓生が出迎えや歓迎会などを開き、生徒と交流する機会があった。当時の教員の言葉として「東京横浜の諸先輩に接し、其の厚情を味ひ、ホントウに同窓の気分を養ひ得て、近き将来に於て會員たるべき土台をこしらへるのである」と修学旅行での同窓生との交流の意義を述べている。また、この同窓生との交流は生徒だけではなく、同行する先生たちにとっても旧交を温める貴重な機会となっていた。

話が逸れたが檄文に戻る。同記事には続いて、フィルム撮影・製作に関する件、制作費用の件につ

いても言及している。

「本来此の計画は全国同窓生諸君の御承認と御後援とを得て進める積りでありましたが、時日切迫の爲め、御相談申上げる餘裕がなかつたので、一と先づ東京支部の御活動に俟つて撮影を了する事と致し東京支部に於ては總豫算約金壹千四百圓（作製フィルム二本として）の内差當り原版撮影に要する實費金五百圓を東京在住の同窓會中より寄附を仰ぐ事とし、平山東京支部長並に最上幹事の活動を煩はして左記の諸氏より頭書の寄附を得ました。（中略）計金貳百壹拾參圓也。

此の不況の際これ丈の御寄附を快諾せられたる前記諸氏の愛校心に激励せられ、東京支部の幹部は大いに發奮し、長野縣諏訪に獨立のプロダクション、スズキ映畫製作所を經營せらるゝ同窓生鈴木三郎君と協議の結果、同氏の献身的快諾を得て、愈々記念式日たる十月十六日より二十日までに大略左の撮影を終わりました。」（『東北学院時報』69号 大正15年12月10日）

フィルム制作には総額1,400円必要であるが、まずは同窓会東京支部が原版撮影に必要な実費500円を支部同窓生からの寄付で賄うこととし、213円の寄付を得た。撮影は同窓生で長野県諏訪の鈴木三郎氏に依頼し、5日間にわたって撮影したことがわかる。

同記事はさらに続けて、フィルム作成のための寄付金のお願いへと続く。

「此の擧は實に我が學院の歴史的映畫であり、母校の現在を物語る縮圖であると共に、創立者押川先生ホーイ先生並にシュネーダー院長に捧ぐる同窓生よりの思慕の花輪であると思ひます。本年十月十六日に開かれた同窓會總會に於ては此壯擧を同窓會の事業と爲し、全国の同窓生各位に御賛同を請い其の完成を期する事に満場一致賛成可決せられました。所要經費金壹千四百圓なるを以て、一口金參円以上と云う事に願ひ度いのですが、各自經濟的立場を異にして居る事でもありますから、右御含みの上應分の御送金を御願ひ致します」（『東北学院時報』69号 大正15年12月10日）

この記事からわかるように、この事業は東北学院同窓会全体のものとし、寄付を全国の同窓生から募ることになった。なお、同記事内には、「申込締切期日 大正十五年十二月末日限り」となっている。この記事が掲載された時報は前述の通り大正15年12月10日付であるから、多少日付より早く発行していたにしても募集期間はわずかに約一か月程度ということになる。東京支部負担分500円を除いた900円程度の寄付金なら一か月あれば集まると考えていたのだろうか。

同時報7頁には、撮影にあたった鈴木三郎氏が書いた「活動寫眞撮影後記」が掲載されているので、こちらも併せて紹介しておく。

〔(要約) 老院長40年の苦闘にその教え子が報いるため花輪に代えるに映画をもってしようという東京支部の交渉に依って、重い撮影機をかついで信州の山中を飛び出し、母校に着いたのが式の一日前の15日の朝だ。この重任を全うせん心算で種々と準備にその一日は謀殺されて、さて翌16日となると撮影屋に一番禁物な雨だ。最もこの記念映画に重要な位置を占める記念式はなんと残念がつても撮影は不可能事だ。感光の弱い秋の雨天の室内ときては、施すべきがない。残念だが見合わせた。さてこの雨は撮影の最後の日まで祟った。でも予定より二日も日延べをして約三千六百尺を撮影して諏訪に帰った。いまだカッティングをしないが、大体の撮影寫面は募金檄文中掲載の通り。

先づ差し当たり費用の関係で原版だけを制作しました。陽画は全国同窓会員の寄付によって造り上げる予定です。原版の費用も募金部の阿部先生から無理な借金をしたので。東京支部の発案者の全責任を負うて募金に活動しておられるようですが、同窓諸氏の熱烈な御後援によって一日も早く完成するを得んことを望みます。」（『東北学院時報』69号 大正15年12月10日）

これをみるに、同窓会東京支部が負担するとなっていた原版作成のための費用500円も撮影時点では足りなかったようである。

ともかくにも、東北学院にとってのこの歴史的ビッグイベントは、様々な人の努力と献金によって活動写真（動画）としてこの世に残されたわけで

ある。

## 第二節 寄付金のその後

その後、寄付の状況がどうなったのか詳細はわからないが、『東北学院時報』に少しでも情報が掲載されているので記しておく。

- 『東北学院時報』70号2頁（昭和2年2月22日）  
【東北学院創立四十年記念活動写真の寄付について】（東京支部長平山六之助）

「此の活動写真は創立者並に老院長に捧ぐる同窓生の思慕の花輪として贈呈するのでありますから、右所要経費壹千四百圓の中へ應分御寄附を仰ぐ次第であります。私共関係者は今一生懸命募金に努力して居りますが、此の不況の際と思ふ様に捗らず誠に困って居ります。」

- 『東北学院時報』70号4頁（昭和2年2月22日）  
【活動写真フェルム寄附金報告】

50銭～12圓 19件（合計70円50銭）

- 『東北学院時報』71号1頁（昭和2年6月30日）  
【活動写真フィルム寄附金報告】

※紙面破損の爲一部確認できず

3圓～15圓 13件以上（合計57円以上）

「同窓会本部より四百三十圓立替であるのですが、此方の融通がとれぬ爲め會計上非常に困難いたしております。何卒多数多額の御寄附御約束下さる様御願ひいたします。」

- 『東北学院時報』71号2頁（昭和2年6月30日）  
【再び同窓諸兄に檄す】（東北学院同窓会長出村悌三郎）

「母校創立者の一人なるホーイ先生は悼ましくも昇天せられました。昨秋創立四十年記念祭の折に、活動写真に斂めた先生の英姿は、ゆくりなくも永久の記念物として活きた先生の面影を伝えるものとなりました。此写真は是非同窓生の力で一日も早く完成せねばならないものです。

然るに時宛も財界不況の際に當り、爲めにその進行を妨げられ、さきをお願いした寄附金も未だ其必要額に達し得ず、寔に遺憾に堪へません。仍て此際更に各位の愛校心に訴へて一日も早くこのフィルムを完成させたいと存じます。左の規定により何卒御送金を御願ひ致します。

一、寄附金額 御随意

一、寄附申込期限日 昭和二年七月末日」

- 『東北学院時報』72号3頁（昭和2年9月30日）  
「活動フェルムの寄附も是非四百圓まで積み立てたいものと願つて居ります」

- 『東北学院時報』72号4頁（昭和2年9月30日）  
【活動写真フェルム寄附報告】

1圓～2圓 2件（合計3円）

「累計七十一圓五十銭也」

- 『東北学院時報』77号6頁（昭和3年7月10日）  
【同窓會計決算報告（昭和二年度分）】

「特別會計

収入ノ部 フェルム代へ寄附 一七二、五〇

支出ノ部 鈴木三郎氏へ拂 四三〇、〇〇

差引不足 二五七、五〇」

- 『東北学院時報』81号4頁（昭和4年3月5日）  
【昭和三年同窓会・計決算報告】

「特別會計

フェルム代不足分 二五七、五〇」

- 『東北学院時報』85号3頁（昭和4年11月15日）  
【東北学院同窓会昭和三年度決算】

「特別會計

前年繰越不足金 フィルム代 二五七、五〇」

- 『東北学院時報』87号4頁（昭和5年3月10日）  
【昭和四年度東北学院同窓会・計決算報告】

「特別會計報告

A東北学院創立者記念活動写真フェルム會計

収入ノ部 前年度繰越不足 二五七、五〇」

1930（昭和5）年3月の昭和4年度同窓会会計報告を最後に、活動写真フィルムに関する記述は見当たらなくなる。では判明した範囲で少し整理してみよう。

寄付金収入としては、昭和二年度分まで同窓会員から累計172円50銭であった。一方、支出面から見ると、同窓会から鈴木氏へ430円を払っており、寄付金172円50銭を差し引いて同窓会としての不足分（同窓会立替分）が257円50銭であることに矛盾はない。

昭和3年度以降募金された形跡は見受けられず、最終的に集まった募金は172円50銭であったと考えられる。募金活動は当初目標の1,400円には遠く及ばず、原版撮影に必要な500円にも届かなかったということになる。

では、同窓会が立て替えた257円50銭はどのようなのであろうか。これについては、昭和5年度同窓会決算報告の支出の部に、突如として「フェルム代292円50銭」が出てくる。このフィルム代が何を指

すのかわからないし、「活動写真フィルム代」ともなっていないので推測の域を出ないが、おそらく立て替え不足分に充当したものではないだろうか。差額が35円あるが、これが何に支出・補填したものかはわからない。しかし、昭和5年度に何かを撮影したという記録はないし、大きなイベントも特になかった。まして当時の292円ともなれば大金である。同年の同窓会の会費収入が1,597円であるから、その5分の1に相当する金額を使って何かを撮影・購入したのであれば、当然記録に残ってしかるべきである。立て替え不足分に充当して、募金活動を終えたと考えるのが自然であろう。

### 第三節 フィルムの行方

さて、それでは肝心の撮影されたフィルムはどうなったのであろうか。前述の鈴木三郎氏の撮影後記に「先づ差し当たり費用の関係で原版だけを制作しました」とある。この原版と呼ばれているものが、現在史資料センターに残されている35mmフィルム(写真19)のことを指すと思われる。しかし、その後の40周年フィルムに関する記述は、40周年記念式典から33年後の1959(昭和34)年に刊行された『東北学院七十年史』まで見つけることができない。

〔(要約) 創立四十周年記念式及び専門部校舎落成祝賀会が盛大に挙げられるについて、同窓会東京支部が発起して活動写真に撮影する企画を起こされた。長野県諏訪に独立のプロダクションを経営している同窓生鈴木三郎に制作を依頼した。フィルム二本の制作費として一千四百円の予算を立て、これを全同窓生の寄附に仰ぐこととし、差当り陰画撮影に要する五百円は東京同窓生の寄附に訴えることとし、十月十六日から二十日までの四日間で大略次の撮影を完了した。(撮影場面一覧) 然しその後会計上の紛糾から募金が意の如く進展せず陰画のまま永く製作者鈴木三郎の手に残されたが、昭和三十年母校に買いとられ陰画のまま保存した。〕(『東北学院七十年史』437~438頁)

残念ながらこの記述を裏付ける資料が見つからないため、現時点ではこの記述を全面的に信用するしかない。撮影費用と原版制作は寄付金と同窓会負担分で賄われたことは前節で明らかにしたが、フィルムはなぜかその後、鈴木三郎氏のもとで手つかずのまま保管されたようである。そしてどうい



写真19 40周年フィルム (一部)

経緯かわからないが、30年後の70周年を機に、東北学院が購入したというのだ。この購入の経緯が気になるところであるが、現在ではその時のことを知る者もおらず、また資料として何かに記述が残されているものも見つかっていない。今回は時間の関係でできなかったが、法人・同窓会などの理事会記録や会計記録を丹念に調べることで何か見つかるかもしれないので、今後の課題としたい。

### 第四節 買い取られた「40周年フィルム」のその後

さて、創立70周年時に東北学院が購入したことは前述の通り『七十年史』の記述からわかったが、この40周年フィルムはその後はどういった道を通ったのだろうか。「昭和三十年母校に買いとられ陰画のまま保存した」との記述であるが、実はまさにこの通りであったようだ。というのは、次にこのフィルムが歴史の表舞台に現れるのは、これからさらに30年後の1986(昭和61)年の創立100周年時まで待たねばならなかった。

東北学院創立が1886(明治19)年であるから、1986(昭和61)年が創立100周年となる。東北学院も他の私立学校と同様、創立100周年を盛大に祝うことになった。一例をあげると、記念式典・祝賀会(写真20)は当然として、藤崎デパートでの展示会(写真21)、記念映画「東北学院の100年」制作、記念特番のテレビ放映、同窓生であるさとう宗幸氏の歌う記念レコードの発売、NHK交響楽団演奏会、各設置校での記念講演会・記念運動会・招待試合、など多岐にわたった。その中でも特に長期間にわたり、また莫大な労力と関係者の心血を注いで作られたのが『東北学院百年史』(写真22)である。「通史」「資料篇」「各論篇」の三部構成で、総ページ数3,000頁の大作である。構想から刊行完了まで10年以上の歳月を費やして書かれたこの百年史は、刊行から35年が経過した今現在でも東北学院の歴史を調べるた



写真20 100周年記念祝賀会



写真21 展示会



写真22 東北学院百年史

めの第一の資料となっている。

さて、そのような一大プロジェクトであった百年史編纂事業であるから、事務組織もそのために整備された。1981（昭和56）年に「創立100周年記念行事準備事務局」が設置され、1988（昭和63）年に「法人本部資料室」へ改組となり、1990（平成2）年6月には「広報室資料係」へと移行した。現在、東北学院史資料センター調査研究員として事務室業務も担っている日野哲氏は、1983（昭和58）年6月に準備事務局に配属となり、1990年6月の「広報室資料係」への改組に伴う異動までの7年間に渡り、100周年記念事業・行事全般に携わり、百年史の刊行や

記念映画制作に尽力した人物である。

100周年記念事業の大きなものの一つに、記念映画「東北学院の100年」の製作があるが、実はこの映画の中に、40周年フィルムの映像が一部使われている。この記念映画に使用された映像こそが、40周年フィルムが一般の目に触れる機会を得た最初なのである。撮影されてから実に60年が経過していたことになる。

なぜ70周年時に購入されたフィルムが、100周年時まで表舞台に出てこなかったのかは現在まで謎のままである。わずかに、『東北学院時報』435号（1986年12月15日）に掲載された、「創立40年の記録映画フィルム見つかる 三校祖の英姿ふたたび 大正15年当時の仙台市街風景も」という記事が当時の経緯を知る唯一の資料である。この記事には、以下のように述べられている。

大正十五年十月に挙行された創立四十年記念式ならびに専門部校舎（現土樋校舎本館）新築落成式などを記録した三十五ミリの映画フィルム九巻が学内から見つかった。（中略）このフィルムは、土樋校舎本館の倉庫に保存されていたもので、『東北学院百年史』編集のための学内資料再調査の際に見つかった。百年史編集資料室での慎重な確認作業の結果、創立四十年の際に撮影された極めて貴重なフィルムあることが判明し、また当時の本紙東北学院時報に詳しい記述があることもわかった。（中略）百年史編集主任の出村彰教授はフィルムの発見について、「平凡な感想ですが、灯台もと暗しの思いです。今まで何度も調べていた場所からこのような貴重なものが見つかるとは、今さらながら驚いています。（中略）それにしても、当時、同窓生たちの努力にもかかわらず、千四百円の募金がどんなに困難であったかは、それが出村悌三郎専門部長の年俸に相当すると言えばわかり頂けるかもしれません。六十年來の夢がようやく叶えられることを共に喜びたいものです」と語っている。（中略）原版のフィルムは、このままでは見るのが困難なため、十六ミリのポジフィルムに複製され、さらに手軽に見られるものとしてビデオテープにも転換された。三校祖の動く英姿など数シーンは、（中略）創立百周年「記念映画」に採り入れられる予定になっている。（『東北学院時報』435号1986年12月15日）

この記事を読む限り、40周年フィルム9巻は、東北学院が購入後、30年もの間、誰の目に留まることもなく倉庫に眠っていたことが窺える。いったいなぜこのようなことになってしまったのかは、今となっては誰にもわからない。

ところがである。実は本稿執筆終盤に、この件について新たな発見があったので追記しておく。たまたま筆者が別件で調べものをしていた際、この40周年フィルムから抜き出したと思われる写真が使われた書籍があったのである。

それは、本学の教員であったウィリアム・メンセンディク先生（写真23）が著した『A MAN FOR HIS TIMES The Life and Thought of David Bowman Schneder Missionary to Japan 1887-1938』（東北学院刊 1972年）（写真24）で、この書籍は『シュネーダー博士の生涯』（東北学院刊 1976年）（写真25）という邦題で訳本も出版されている。

書籍に掲載されている写真はシュネーダー一家の写真（写真26）であるが、背景や服装から考えて40周年フィルムと同じものであると言えるだろう。この時にフィルムと同時に写真を撮影したという記録はないし、そういった写真も残されていないことを



写真23 ウィリアム・メンセンディク先生

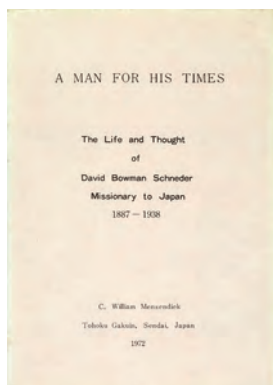


写真24  
『A MAN FOR HIS TIMES』

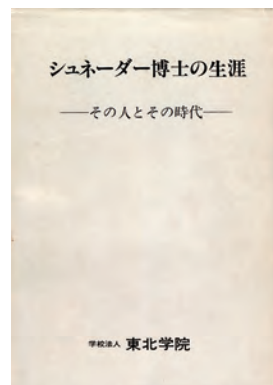


写真25  
『シュネーダー博士の生涯』

考えると、フィルム（写真27）から抜き取った写真であると考えるのが妥当である。



写真26 掲載写真



写真27 フィルム映像

そうなる、フィルムが購入後全く利用されずに30年間放置されていたわけではないということになる。フィルムが買い取られたのが1955年前後と推測され、メンセンディク先生が著書を刊行したのが1972年、フィルムが総務課倉庫から「発見」されたのが1986年である。

書籍に掲載の写真には「late 1920's」との説明があり、訳本の方には「大正年間」との解説が付けられている。実際は40周年時なので1926（大正15）年のものである。メンセンディク先生が年代を特定していないところを見ると、1972年当時、このフィルムが40周年の時に撮影されたものであることを把握していなかったと考えられる。なお、訳本は本学の教員であった笹原昌先生（写真28）と出村彰先生（写真29）によって翻訳されたものである。出村彰先生は前述の100周年時のフィルム発見時、時報に発見の驚きの弁を残している。このことからわかるように、出村先生はこの写真（フィルムを元に作成）が40周年の際に撮影されたものであったことをご存じなかったと思われるし、おそらく、35mmフィルム（40周年フィルム）が存在していたことも訳本執



筆当時は知らなかったものと思われる。



写真28 笹原昌先生



写真29 出村彰先生

以上のことから推測すると、40周年フィルムが1955年前後に買い取られてから、1972年頃までは一部の人（メンセンディク先生や、『東北学院七十年史』の執筆者の花輪庄三郎先生）にはその存在が知られていた。しかし、訳本を執筆した笹原先生・出村先生ですらその存在を知らなかった、ということになるだろうか。

さて、ここでまた一つ疑問が生じてしまった。メンセンディク先生は1993年に定年退職され、その後も嘱託教授として大学に残られた。40周年フィルムが「発見」されたのは1986年のことであるから、当然メンセンディク先生はその時は大学に居られたわけである。メンセンディク先生と出村彰先生は懇意にされていたというのに、両名の間で40周年フィルムについて情報は共有されていなかったのだろうか…。

当時の関係者はすでに東北学院を離れており、おいそれと事情を聴ける状況ではないのだが、実は40周年フィルムが発見された当時の生々しい様子を知る人物が幸いにも身近にいる。前述の当センター調査研究員である日野哲氏である。今回、本稿を執筆するにあたり、日野氏から当時の様子や経緯を詳細に聴くことができた。いまだもって資料として残されていない当時の様子を、今回初めて記述資料として残すことができる機会を得たことに感謝したい。

##### 第五節 発見された「40周年フィルム」

1986（昭和61）年10月9日、昼食から戻った日野氏が本館2階の総務課に立ち寄ると、当時総務課長補佐であった石井勝雄氏が、何やら古そうな珍しいものが総務課の倉庫で発見されたので一緒に確認してほしいとのことであった。当時の総務課倉庫とは、現在の本館2階総務課内の給湯室部分のことである。日野氏はすぐに石井氏と二人でその発見されたものを確認した。金属製の丸いケースが九つあ

り、早速手に取ってみた。それが映画フィルムのものであったことはすぐにわかったが、ケースやリールにタイトルなどは見られなかったため、それが何を収めたものかはすぐに判断できなかった。フィルムを引き出して見てみたが、コマが暗くてよくわからない。とりあえず古いもののようなということは想像できたので、もしかしたら大発見かもしれないと心が躍った。そして、とあるフィルムの冒頭部分を引き出して見たところ驚いた。三校祖らしき三人が並んで映っていたのだ。「これは大変だ、えらいものを見つけてしまった。これはすごく貴重なものだ、世紀の大発見かもしれない」とは日野氏の言葉である。

なお、この時の日野氏の記憶が信頼するに足る証拠として、現在我々が管理しているフィルムNo.2の冒頭には、再建された東二番丁の中学部校舎に並んで入る三校祖の姿が映されている。

日野氏はすぐに室長であった松浦平蔵氏、室長補佐であった樋渡順一氏、そして百年史編集主任であった出村彰先生に事の経緯を連絡した。日野氏への聞き取り調査時、その後のことは時系列がはっきりしないようであった。それがかえって当時の日野氏の興奮度合が窺い知れるようで、筆者はむしろリアリティを感じた。

その後の経緯については、日野氏が大切に保管してきた当時の資料「創立40年記念活動写真について」（11月10日付）に詳細に記されている。それによると、フィルムが発見されてすぐに、100周年記念映画の製作を担当している東北映画製作株式会社に確認を依頼。発見されたフィルムは35mmのネガ・フィルムで、当時では映画館など特殊な場所でしか使用されていないもので、しかも破損している可能性もあり、慎重に確認が必要である、と記されている。結局、映画社の努力により県内でも1台と思われる機械（フィルム編集用の手動式ビューワー）を入手し、10月29日に東北映画社内において、松浦氏・樋渡氏・日野氏立会いのもとに確認の結果、創立40周年の際に撮影された極めて貴重なフィルムであることが判明した。原版がネガ・フィルムであることもあり、人物の確認は甚だ困難であったが、押川・ホーイ・シュネーダーの三校祖は確認できたので、早速同日の理事会に報告し、了承を得て原版から16mmのポジ・フィルムに変換することとした。これは、原版のネガ・フィルムのままでは観ることができないため、学内機材でも見られる状態にするための措置であった。同資料には、「来週中にも作業が

完了する見通しである」と記されている。その後、学内の資料で確認した結果、『東北学院時報』と『東北学院七十年史』にこのフィルムに関する記事が掲載されているのを発見し、ようやくフィルムの詳細が分かったとのことである。

日野氏保管の資料を見ると、10月9日に発見、同月29日に内容確認、同日に理事会へ報告。11月10日付け資料に「来週中にも作業完了予定」とあり、稟議書の起案日が同月19日である。これが決裁手順としておかしいことは本学職員ならすぐに気がつく。ここから容易に想像できることは、通常の決裁手順を無視してでも、早急にフィルムの変換処理をしなければならなかったこと、またそれだけこのフィルムが貴重なものであると学校上層部も認識していたということである。

なお、なぜにそこまで急いで作業を進めなければならなかったのかというと、この時すでに、前述の100周年記念映画「東北学院の100年」の製作がほぼ佳境を迎えており、今回発見されたフィルムの映像を映画内に挿し込むためには、大至急フィルムを利用できる状態にする必要があったのである。事実、「東北学院の100年」では約1分間に渡り、三校祖が並び立っている映像、専門部校舎落成式、中学部記念運動会などのシーンが収められている。

こうして、関係者の努力と大学上層部の理解が実を結び、40周年フィルムは発見から驚くほどの短期間で100周年記念映画に挿し込まれ、遂に60年の歳月を経て世に知られることになった。

当時、東北映画社が作成した資料には次のような記述がある。「尚35ミリモノクロネガフィルムは、非常に発火性の高いフィルムのため、保管には注意が必要です。」筆者が少し調べたところによると、40周年フィルムに使われているフィルムは、国内で1950年ごろまで使用されていたナイトレート・フィルムと呼ばれるもののようで、40℃でも自然発火した報告があるほど可燃性が高いものである。ちなみに、1984に発生した東京国立近代美術館フィルムセンターの火災は、映画フィルムの自然発火によるものとされている。東北学院に買い取られてからの30年間、特に処理が施されるでもなく倉庫に放置されていたにもかかわらず、よくぞ発火しなかったものである。

また、『東北学院百年史』には、「特別な配慮のもとに保管されたわけではない割にはフィルムの状態は良好で、百周年記念の思いがけない副産物となった」という記述がある。我々がこのフィルムを

今の世にこの目で見られることは、まったくの幸運であったと言えるだろう。

以上は、筆者が日野氏から聞き取り調査した内容と、日野氏が大切に保管してきた資料から判明したことである。日野氏の多少の記憶違いはあるかもしれないが、当時の資料を基に記憶を辿っていただいたため、ほぼ忠実な史実であると思ってよいであろう。日野氏の元には今も東北学院に関する様々なことを尋ねに訪れる同窓生・教職員が後を絶たない。その姿はまさに「東北学院の生き字引」の如しである。

## 第六節 フィルムの編集とその後の利用

100周年記念映画にその一部が利用された40周年フィルムであったが、35mmネガ・フィルムから16mmポジ・フィルムへ変換するとはほぼ同時に、出村彰先生・日野哲氏の手によって編集され、22分弱のフィルムとビデオテープも作成された。この映像には、各シーンの冒頭に簡単なタイトルが入った編集が施されていた。この映像は、その年（1986年）の12月のクリスマスに上映会が行われたようである。この時に解説を担当したのは、日野氏の記憶によると出村彰先生であったとのことである。

しかしそれ以降、この映像が教職員や同窓生、一般の方の目に触れることはほとんどなかったようである。なぜなら、このフィルムは無声無音であり、キャプションも各シーンのタイトルくらいで、上映の際には解説がないと理解が難しい状態であった、というのが大きな理由であろう。

この編集済み映像が再び注目を集めるのは、それからさらに30年ほど経過した、2015年まで待たねばならなかった。

2015（平成27）年2月、東北学院史資料センター公開シンポジウム「歩く三校祖－創立四十周年・創立百周年の記録映像を見ながら－」が開催（写真30）された。この時は、100周年当時に編集されたフィルムの映像をVHSテープからデジタルデータに変換したものを使用して、志子田光名誉教授が各シーンを解説する方法で行われた。『東北学院時報』726号（2015年3月15日）によると、聴衆の中には、百周年記念映画製作を担当し、40周年フィルムの検証に尽力した当時の東北映画製作株式会社の庄子道雄氏もおられたとのこと。百周年当時の関係者にとって、いかにこの40周年フィルムと100周年記念映画が大きなものだったのか窺える。

このシンポジウムの後、翌2016年1月に志子田名

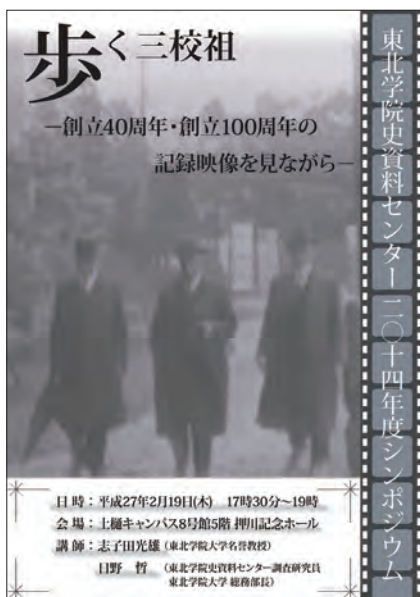


写真30 シンポジウムチラシ

菅教授がこのビデオに独自のキャプション・解説を付加したものが作成された。これは、志子田先生が自らパソコンを駆使して作成されたものである。このキャプション付き映像を作成するにあたり、志子田先生と日野氏の間で綿密な打ち合わせが行われた。今回初めてその時の資料を拝見させていただいたが、並々ならぬ苦勞の跡が窺えた。

これ以降、40周年フィルム映像が利用される際は、このキャプション付き映像が提供されることになった。なお、このキャプション付き映像は、フィルムのスピードを調整して、映像内の人物が歩くスピードなどは、違和感を感じない仕上がりとなっている。そのため、時間も22分弱から43分へと大幅に増加している。

#### 第七節 ブランディング事業と4Kデジタルリマスター

2016（平成28）年から、東北学院大学は文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業」に選定された。史資料センターもこの事業の一部門に名を連ねたため、各事業に全面的に協力することになった。そして、この事業の一環として、2018・2019年度の二年間に渡って、40周年記念フィルムの4Kデジタルリマスター化が計画され、実行に移された。筆者は2017年6月に史資料センターに配属されたため、この事業には当初から関わることが出来たことは幸いであった。

この事業は、フィルム原版から修復・クリーニング作業を行い、映像を4Kデジタル化するというものであった。予算はブランディング事業であったが、種々の作業は史資料センターが担当することに

なった。事業を企画する前に、この最新技術がどのようなものであるかサンプル動画を作成してもらったのだが、これを見て我々は驚き、そして感動すら覚えた。このサンプル画像（写真31・32）ではわかりにくいかもしれないが、これまで不鮮明でよくわからなかった部分が、見違えるように奇麗に見えるようになったのである。実際の映像を「東北学院の40年」では是非ご覧いただき、その鮮明な映像をご堪能いただきたい。



写真31（サンプル）クリーニング前



写真32（サンプル）クリーニング後

なお、この40周年フィルム9巻の4Kデジタル化には、2年間で200万円以上もの経費がかかっている。決しておいそれと簡単にできる事業ではなかった。しかし、今から35年前にネガフィルムからポジフィルムを複製、さらに編集してビデオテープを作成してこれまで利用に供されてきたように、この4Kデジタル映像は、いずれ技術が進歩し、何かの機会に再び予算化されるまでの間、東北学院の歴史を知る貴重な映像資料として残り、利用され続けることになるであろう。今回の作業が、多額の予算をかけてでもやる価値のあった非常に意義のある事業であったと、後世の関係者に評価されることを期待している。いま我々が、このフィルムを消失させるこ

となく、現代の世まで残してくれた東北学院の先達たちの努力に感謝しているように。

### 第三章 記念映画「東北学院の40年」制作について

前章の4Kデジタルリマスターを完了した映像データを利用し、2020年度になっていよいよ再編集しての映画製作へと取り掛かることになった。本章では、実際の作業の過程や映画本編に盛り込めなかった情報、制作時のエピソードなどを記しておきたいと思う。

ちなみに、この「東北学院の40年」の制作にあたっては、約150万円程度の予算がかかっている。製作期間はメインスタッフ4名で約半年。この映画が今後あらゆる場面で上映されることと、4Kデジタル映像なので、今後しばらくはこのデータを利用できることを考えれば、有意義な先行投資であったと考えている。ぜひ映画をご覧になった方々や、本稿を読んでくださった皆様がその目で確かめてご判断いただきたい。

#### 第一節 構成について

2020年度は過去2年間で制作した40周年フィルムの4Kデジタルデータを基に、再度編集を施し、新規の解説・BGM・ナレーションを加えて短編映画を作成することになっていた。しかし、新型コロナウイルスの流行により、その計画は著しく停滞せざるを得なかった。我々職員は4月末から在宅勤務が導入され、思うように作業を進めることができず、また会議の招集なども厳しく制限されたため、打ち合わせもままならなかった。7月に入り在宅勤務等が緩和され、ようやく具体的な作業が動き出した。

一番最初のミーティングは7月9日に開催されている。まずは、史資料センターのスタッフである日野哲氏、佐藤匠氏、筆者の三人で、業務の分担を決めるところから始めた。一番の基本となる40周年フィルムの再構成を日野氏が担当することになった。100周年時の記念映画「東北学院の100年」制作にも携わった日野氏が最も適任であることは疑いようもなかったし、日野氏には再編集するにあたってある想いがあり、それを反映させたかったところもあった。その想いというのは、東北学院40周年とは、東北学院の「最も良い時期」であったと日野氏は考えており、創立から40周年に向けて階段を足早に駆け上がっていく東北学院の姿をストーリーの主軸にしたいとの想いであった。40周年をもって絶頂期と考える理由は、本稿第一章で触れている通りで

ある。このような理由から、40周年フィルムは9巻で約48分の映像があるのであるが、その中から厳選して、東北学院発展に関わる部分（主に校舎を中心に）、仙台市の様子が見える部分、そして式典・祝賀行事の部分を採用したのである。今回採用されなかった映像の中には、当時の授業風景などもあり、今後何かの機会に披露できればと考えている。しかし、フィルム自体は時系列やテーマ毎になっているわけではなく、あちこち継ぎ接ぎだらけなうえに、現時点ではそれが誰なのか、それが何なのかよくわからない部分も多いため、今後の整理や研究が待たれる。

続いて考えられたのは、映画全体の構成であった。映画の中心となるのは40周年フィルムの映像であるのは当然であったが、今回再編集された映画は、今後の東北学院の歴史を語る際の様々な場面で使用されることになるであろうと筆者は考えていたので、可能な限り東北学院発展の歴史が一般の方にもわかるような全体構成にしたいと考えていた。そこで、映画本編の冒頭部分に、仙台神学校、普通科校舎、中学部校舎、専門部校舎と拡大していく東北学院の歴史がわかるような新規の解説を入れることにしたのである。その際、地理的な関係性がわかるように、かつ当時の雰囲気も感じられるように、あえて古地図を用いたうえで、現在の建物や通りの名前なども挙げて、視聴者がイメージしやすいように心がけた。

また、このフィルムの来歴も必ず映画に盛り込みたいと筆者は考えていた。前章で触れたように、このフィルムの辿った道は非常にドラマティックであると感じていたからである。そこで、映画の一番最初の部分にこのフィルムが辿った数奇な運命の解説文を入れたのである。なお、100周年当時に編集されて作られたビデオテープの冒頭にも、同じような解説文がつけられている。今回これに倣ったことはもちろんであるが、同じような演出から始まる映画にしたかったという側面もある。これは、筆者なりの先達への畏敬の念からである。

ちなみに、タイトルである「東北学院の40年」であるが、これは日野氏の要望であった。もちろんこれは、日野氏が35年前に制作に携わった「東北学院の100年」に倣ったものである。日野氏曰く、「余計な形容詞などを付けずに、観た人が多様な受け止め方ができるように」という思いから付けられた。

せっかく手に入れたクリアな映像を再編集するわけであるから、それを実感してもらう必要もあると考えた。それが冒頭の比較映像である。筆者がサン

プル映像を見た時の感動を、この映画をご覧になる方々にも感じて欲しいと願ったのである。どのシーンを使うか迷ったが、今回の4Kデジタル化でクリアで鮮明な映像を手に入れたことにより、新規の発見が多数あった。特に、顔や文字がはっきりと確認できるようになったことが非常に大きかった。その中でも、今回の最大の成果とも言えるのが、今回この部分で採用した押川の演説のシーンと、シュネーダー邸で映る日本人女性が布施豊世であると判明したことである。それならば、いかに今回の映像が奇麗になったのかを知らしめた上で、そのことで得られた成果も報告できれば一石二鳥と考え、この二つの場面を入れることにした。最初はどちらのシーンも動画で比較するように考えていたのであるが、古いほうの映像がVHSテープからデジタルデータに変換したもので、非常に映像が荒く、映像制作会社側から動画に耐えないのでやめたほうが良いと意見をもらったため、あのような静止画（写真33・34）を使うこととなった。今回採用した演出でも、十分に映像がクリアになったことは理解してもらえらるだろう。

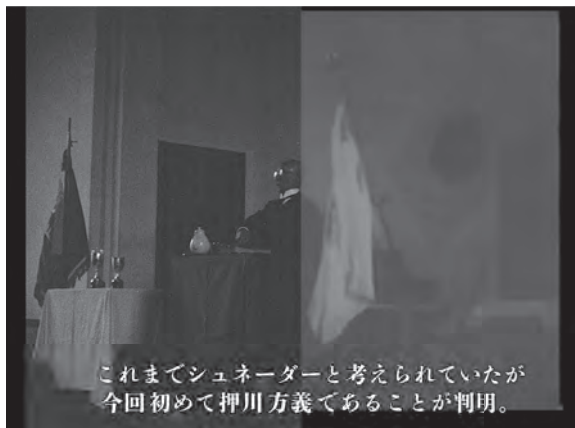


写真33 押川の演説シーン



写真34 布施豊世の登場シーン

## 第二節 ナレーション・BGMについて

今回の再編集作業での前回動画（100周年時編集や志子田キャプション追加動画）からの大きな変化は、映像再編集と新規解説のほかに、ナレーションの追加とBGMの追加が挙げられる。

まず、ナレーションの追加であるが、これは大部分を日野氏に文案を作成してもらった。最大の困難は映像の長さとなレーション原稿の長さを合わせなければならなかったこと、また全体の尺が合っても、映像のタイミングとなレーションのタイミングが合っていないと視聴時に違和感を感じてしまうため、その調整に難儀したことであった。これは数回にわたっての校正のたびに、映像の尺が変わったりするため、最後の最後まで調整が続けられた。また、映像の尺はBGMにも左右されるため、映像・音楽・ナレーションの三つの調和を取ることが非常に難しかった。映像制作の難しさを知り、良い経験をさせていただいた。

また、ナレーターについては、制作会社からプロのナレーターのボイスサンプルを3人分いただき、編集班でそれを聴いて選定した。さすがにプロのナレーターの方々だけあってどれも捨て難かったのだが、古い映像と厳かなBGMに声を当てていただくので、落ち着いた声を基本としつつも、未来へ向けて上り調子の東北学院を表現したかったため明るく爽やかな雰囲気も醸し出していた松浦貴広氏<sup>5</sup>に決定した。なお、松浦氏は本学の同窓生でもあるので、まさにこの映画に相応しい方であった。

次にBGMについても触れておきたい。今回BGMを映像に付加するにあたり、最初は歴史考証と編集原案作成を行っていた4名で進めていた。前述の史資料センタースタッフである日野・佐藤・安部（筆者）に、ブランディング事業事務局の大沼友行氏を加えた4名である。なお、毎週の作業進捗報告会や編集検討会は、基本的にこの4人で進められていた。佐藤氏は主に資料の検索・収集・作成、キューシートの作成管理などを担当し、大沼氏は連絡調整や映像仮編集、予算管理などを担当していただいた。

実はBGMは映画製作企画の最初期の構想では、近い将来聴くことができなくなると考えられていた多

<sup>5</sup> ナレーターの「松浦貴広」氏の漢字表記が、記念映画「東北学院の40年」のエンドクレジットでは「松浦貴裕」と誤っております。この場を借りて謹んでお詫び申し上げます。後日修正させていただきます。

賀城キャンパスと泉キャンパスのパイプオルガンで演奏・録音してはどうかとの案があった。結局、録音環境を用意するためには莫大な経費がかかることがわかり、予算上の問題から断念せざるを得なくなり、立ち消えとなってしまっていた。そこで、既存の音源を使用することで検討を始めたのであるが、いざ話し合いを始めてみると、思いの外問題が噴出してしまった。東北学院の歴史を観る映画である以上、やはり音楽は宗教音楽やクラシックがいいのではないかと考えてみたのだが、そもそもメンバー4人のうち3人がそういった音楽については門外漢で、唯一日野氏だけが宗教音楽の知識を持ち合わせていた。しかしその日野氏ですら、その音楽の持つ歴史背景や意味を知らないと、採用した音楽が場にそぐわないものになってしまう可能性があり、選曲は難しいということになってしまった。

そこで、教養学部言語文化学科教授であり、オルガニストとして音楽の専門家である今井奈緒子先生に協力を仰ぐ事にしたのである。打診したところ、今井先生には快くお引き受けいただき、選曲についてはひとまず問題が解消したかに思われたのであるが、そこからこのBGM問題は新たな問題を抱えてしまうことになる。今井先生は選曲するにあたり、同じく教養学部言語文化学科准教授(当時)であり、映画に関する研究もされている山崎冬太先生にアドバイスを求めた。その結果、素晴らしい選曲をしていただき、音源の紹介もしていただいた。紹介いただいた音源の中には、本学で開催されたコンサートの音源などもあったが、市販されているCD音源なども含まれていた。そのため、それらの音源を映像制作会社に依頼して、権利関係を調べてもらったところ、こちらが想定していない金額の著作権料が発生することが分かった。特に、海外の会社に権利がある音源は、その著作権・著作隣接権処理の煩雑さや高い著作権料、支払い方法などの問題で、到底利用することは考えられなくなってしまった。

編集班がもはや著作権フリーの音源を使用するしかないと考えていたところ、調査結果を報告していた今井先生から「それなら私がオルガンを弾きましょうか」とのご提案をいただいた。もともと、映画の最後に使用する校歌の音源についてだけは、尺の問題や曲調の問題から他に適当な音源が見つからず、今井先生に演奏をお願いし、それを録音して使用する事にはなっていた。しかし、十分な録音環境も用意することができないうえ、何曲も演奏していただくという発想は我々編集班にはなかった。ま

た、今井先生もBGMを選曲する段階で、「BGMがパイプオルガンの音だけというのは、映画音楽として問題があるのではないか」というお考えであったので、他の楽器も入った音源を提案していただいていた、という事情もあった。

こうして、映画に使用されるかなりの部分のBGMは、今井先生の演奏によるものとなった。具体的に言うと、専門部校舎屋上から仙台市街を映したシーンでの「小フーガ」(J.S. バッハ)、式典などの一日目の「讚美歌メドレー」、四日目の運動会などの「勇者は帰る」(ヘンデル)、そして映画の最後に使用された「東北学院校歌」は、今回のためにわざわざ今井先生が演奏してくださったものである。この録音は、土樋キャンパスラーハウザー記念東北学院礼拝堂で行われた。なお、「讚美歌メドレー」は、40周年記念式典当日に歌われた讚美歌からチョイスしている。この選曲は今井先生のご協力なくしてはあり得なかった。

他のBGM音源についても簡単に触れておく。映画本編冒頭の愛宕山から見た仙台市街のシーンから流れる「パッサカリヤ」(J.S. バッハ)は、2008年に泉キャンパス礼拝堂で開催された今井奈緒子先生リサイタル時の音源である。三日目の園遊会のシーンで流れる「ハレルヤコーラス」(ヘンデル)は、2011年の震災復興祈念演奏会の時の音源を使用させていただいた。

このように、リサイタルや演奏会の音源を使用しているため、音質があまり良くなかったり、ところどころ咳払いの音や雑音などが入ってしまった部分がある。しかし、今回はあえてそこには目を瞑ることにした。もちろん権利関係や予算、時間的な制約という問題からこのような状況に至ったことは否定できないが、様々な制約がある中で、制作関係者が知恵を出し、先生方にも協力していただいて、東北学院のパイプオルガンの音を後世に残すことに意義があると考えたからである。

今回、素材を新たに作成したという意味で、もう一つだけ紹介しておく。映画の最後の部分に使用した、校旗のカラー写真(写真35)である。これは、恥ずかしながら筆者が今回のために撮影したものである。なにぶん素人仕事であるので、写真の質はご容赦願いたい。実は、映画製作の終盤まで、ここにカラーの校旗の写真を入れる予定はなかった。しかし、校旗の解説には色の説明が不可欠であり、40周年フィルムの映像だけでは、色の説明に説得力が足りない、またはイメージが伝えづらいと考えたの

である。なお、映画に使用した写真の校旗は、今現在公的に使われている校旗で、これは100周年記念の際に作り直されたものである。おそらく、40周年時に使用されていたフィルムに映されている校旗が学内のどこかに保管されているものと思われる。実は、それと思われる古い校旗が史資料センター内倉庫の奥から最近になって発見された。今回はそれが40周年時に使用されていた校旗であることを検証する時間がなく、紹介することが出来なかった。今後検証作業を進めていきたいと考えている。



写真35 現在の校旗

### 第三節 新たな発見①（押川方義の演説）

この度の映画製作にあたり、再編集作業と並行して、あらためて歴史考証を試みた。これまで編集された映像は、前述のように、当時百年史編集主任であった出村彰先生（現名誉教授）（写真36）と、東北学院の歴史を独自に研究してこられた志子田光雄名誉教授（写真37）のお二人の知識とご尽力の結晶である。今回、不遜ながらも若輩である我々が、あえてそこにあらたに歴史考証を試みようとしたのは、それだけ今回の4Kデジタル化した映像が、クリーニングの結果、極めて鮮明で素晴らしいものと



写真36 出村彰名誉教授



写真37 志子田光雄名誉教授

なったからである。出村先生と志子田先生の先行研究があったからこそ、今回の「東北学院の40年」が存在し得るのだということを、あらためて強調しておきたい。

前述した押川の演説シーンについて記しておく。このシーンは、志子田キャプション付き動画では、「シュネーダー院長」と解説されている。これまで筆者はなんの疑いもなくシュネーダー院長とってきたのであるが、4Kデジタルデータを観た日野氏は、これはやはり押川であると確信したそうだ。日野氏はこれまでも常々、これはシュネーダーではなく、押川ではないだろうかと思ってきたそうだが、それを裏付ける根拠はなかった。

ではなぜ、今回この演説者が押川であると我々は断定したのか。確かに日野氏の言うように、鮮明になった映像のこの人物は我々にも押川のように見えた。しかし、その段階では何の証拠もない。我々は、これが押川であることを前提に証拠を探すことにした。

まず状況証拠から確認してみたが、こちらからのアプローチでは決定的な証拠を見つけることはできなかった。当日のプログラム（写真38）から、押川の演説があったことがわかるのは、10月16日（土）の午前中に中学部講堂で行われた学内向けの創立記念式である。しかし、この押川と思われる演説シーンが収められているフィルムは、フィルムNo.4の中ほどで、その直前の映像は南町通りを歩いて神学部校舎に入る三校祖・神学部校舎の前に並ぶ三校祖の映像である。演説シーンの直後の映像は、中学部講堂（二番丁）で生徒が礼拝を受けているシーンとなっている。

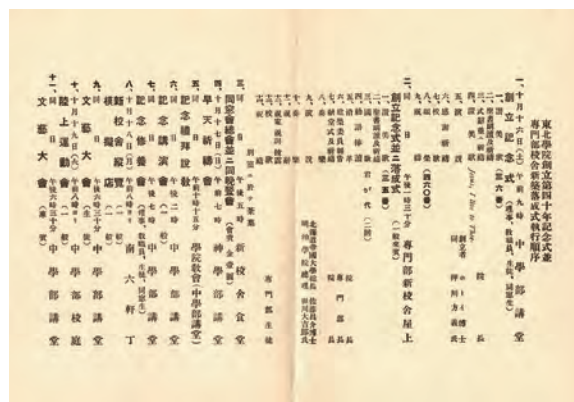


写真38 40周年記念式典プログラム

プログラムに記載されている情報から、神学部講堂が使用されたことがわかるのは17日（日）の早天祈祷会だけである。17日の午前7時に神学部講堂で早天祈祷会が行われ、午後2時から中学部講堂で公開

記念講演会、午後7時から記念修養会が行われている。押川演説のシーンは中学部講堂で行われていることは映像から間違いない。神学部校舎での早天祈祷会の後、午後からの中学部校舎での講演会が修養会で押川が話しているシーンだと考えれば、フィルムの順番とプログラムの時系列的に矛盾は生じない。なお、押川と思われる演説シーンの窓の外は明るいので、可能性があるとするれば午後2時から講演会であろう。

しかし、ここでひとつの疑問が生じるのである。この17日午後2時から講演会について、プログラムには演説者名は書かれていないのである。当時の『東北学院時報』にも、この講演会についての記述がない。初日の創立記念式典については、プログラムに「演説 創立者 押川方義氏」とあり、『東北学院時報』の記事内には「次いで創立者押川、ホーイ両先生の熱烈なる演説があった。吾々が再び両先生の聲咳に接することを得たのは稀有の特権だった。」とまで記されている。押川が講演会を開いたとすると、その事実が何にも記されないことなどあり得るだろうか。

また、この40周年フィルム9巻は、明らかにそれと分かるシーンの部分だけでも、プログラムに記載されている時系列と比べてみると、かなりバラバラに繋がれていることがわかる。フィルムが撮影された当時の『東北学院時報』に掲載されている撮影場面の紹介に照らし合わせてみても、プログラムの通りとはならない。実はこのことが、40周年フィルムの編集作業において、非常に事実確認を難しくさせてきた要因でもあった。フィルム自体に当然テロップなどの解説はなく、撮影した鈴木三郎氏による解説文やメモなどもない。わずかに残された当時の『東北学院時報』に掲載された情報をもとに、あとは実際に映像に映されたものを見て判断するしかないのである。

続いて我々は、実際の映像からこの人物が押川であることが証明できないか試みた。40周年フィルムに押川と思われる人物が映像として収められているシーンは実はあまり多くない。中学部校舎に入る押川（16日朝と推測）、神学部校舎に入る押川（17日朝と推測）、運動会の表彰に立ち会う押川（19日）くらいしかないのである。ここで、我々は16日朝と思われる、東二番丁通りを北から南の方向へ歩いて中学部校舎に入って行く三校祖の映像に注目した。このシーンはフィルムNo.3の最後に収められているのであるが、最後は中学部校舎正面入り口から、東

二番丁通りに面した正門方向を映して、正面入り口に向かって歩いてくる三校祖の姿で終わっている。そして、フィルムNo.2の冒頭部分には、このすぐ直後と思われるシーンが収録されている。そのシーンは、中学部校舎正面入り口から正門方向を映し、三校祖が歩いて向かってきて、入り口に入っていくシーンである。この二つの場面が連続したものであると考える理由は、ホーイとシュネーダーの二人は傘を持ち、押川は傘をもっていないという点で共通している点である。初日の16日は雨のため、創立記念式典が専門部校舎から中学部校舎に急遽変更になっている。二日目の17日も雨が降っていたようであるが、17日の朝と推測している神学部校舎に入る三校祖のシーンでは、傘を持っているのはホーイだけである。神学部に入る三校祖のシーンを撮れるのは17日だけであると仮定すると、この中学部校舎のシーンでシュネーダーが傘を持っていることから同じ17日の午後のシーンであるとは考えにくい。

もちろん、シュネーダーが途中で傘を持ったと考えることもできる。神学部校舎から中学部校舎に移動する途中にシュネーダー邸があることを考えると、あながち間違った予想でもない。また、16日の朝、南六軒丁の専門部校舎から中学部校舎に会場が急遽変更になり、三校祖がそのように移動したとすると、東二番丁通りを北から南方向へ歩いて正門に入る三校祖のシーンは、地理的に考えておかしいことになる。しかし、このどちらの予想も裏付けるものは何もない。当時の撮影状況を考えて、光の具合や演出上の問題から、三校祖に歩く指示を出したことは容易に想像できるし、事実、フィルムの各シーンの最初や最後の部分を見ると、明らかに演技をしているとわかる部分がある。たとえば、カットの繋ぎ部分が明らかに重複しており、普通に歩いているシーンを連続して撮ったものではないことがわかるし、三校祖がカメラの方向を振り返るシーンなどが収められている。このようなことから考えると、東二番丁通りを北から南へと歩く部分だけを切り取って、これを根拠に17日の午後に南町通りの神学部校舎から中学部校舎へ移動したシーンであると断定することはかなり難しい。

いずれにせよ推測の域は出ないが、この中学部校舎に入るシーンは、現状の資料から考えるに、16日の朝であると考えることが一番無理がないと思われる。現時点ではそのように断定したわけである。

この中学部校舎入口に並ぶ三校祖のシーンが16日朝であることを前提にすると、これまでシュネー



ダーと思われた来た演説者が押川であったことを決定づける映像的証拠が発見されるのである。次の写真をご覧ください。



写真39 押川(右)とシュネーダー(左)

注目していただきたいのは、押川(右)のシャツの襟の形と、シュネーダー(左)のシャツの襟の形である。押川の襟は立っており、いわゆるウイングカラーと呼ばれる形状であり、シュネーダーの襟は丸みのある形で折られており、いわゆるラウンドカラーと呼ばれるものである。

では次に、問題の演説シーンを見てみる。



写真40 押川の演説

ご覧いただいてわかるように、明らかに襟が立っているシャツを着ている。これは、今回映像がクリアになったことで、初めて検証できた新発見である。

この演説者を押川と思って見てみると、ナレーションでも解説しているように、なるほど確かにその演説風景は大きく身体を動かしながら熱く激しい様子が窺え、かの島崎藤村をして「慷慨激越を示す」と言わしめた押川方義その人と思えてくるから現金なものである。

以上のように、多角的にこの人物が押川であることを検証してみたが、皆様にはどのように見えてい

るだろうか。筆者は、今回のデジタルリマスター映像を最初に観たとき、直感的に押川であると感じてしまった。百聞は一見に如かず、映像資料の持つ説得力とはこれほどまでに大きいものであるかと再認識した次第である。

#### 第四節 新たな発見②(布施豊世について)

「東北学院の40年」の冒頭でも紹介しているように、ミセス・シュネーダー(写真41)が外国人招待者らを自宅の庭で持て成すシーンに一人の日本人女性が映っており、今回我々は初めてこの日本人女性を布施豊世(写真41)であると断定した。その理由は後で説明するとして、まずは布施豊世がどんな人物であるか簡単に紹介しておきたい。



写真41 ミセス・シュネーダー(左)と布施豊世(右)

布施豊世は旧姓を加藤といい、1876(明治9)年に山形県のクリスチャンの家に生まれた。1893(明治26)年フェリス和英女学校本科に転学し、そこで宮城女学校から転学してきていた星良(後の相馬黒光)と知り合い、ともに東北出身で歳も近いこともあり急速に親しくなる。星良を通じて当時東北学院で図画教師をしていた布施淡と知り合い、1898(明治31)年に結婚。交際期間中の約5年間に二人の間で交わされた手紙は200通を超え、その翻刻がフェリス女学院150年史資料集第4集『加藤豊世・布施淡往復書簡 明治期のある青春の記録』として刊行されている。2018年12月には仙台文学館でこの往復書簡を紹介した企画展も開催されている。なお豊世の夫の布施淡は、東北学院で一時期教鞭をとった島崎藤村と懇意にしていたことでも有名である。

結婚して3年後の1901(明治34)年、淡はチフスで27歳の若さで亡くなる。淡の死後、豊世はフェリスの教師、山形県鶴岡高等女学校教諭心得などを経て、1922(大正11)年に宮城県立第一高等女学校の教師となる。この時シュネーダー夫妻と出会い、以

後13年間、妻アンナの協力者として婦人会の聖書研究、聖愛幼稚園で聖書講義をするなど布教に尽力した。ミセス・シュネーダーの協力者としての様子は、次のように残されている。

「伝道上の仕事に関しては、長年に亘り、布施とよせという有能な婦人が、ミセス・シュネーダーと緊密な協力を続けました。布施夫人は聖書講義に天与の才能を持ち救霊会の活動の一部として開かれていた各種の聖書研究集会の責任を引き受けました。その一つは、宣教師宅で働くメイドさんたちのためでした。布施夫人の簡単・明瞭な教えを通して、多くの人々がキリストを信ずるようになりました。布施夫人は、さらにミセス・シュネーダーと一緒に多くの家庭を訪問し、また病人を見舞いました。この二人が揃って巡回するのが良く見られたものです。二人ともに「山を動かす」ほどの信仰と熱心の持ち主でした。」（『シュネーダー博士の生涯』より）

「豊世は東北学院長シュネイダー氏の夫人がキリスト教伝道をするときの助手の仕事をしており、日本語に不自由だった夫人が布教活動をするときや、病気で床に横たっている日本人信者の家を夫人が慰問に訪れるときなどは必ず豊世が同行した」（『若き洋画家 布施淡』より）

「婦人伝道の上でミセス・シュネーダーの大きな助けとなったのは、布施とよせ夫人であった。夫人はこの仕事に専従者として用いられていた。布施夫人はとくにすぐれた聖書教師であり、二人は切っても切れない仲となった。死んでからのちも、二人の墓石はすぐ隣り合っている。」（『シュネーダー博士の生涯』より）



写真42 聖書講義（右 豊世）



写真43 見舞い（右 豊世）

以上のように、豊世とミセス・シュネーダーは公私にわたって親密な関係を築いていたようである。それでは次にこの映像の女性が布施豊世であると断定した理由について触れていきたい。

まず、前節の押川方義を断定した時のように、映像・画像から判断を試みたいが、豊世の写真は驚くほど少ない。フェリス女学院歴史資料館に問い合わせしてみたが、豊世の写真は公表されている若い時のものの他には存在しないとのことだった。映像の切り抜き画像と、本学所蔵の写真を見比べてみる。



写真44  
豊世と思われる  
日本人女性  
(フィルム映像を拡大)



写真45  
布施豊世  
(『メッセンジャー』掲載)



写真46  
布施豊世  
(写真41を拡大)

いかがであろうか。似ていると思って見れば似ているし、似てないといえれば似ていないとも思える。残念ながら筆者はこれらの写真でこの映像の女性が豊世であると断定できるほどの自信はない。

それでは次に、状況的な要素から探ってみることにする。

まず時代的な問題として、この映像が撮られたのは東北学院40周年の時であるから1926（大正15）年であることは確定している。豊世が仙台に来たのが1922（大正11）年のことであり、以後13年間ミセス・シュネーダーと行動を共にするので、この時豊世がシュネーダー邸に居ることに矛盾は生じない。

次に映像の面から考えてみる。「東北学院の40年」には収録されていないが、元の映像でこのシーンを観てみると、この日本人女性はミセス・シュネー

ダーとホーイ夫人に手招きされ、外国伝道局長クライツ博士の夫人と一緒にシュネーダー邸の中から出てくる。カメラに気づくと照れたようにスッと身を隠そうとするが、クライツ博士夫人に肩をつかまれて再びカメラ前に促されている。その後ホーイ夫人からイチジクの実を手渡され、笑顔でそれを受け取り、フレームアウトしていく。その数秒後、走ってカメラの前に現れると、イチジクの実を取りに行くのであるが、これを見たミセス・シュネーダーとホーイ夫人は指をさして大笑いするのである。

この一連のシーンを観てまず最初に受ける印象は、いかにこの日本人女性が招待された外国人女性たちと近い関係であるかということである。映像からははっきりとはわからないが、おそらく会話をしていることは間違いない。ミセス・シュネーダーは片言の日本語は話せたようだが、クライツ博士夫人は今回が初来日であり、おそらくまったく日本語は話すことができなかつたはずである。それらの人々と普通にコミュニケーションが取れているところを見ると、この日本人女性は英語を話すことが出来たと考えるのが妥当であろう。

また、ホーイ夫人や、クライツ博士夫人といった、シュネーダー家にとって極めて重要な来客がいるその空間に、この日本人女性が居るという事実を考えると、よほどシュネーダー家にとって重要で近い人物であったと考えられるのである。

豊世はミセス・シュネーダーのアシスタントと書いている文献もあるが、その働きの内容から考えると、パートナーと言ったほうが妥当であろう。英語でコミュニケーションが取れ、外国人の婦人たちとも親しく接することが出来、シュネーダー夫人が指をさして大笑いできるくらいの親しい日本人女性となると、考え得る限りにおいて布施豊世において他にいない。

以上の理由から、今回我々歴史考証班は、この日本人女性を布施豊世であると断定したのである。些か論拠が弱いことは承知しているが、現時点ではこれが精一杯であった。今後もこの件については継続して研究していく所存である。

## おわりに

以上みてきたように、記念映画「東北学院の40年」はこのような経緯を経て、フィルム撮影から95年後にようやく完成まで漕ぎつけたものである。

本稿の執筆中、映像に出ていた古い校旗と思われるものが発見され、やはり映像に出ていた柔道部の

優勝旗が柔道部関係者から当センターに寄贈された。また、これまでは40周年フィルムが70周年時に東北学院に買い取られてから、100周年時までの間まったく利用されてこなかつたと思われてきたが、意外なところで使用されていたことが新たに発見されたりもした。こうやって東北学院の歴史が日々更新されていくのだと実感できた出来事であった。

本稿を執筆していく中で、わずか数十年前の些細な会議資料が、後の世の研究にとっていかに重要で貴重な資料となり得るかをあらためて痛感したこともまた貴重な体験であった。日々の業務では保管スペースの問題から重要度の低そうな資料についてはつい安易に廃棄を検討してしまうのであるが、やはり廃棄は最終手段であり、現物を廃棄するにしてもデジタルデータとして残すなど、最新の注意を払わなければならないと再認識させられた。

「東北学院の40年」の制作、並びに本稿の執筆という、東北学院にとって歴史的意義のある仕事に携わることが出来て感謝している。この成果が、後世の東北学院関係者の一助となることを願っている。

安部 茂徳プロフィール

ABE, Shigenori

1976年生まれ。  
東北学院大学文学部史学科卒業。東北学院大学大学院  
文学研究科アジア文化史専攻博士前期課程修了。  
2002年東北学院勤務。  
2017年より東北学院史資料センター配属。

# 学生新聞『東北学院学生時報』の概要とその特徴

東北学院史資料センター

佐藤 匠

## はじめに

『東北学院学生時報』（以下、『学生時報』）は戦前の東北学院高等学部において発行されていた学生新聞である。1932（昭和7）年より刊行がスタートした『学生時報』は学内での出来事や各部の動向、就職活動の状況などを伝えるとともに、学生による論評や随筆、投稿コラムなどを掲載していた。そのほとんどが学生の手により執筆、編集がなされていた『学生時報』は、当時の学校生活や学生たちの様子について把握するうえで重要な資料であると言える。

そんな『学生時報』であるが、東北学院の歴史に関する研究においては戦前の東北学院の様子を表す資料として一部の記事が紹介されながらも<sup>1</sup>、資料としての本格的な分析は行われていない。そこで、本稿ではこの資料に関する情報の整理及びこの資料が持つ特徴についてまとめていきたい。

東北学院史資料センターにおける『学生時報』の所蔵状況についてであるが、当センターでは1932年7月10日発行の創刊号から1943（昭和18）年8月19日発行の第49号までを所蔵している（欠号あり）。それらのなかには原本で保管されているものに加え、製本や複製のみで保管されているものも存在する<sup>2</sup>。また、この第49号が最終号であるかどうかは現在のところ不明である。これについては1947（昭和22）年より新たに発刊された学生新聞である『東北学院新聞』にも「久しく休刊を余儀無くせられて居た」と言及されているのみであり<sup>3</sup>、具体的な最終号の特定については今後さらなる資料収集及び調

査研究が必要である。

なお、本稿では資料の引用等に際し、一部の旧字体及び歴史的仮名遣いを常用漢字、現代仮名遣い等に改めている。

## 1. 発刊の経緯と目的

### 1-1. 『学生時報』発刊の経緯

創刊号に掲載された「発刊之辞」では「新聞の一つくらいあつても悪く無いと言うのが全学生の意向であり我等の希望でもあつた」と述べられており、『学生時報』が東北学院高等学部の学生新聞として発刊されるに至った経緯について、次のように説明されている。

従来の雑誌部の義務の一つ学友会報の編集は  
 労多くして功少なき部の無味乾燥な仕事であつた。然るに今年度如何なる理由か部費の大削減を受け会報編纂不可能に陥りし為此の際多少の苦勞は覚悟で会報を新聞に改めてはとの意見生じ災転じて福となつたのである。幸ひ評議員諸君も我が部の意の有る所を察し経済的援助を与へられしは感謝に耐へない。

ここに登場する雑誌部とは、1919（大正8）年に組織された自治活動団体である学友会に所属していた文化部のひとつであり<sup>4</sup>、在校生や教職員、同窓生による文芸活動の発表の場である機関誌『東北文学』の発行を担っていた。この雑誌部では学友会に所属する各部の現況をまとめた『学友会報』の発行も担当しており、年度ごとに各部の大会成績や活動内容

<sup>1</sup> 『東北学院百年史』においては東北学院創立50周年を記念して発行された「創立五拾周年紀年特輯号」が紹介されており、『東北学院の歴史』においては1932年の就職難や1937（昭和12）年のヘレンケラー訪問に関する記事が紹介されている。

<sup>2</sup> 『学生時報』の原本については、東北学院大学中央図書館に所蔵されているものも存在する。

<sup>3</sup> 「東北学院新聞の再刊に際して 院長出村剛」、『東北学院新聞』第1号、1947年7月20日、1ページ

<sup>4</sup> 学友会については1919年5月5日付の『東北学院時報』において組織の成立が報告され、「東北学院学友会規則」が掲載されている。学友会では院長及び専門部、中学部の教職員一名ずつを会長・副会長に任命し、協議委員や書記、会計係といった役職を各部の生徒から選出し学友会役員としていた。また、これら役員に各部の部長（教員）を加えたメンバーで総務委員会を組織し、予算編成や会務の処理を行うことを決めていた。

を報告していた。しかし、原稿集めには苦勞していたようで、『東北文学』第111号の「編集後記」では「学友会雑誌原稿募集の広告を出したが、それははぎ取られてしまった。かうして広告を三回書きあらためねばならなかつた」と<sup>5</sup>、その苦勞が語られている。

「発刊之辞」のエピソードからは、この『学友会報』編纂作業への不満と部費の予算削減が『学生時報』発刊の契機になったことが読み取れる。また、「発刊之辞」の冒頭でも「新聞の一つくらいあつても悪く無いと言うのが全学生の意向であり」と述べられているように、学生たちのなかにも学生新聞を望む声があり、その結果が「評議員諸君」からの「経済的援助」につながったと考えられる。この「評議員」とは、当時の高等学部学友会において各部の予算会議や諸事業の決定に携わっていた組織であり、構成員は年度ごとに学生による選挙で選ばれていた<sup>6</sup>。

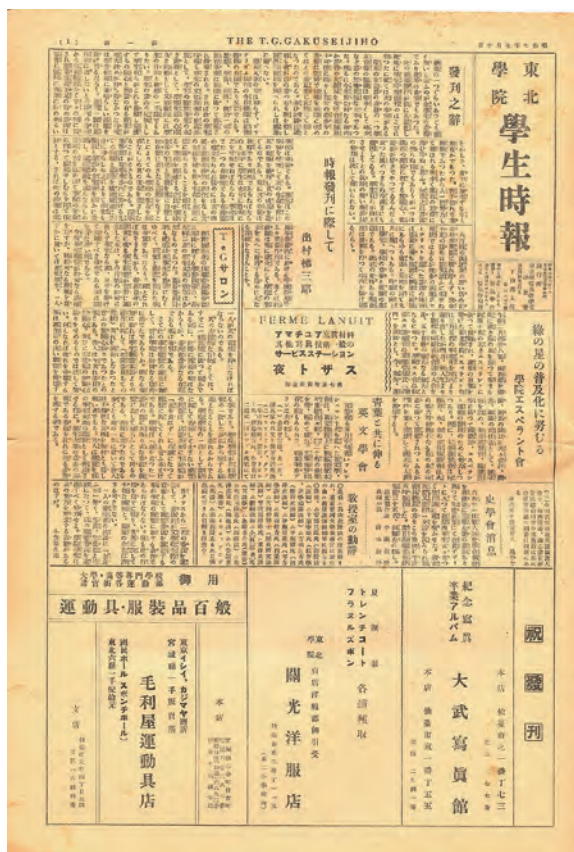


写真1 『東北学院学生時報』創刊号(第1号)

## 1-2. 『学生時報』発刊の目的

創刊号には「発刊之辞」のほかにも『学生時報』発刊の目的や『学生時報』に求めるものについて言及されている記事がいくつか掲載されている。以下はそれらの記事を一部抜粋したものである。

### ①時報を通じて 学院の真の姿の認識へ 更に正しき行動へ

今日学内に横溢してある自己中心主義、日和見主義の安逸極まる雰囲気、学内の種々たる行動に対する無関心的態度の生気なさ等々の沈滞状態はよくこの間の消息を暴露してある。然し斯かる状態は時報の発刊とそれへの学生の有関心であることに依つて即刻克服し得るであらう。(中略)

…而して過去の行動への回顧と現在の学内の情勢の克明なる報導とは、共に学生全般の意志を正しく此処に反映されることによつて批判され再認識されて吾々の一層の相互的緊密の度を加ふるに至るし積極的に吾々の利益を増進することが出来るのである。

### ②時報漸々出来 我等の新聞を我等の手で

…全学生は、あらゆる種類の希望、不満、激励等を紙上で述べ、常に正しき輿論を起こし、之に従つて、学生を導かねばならない。学校内のあらゆる問題の正しき解決を示さねばならぬ。

現在学友会の各部は、部員或ひは、選手等に独占された形に見える所さへある時、少くも新聞のみは、全学生の支持する所となり、各学生のあらゆる意見は、投書によつて、自由に述べられることとなるであらう。

記事①では現在の学生の雰囲気を沈滞状態にあると指摘し、その状態は『学生時報』の発刊とそれに対して学生が関心を向けることによって克服できるとしている。そして、『学生時報』における「過去の行動への回顧」と「学内の情勢の克明なる報導」とは、「学生全般の意志」が正しく反映されることによつて再認識され、学生の利益の増進につながると述べている。また、記事②からは『学生時報』を全学生のあらゆる意見の発表の場として位置付けている様子が読み取ることができる。ここでは、学友会などの立場を超えた全学生からあらゆる意見を募集し、それらに従つて自分たちを導き、学内の正しい問題解決を示さなければならないとしている。

<sup>5</sup> 『東北文学』第111号、東北学院専門部雑誌部、1932年2月21日、78ページ

<sup>6</sup> 評議員や前述の総務委員会などの学友会の運営組織及び予算会議の様子については『学生時報』上でも度々登場しているが、その人選基準や構成員は時期ごとに異なる。

これらの記事からわかるように、『学生時報』はただ学内の出来事や部活の現況を伝えるだけではなく、それらに対する学生同士の意見を共有し、学校生活をより有益なものにするという目的のもと発刊されたものであった。

## 2. 発刊後の展開

### 2-1. 発行所と発行者の変遷

ここでは発刊後の『学生時報』における発行母体の変遷や歴史についてまとめていきたい。それに伴い、当センターで所蔵している『学生時報』（複製含む）の号数や発行所、発行者などの情報をまとめたものが下記の表1である。

表1の発行所について見てみると、創刊号から『学生時報』が一時休刊となる第16号（1934（昭和9）年9月30日付）までは「東北学院高等学部学友

会」となっており、1936（昭和11）年に復刊して以降は「東北学院新聞部」と変更されている。ここで登場する新聞部とは<sup>7</sup>、創刊号の発刊に携わった雑誌部とは別組織であり、『学生時報』発刊後に雑誌部から独立したものである。そして1943年8月19日発行の第49号では発行所が「東北学院高商部報国団文化部新聞班」となっている。これは昭和18年度以降の高等学部文科の廃止に伴い、残された高等学部商科を高等商業部へと改称した影響と考えられる。

この発行所を巡る一連の流れのなかで興味深いのは、それまで自治活動団体であった学友会が県や文

<sup>7</sup> 新聞部の名称について『学生時報』上では、新聞部のほかに学生時報部や時報部という名称が確認されている。本稿では新聞部の名称を使用する。

表1 『学生時報』基本情報一覧（東北学院史資料センター所蔵分）

発行年月日	号数	発行所	発行者	印刷所	備考
1932（昭和7）年7月10日	第1号	東北学院高等学部学友会	下山彦太郎	笹氣印刷所	
1932（昭和7）年9月30日	第2号				
1932（昭和7）年10月31日	第3号				
1933（昭和8）年2月15日	号外	記載なし	記載なし	記載なし	
1933（昭和8）年5月30日	第5号	東北学院高等学部学友会	千葉 幸雄	松本製本印刷所	第4号は欠号
1933（昭和8）年6月30日	第6号				
1933（昭和8）年9月15日	第7号				
1933（昭和8）年10月30日	第8号				
1933（昭和8）年11月20日	第9号				
1933（昭和8）年12月15日	第10号				
1934（昭和8）年1月22日	号外	記載なし	記載なし	記載なし	
1934（昭和8）年5月15日	第12号	東北学院高等学部学友会	千葉 幸雄	松本製本印刷所	
1934（昭和8）年6月20日	第13号			旭印刷社	
1934（昭和8）年7月5日	第14号			青鳥社	
1934（昭和8）年9月15日	第15号			旭印刷社	
1934（昭和8）年9月30日	第16号		仙台膳写芸術院	一時休刊	
1936（昭和11）年2月25日	第17号	東北学院新聞部		旭印刷社	
1936（昭和11）年5月10日	臨時号	東北学院高等学部内学生時報部			創立五拾周年記念特輯号
1936（昭和11）年6月20日	第18号	東北学院新聞部	山本 六郎	野村印刷所	
1936（昭和11）年11月7日	第20号				
1937（昭和12）年1月30日	第21号				
1937（昭和12）年5月5日	第21号				
1937（昭和12）年6月10日	第24号				
1937（昭和12）年7月10日	第25号				
1937（昭和12）年11月17日	第26号				
1938（昭和13）年2月20日	第27号				
1938（昭和13）年5月5日	第28号				
1938（昭和13）年6月5日	第29号				
1938（昭和13）年7月5日	第30号				
1938（昭和13）年10月5日	第31号				
1938（昭和13）年12月25日	第32号				
1939（昭和14）年2月15日	第33号				
1939（昭和14）年5月20日	第34号				
1939（昭和14）年6月25日	第35号				
1940（昭和15）年1月26日	第41号				
1940（昭和15）年3月2日	第39号				
1940（昭和15）年6月20日	第41号				
1941（昭和16）年3月1日	第43号				
1941（昭和16）年5月19日	第44号		船津 勝男		
1941（昭和16）年10月22日	第46号				1941年4月に報国団結成
1942（昭和17）年2月15日	第47号				
1943（昭和18）年8月19日	第49号	東北学院高商部報国団文化部新聞班	下山彦太郎	野村印刷所	

部省が統括する組織である報国団へと改組された1941（昭和16）年4月以降も「東北学院新聞部」の名前が使用されていた点である<sup>8</sup>。それまで学友会のもと活動していた新聞部は雑誌部と統合され文化部新聞雑誌班として再編成された。これに伴い『学生時報』は発行母体となる組織の名称や形態が変更されることになったが、発行所として「東北学院新聞部」の名称を使い続けていた。そして、次に発行所の名称が変更されたのは1943年の高等商業部への改称に際してであることは前述のとおりである。

また、1943年の高等商業部への改称について、第49号では「東北学院高商部の新発足」と題した記事が掲載され、執筆にあたった学生の所感が述べられている。高等学部文科の廃止という事態を目の当たりにした当時の学生がどのような感情を抱いたのか、その一端がうかがえる内容となっているので、ここに全文を掲載したい。

五十有余年前東北の一隅仙台に仙台神学校として呱呱の声をあげ、後東北学院なる名称の下に私学として特異なる存在を続け来つた本学院はこの四月から東北学院高等商業部と改名し新たな出発を始めることゝなつた。

従来高等商業部の前身たる商科の外歴史科、英文科を包含する文科の設備を有し多数の著名な教授、講師を擁してその充実せる内容を誇つて居たのである。然し内外の切迫した諸事情は従来通りの文科の併存を許さなくなつた。殊に決戦下の教育新体勢はその必要切なるものあり、こゝに学校当局は大英断に出られた訳である。

直接教をうけざる我々にさへ何か悲哀の念禁ぜざるを得ざるものあるにまして直接その職にたづさはられし諸先生方始め諸先輩には断腸の思あるを推察するものである。

然し学院の永遠の発展の為に決然この挙に出られた当局者の心情に思を致し、この挙の本院の名を辱しむるものにあらずして反つて一層充実せる内容を持つを得また国家要請に<sup>(ママ)</sup>応へ得る所以なるを考へて戴きたいのである。

新たに生れ来つた東北学院高等商業部に学ぶ我々は深く思を内外にはせ、国家要求と学院そ

のものゝ発展との全き一に融合せるを深く自覚し、益々学問と練成に積極的な精進をなさねばならない。

次に発行者の変遷について見てみると、創刊号から第3号（1932年10月31日付）までを高等学部雑誌部の部長であった下山彦太郎が担当した後、第5号（1933（昭和8）年5月30日付）から一時休刊となる第16号までを『学生時報』発刊に協力した千葉幸雄が担当している<sup>9</sup>。復刊となった第17号（1936年2月25日付）以降は山本六郎、船津勝雄と続き、第49号では再び下山彦太郎が発行者を担当することになる。

創刊号から第3号までの発行者を務めた下山は、当時雑誌部部長として『東北文学』の発行者も務めており、第5号が発行された1933年以降も『東北文学』の発行者を続けていた<sup>10</sup>。このことから、1933年から新聞部として独立し、部長に千葉が就任したと考えられる。この新聞部の独立については、同年発行の第6号（1933年6月30日付）において学友会の予算関係記事が掲載されており、そこに雑誌部とは別に「部報費」として予算が確保されている様子も確認できる。また、第41号（1940（昭和15）年6月20日付）から第47号（1942（昭和17）年2月15日付）まで発行者を務めた船津は、報国団への改組に伴う文化部新聞雑誌班の編成後も班長を務め、『東北文学』の発行者も兼任していた<sup>11</sup>。

## 2-2. 『学生時報』の一時休刊と同窓生への配布

『学生時報』では第16号と第17号の間が一時休刊となっており、その期間は約1年半にも及ぶ。この長期休刊について、第17号の部説「時報再刊に際して」では「一昨秋某事件の余波を受け遂に一時休刊の止む無きに至つた」とその経緯を説明している。この「某事件」の詳細は不明であるが、第16号では「突如今回の某事件に関係し数名の優秀部員が一時活動不能の状態に陥り将に時報非常時の瀬戸際に立たんとしたのであつた」と事件の影響により部

<sup>9</sup> 編集後記にあたる「編集室」のなかでは「編集に際して図書館の齋藤さんそれから千葉先生に特に御世話になつた。今後も世話になるだろう。宜しく御願致します」と書かれている。

<sup>10</sup> 1933年12月28日発行『東北文学』第113号の奥付には「編集兼発行者」として下山彦太郎の名がある。

<sup>11</sup> 1941年12月20日発行『東北文学』第122号の奥付には「編集兼発行者」として船津勝雄の名がある。

<sup>8</sup> 東北学院における学友会の報国団への改組については『東北学院百年史』（852-853ページ）や『東北学院七十年史』（737-738ページ）においてまとめられている。

員の一部が活動困難な状態に陥り、新聞部としても非常事態であることが報告されていた<sup>12</sup>。

また、第17号部説では復刊理由として「時報なき後に於ける学内の沈滞は更に沈滞の底へと下降し学生はこの空気に將に窒息せんとした状態」であったことを挙げている。この学内の雰囲気や「沈滞」とする表現は創刊号の記事でも使用されていた表現であり<sup>13</sup>、それを打ち破ることが『学生時報』の使命のひとつとして扱われていたようである。さらに、もうひとつの理由として「創立五十周年を目前にひかへ学生の要望又急激に高まる」現状に対して、「学校当局もこれが復活の如何に急務なるかを了解」したことを挙げている。この創立五十周年に向けた機運の向上は結果として「創立五拾周年記念特輯号」と題した臨時号の発行に結び付く。この記念号は全30ページにも及び、杉山元治郎を含む同窓生たちによる多数の論稿や高等学部長出村悌三郎や神学部長H・ゾーク、宮城女学校校長C・クリーテを招いた座談会の様子などが掲載された。



写真2 創立五拾周年記念特輯号

こうした変遷のもと1943年まで続いた『学生時報』であるが、在校生のみならず同窓生への配布も行われていたようである。第6号以降の題字には

<sup>12</sup>「新秋の空高く 飛躍前進の学生時報 愈々月二回発行を執行」、『東北学院学生時報』第16号、1934年9月30日、2ページ

<sup>13</sup>前掲「時報を通じて 学院の真の姿の認識へ 更に正しき行動へ」

「月一回発行 定価一ヶ年五〇銭（郵税共）」の文字が確認でき、紙上では度々同窓生へ向けた購読料払込みに関する通知が出されていた。さらに、第24号（1937年6月10日付）に掲載された山本六郎による「学生時報に望む」では「学院当局から非常に重宝さがられ、学院の宣伝用、基本金募集用として数百部が東京大阪の一流実業家と大先輩とに配布された」と語られており、かなり大規模な配布が展開された様子がうかがえる。そして、1940年以降の紙上には「銃後より戦線へ」と題したコーナーが設けられ、学内や仙台の様子が戦地の同窓生へ向けてを発信されていった。

### 3. 各種記事の特徴

#### 3-1. 『学友会報』としての『学生時報』

『学生時報』が雑誌部から発刊された経緯として、雑誌部の活動のひとつであった『学友会報』の編集作業に対する不満や予算削減が契機となり、『学友会報』を『学生時報』に改めたことは前述のとおりである。この『学生時報』の誕生にあたり、それまで『学友会報』が担っていた学友会に所属する各部の現況報告という役目は『学生時報』へと引き継がれていくことになる。

『学生時報』は創刊号や臨時号、号外などの特別な場合を除き、通常4ページで構成されていた。これについて、創刊号の時点で資金不足によりページ数に制限がある現状が語られており<sup>14</sup>、編集後記では「第二集からは原稿紙を限定して編集を便にする考へです」と述べられている。ともかく、通常の『学生時報』は基本的に以下のような紙面割りとなっていた。

表2 『学生時報』紙面割り

第1面	部説、投稿コラム、教員による記名記事
第2面	学内での出来事、学友会の運営関係、教員人事、就職関係など
第3面	各部消息（大会報告、発表会告知、近況報告など）
第4面	文芸欄

このように『学生時報』では各部の現況報告のために第3面が割り振れていた。ここでは記事として運動部の大会やリーグ戦の結果が報告されていたほか、文化部による発表会の告知や開催報告、『東北文学』の原稿募集や刊行案内などが掲載されていた。また、年度のはじめや終わりには各部主将によ

<sup>14</sup>「発刊之辞」において「資金不足の為め頁数又思ふに任せぬ現状である」と言及されている。



る今後の抱負が語られることもあった。

こうした部活動に関する記事は創刊号からほぼ毎号掲載され、学友会が報国団として再編される1941年まで続くことになる。『学生時報』が学生新聞として定期的に発行されており、紙面も限られている以上、毎号すべての部活動を取り上げるわけにはいかない。反対に、新聞という特性を活かし、その時期に活躍のあった部活動に注目して取り上げることにより、各部の最新情報を記事として提供していた。『学生時報』を読めば最近どの部がどんな活躍をしたのか、網羅的に把握することができたのである。

この各部の動向を定期的・網羅的に把握できるという特徴は『東北学院新聞』や『東北学院大学新聞』などの戦後に刊行された学生新聞には見られない。これらの特徴は年度末に各部の現況報告を行っていた『学友会報』が持っていたものであり、『学生時報』は『学友会報』としての機能を持った学生新聞であったということが言える。

### 3-2. 『東北文学』との関係性

『学生時報』には文芸欄が設けられ、主に学生による文芸活動の発表の場として映画や図書の批評、旅行記や詩歌、各種論評などが掲載されていた。この文芸欄は創刊号から存在しており、1943年の第49号まで存続したコーナーであった。

東北学院では以前より文芸活動の発表の場として『東北文学』が雑誌部から発行されていた。この『東北文学』との相違点として、文芸欄では『東北文学』が扱うことのなかった映画や図書の批評、学生の旅行記などが多く掲載されている。『東北文学』においても文学論や映画論、芸術論が語られることはあったが、具体的な個々の作品を対象にした批評は少なかった。これに対して、文芸欄では最新の映画や図書について作品紹介も兼ねた批評を多く掲載していた。さらに、旅行記や随筆の掲載も『東北文学』にはない特徴で、学生や教員が長期休暇を利用して訪れた各地の様子や体験談、所感などが語られている。また、文芸欄に掲載されていた論評のなかには、経済学などの『東北文学』では基本的に扱われなかった分野や題材の論評も掲載されていた。このように文芸欄では『東北文学』の対象外となってしまう文芸活動の受け皿としての側面を持っていた。

一方で『東北文学』及び雑誌部の方でも文芸欄の存在については意識していたようである。たとえば、雑誌部では『東北文学』においてページの都合上割愛することになり掲載できなかった作品を『学

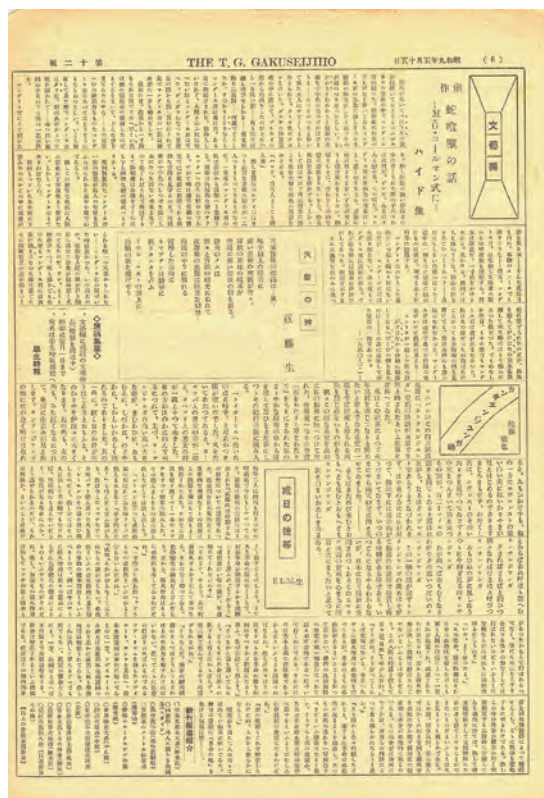


写真3 文芸欄（『学生時報』第12号）

生時報』に掲載することを検討していた<sup>15</sup>。また、文芸欄の投稿者のなかには雑誌部の部員や『東北文学』へ作品を投稿している学生や教員も多かった。新聞の紙面である都合上、文字数などの制限はあるが自分の作品を発表できる文芸欄は、彼らにとって『東北文学』に並ぶ文芸活動の発表の場のひとつとなっていたのである。

### 3-3. 投稿コラムについて

『学生時報』には「TGサロン」や「TG POST」と題した学生による投稿コラムのコーナーが設けられていた。このコーナーでは「紙上匿名自由」、「文字数600～1200字程度」という条件のもと投稿が募集され、学内で起きた出来事に対する所感や学校当局に対する不満、要望などが学生の意見として掲載された。たとえば、学内で発生したカンニングや暴行事件に対して学校側の監督責任や校内治安の責任を問うもの、学校側に集会所の設置や図書館の閉館時間延期を要望するものなど、その内容は具体的で学生たちにとって身近な題材が多かった。そのほか、

<sup>15</sup>『東北文学』第114号の「編集後記」において「本誌に掲載出来なかったものを学内新聞の文芸欄をかりて発表する予定であった」と述べられている。

1934年に学校財政安定化に向けた基本金募集の動きがあった際には、学生側との連絡機関の設置を要望する内容が投稿されており、学校当局の問題に対して学生たちも無関心ではなかった様子が読み取れる。

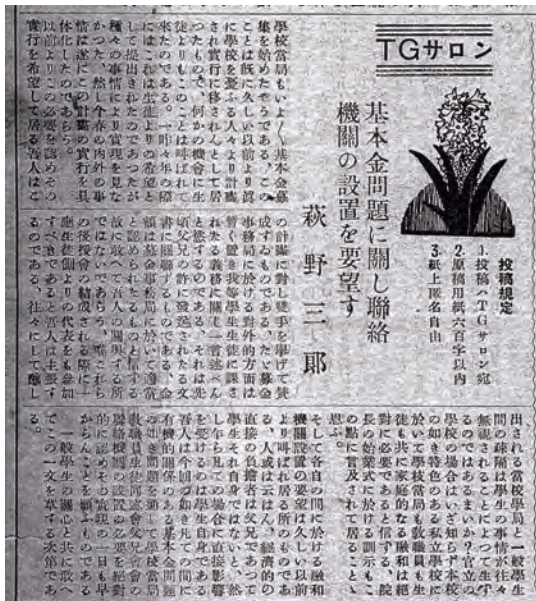


写真4 基本金募集に関する投稿（『学生時報』第15号）

こうした問題提起や意見・主張の発表の場であった投稿コラムであるが、1937年の日中戦争勃発とそれに伴う国民精神総動員運動の開始を境に、徐々にその内容に変化が訪れる。学生のよりよい生活態度や精神性を問う投稿が増加し、抽象的な内容が多くなっていった。たとえば、第26号（1937年11月17日付）の投稿コラムでは「近頃感じたこと」と題して、日本精神とキリスト教との関係について考えをまとめた内容が投稿されている。そのほか、学院生としての在り方や無気力ぶりについて訴えたものなど、それまで学内での出来事や事件を題材にしていたものが、より学生たち自身の問題を題材にした投稿が主流となっていく。このように時代の変化を受けながらも第49号まで続いた投稿コラムは、まさに学生による意見発表の場であり、文芸欄に並ぶ『学生時報』の代表的なコーナーのひとつであった。

### おわりに

ここまで戦前の東北学院において発行されていた学生新聞である『学生時報』の発刊の経緯や目的、発刊後の変遷について『学生時報』の記事から読み取れることを中心に情報を整理してきた。学友会の機関誌『学友会報』の代案として雑誌部より発刊された『学生時報』は、発行母体が新聞部として独立した後学友会に所属する各部の動向を定期的・網

羅的に伝えており、『学友会報』としての機能を持ち続けていた。また、『学生時報』には学内動向の報道のみならず、学生自らの意見や思想に関する発表の場としての機能が求められてきた。それに応えるため、学生による文芸活動の発表の場として文芸欄が用意され、意見・主張の発表の場として投稿コラムが設けられていた。これらのコーナーは『学友会報』的な側面と合わせて『学生時報』を代表する要素であった。

そんな『学生時報』は基本的な記事の執筆や編集は新聞部の学生が担当し、学内の学生たちへ向けて発行されていた。ここでは学生の視点で興味関心を持った学内での出来事が記事となり、ほかの学生たちのもとへ届けられる。そのなかには基本金募集などの学校運営に関する話題が取り上げられることもあり、学生たちがこうした問題について意見の述べられる場合もあった。つまり、学生たちは『学生時報』を読めば、現在学内でどのようなことが起こっており、ほかの学生がどんなことを考えているのか、それらを知ることができたのである。このように『学生時報』は学生たちにとって情報交換や意見共有の場であったと言える。

以上、本稿では『学生時報』をめぐる歴史や『学生時報』を代表する各種記事に着目することで『学生時報』が持つ特徴についてまとめてきた。学生新聞である『学生時報』は当時の学校生活や学生たちの様子について把握するうえで貴重な資料であると同時に、当時の東北学院の学生たちがどのようなことに興味関心を抱き、どんなことを考えていたのか、その一端をうかがうことができる資料であると位置づけることができる。また、学生の視点から情報が発信される『学生時報』を読み解いていくことは、東北学院内外の各種情報を伝えていた機関紙である『東北学院時報』では扱われない、より詳細な学校生活の様子や学生たちの姿を描くことにつながると考えられる。こうした東北学院の歴史という観点から見た『学生時報』の持つ意義や当時の社会状況が『学生時報』に与えた影響など、『学生時報』を題材とした研究については今後の課題として取り組んでいく必要があると思われる。

佐藤 匠プロフィール

SATO, Takumi

1995（平成7）年生まれ。  
東北学院大学文学部歴史学科卒業。  
東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻博士前期課程修了。  
東北学院史資料センター嘱託職員。

# 「東北学院関係者墓地調査報告 ～雑司ヶ谷霊園・多磨霊園を中心に～」

東北学院史資料センター

安部 茂徳

去る2021年11月8日～10日に、当センター調査研究員の日野哲氏と筆者の2名で、東京都内にある複数の霊園に赴き、東北学院の歴史に関わる人物の墓地調査を行いましたのでご報告いたします。

この調査はもともと2020年度末に計画されましたが、新型コロナウイルス蔓延の影響から延期になっていたものを、今回ようやく状況が改善したということで実行されました。調査の主な内容は、ひとつには詳細な場所の特定、もうひとつは写真の撮影です。今回訪れた霊園はどれも大変広大<sup>1</sup>ですが、著名な方々が眠る霊園ですので、インターネットの情報などで個々のお墓の場所を特定できる場合もあります。しかし、東北学院関係者の情報は必ずしも公開されているわけではなく、公開されていたとしても、その情報にたどり着くのも容易ではありません。また、お墓の場所を示す番号や記号はありますが、区分の最小単位区画でも数十のお墓があることがほとんどであり、その中から特定のお墓を探し出すことは想像以上に困難でした。墓石や墓誌などに個人名があればまだ特定は容易ですが、中にはそういったものの記載がないお墓も当然あり、区分の番号・記号だけでは特定することは容易ではありません。今回の調査成果（場所の特定と写真）は東北学院にとって、今後貴重な資料となると考えております。

8日(月)はまず豊島区の雑司ヶ谷霊園を訪れました。都電雑司ヶ谷駅で下車し、目の前はもう雑司ヶ谷霊園です。しかし、一番の目的地である押川家の墓と春浪天狗碑はその反対側で、霊園内を歩くこと10分程で無事発見しました。現地に着いてみて困ったことは、押川家の墓はまったく手入れがされておらず、草木が伸び放題でとても写真撮影ができる状

態ではないことでした。管理事務所に問い合わせたみたところ、鎌や枝切鋏、ごみ袋を貸してくれるということでしたので、我々は意を決して急遽清掃することにしました。当日は快晴で、風は冷たく心地好いものの、日が差しているところはそれなりに暑く、動くとも汗がしたたり落ちるほどでした。休憩を挿みつつ、1時間以上かかってようやく全景が確認できる程度まで綺麗にすることが出来ました。雑司ヶ谷霊園ではこの他、岩野泡鳴などのお墓を含む合計6件を特定し撮影しました。



「押川家墓」(清掃前)



「押川家墓」(清掃後)

<sup>1</sup> 雑司ヶ谷霊園は12万㎡、多磨霊園は128万㎡で、土樋キャンパス校地面積が7万2千㎡であるから、その広さが想像できよう。



「春浪天狗碑」(清掃前)



「春浪天狗碑」(清掃後)



押川方義の墓



押川方存(春浪)等の墓



岩野泡鳴の墓



撮影風景(筆者)

その後、近くにある護国寺に徒歩で移動し、押川方義と関係が深い大隈重信、山県有朋などのお墓も撮影してきました。ただ、残念ながらこの二人のお墓は、入り口部分が施錠されていて、門の外側からしか撮影できなかったことが悔やまれます。

9日(火)は府中市にある多磨霊園に出向きました。西武多摩川線多磨駅で下車し、徒歩約10分ほどで到着しました。多磨霊園は今回の調査では最大の霊園で、調査対象者も多数いましたので、まさに今回のメインといえる調査でした。しかし、当日は朝から生憎の雨模様で、朝に府中市に向かうにつれて雨脚が強くなるという最悪のコンディションとなってしまいました。こうなってしまっでは写真撮影することができません。そこで急遽、この日はお墓の場所の特定だけを行い、晴れ予報の翌日10日に再度訪問して写真撮影をするということで作業を進めました。途中、バケツをひっくり返したような土砂降りもありましたが、雨脚が弱まったタイミングでなんとか調査を行うことが出来ました。この日は押川方義の次男で、日本のプロ野球発展に多大なる貢献をした清のお墓を皮切りに、合計15件のお墓の特定

をすることができました。

なお、清のお墓には、清の長男であり、劇作家であった押川昌一氏も埋葬されています。昌一氏没後の2004年には多数の押川家に関わる資料を寄贈していただき、現在当センターが所蔵している押川家関係資料群である「押川家文書」はこの時ご寄贈いただいたものです。日野氏は、1986年の創立100周年以来、昌一氏と交流を深め、押川家では「仙台の息子」と呼ばれていたそうです。



昌一氏墓前（日野氏）



吉田亀太郎夫妻の墓（防水カメラで撮影）

10日(水)は、前日の大雨が嘘のようにあがり、まさに秋晴れといった好天に恵まれました。朝一番に多磨霊園に向かい、前日に場所を特定したお墓から早速写真撮影を行いました。最初に、方義の次男清のお墓に向かいましたが、このお墓は近年新しく改葬されたようで、以前まで清一家のみの墓と認識していたもの(写真)ではなくなっていました。

その後、杉山元治郎などの同窓生、吉田亀太郎などの教会関係者の他に、学院に多少なりとも関りのあった一般にも知られている著名人(キリスト教関係者、政財界関係者、文化人)のお墓を次々に回り、写真撮影を行いました。前日に場所を特定していたおかげで撮影はスムーズに行うことが出来、お昼く



押川清の墓(旧)



押川家・佐藤家の墓(新)

らいに終えることが出来ました。

午後からは染井霊園(JR巣鴨駅から徒歩10分)に移動し、鳥貫兵太夫・巖本善治のお墓を撮影し、その後に谷中霊園(JR日暮里駅から徒歩6分)に移動し、渋沢栄一・箕作秋坪・菊池大麓などのお墓を撮影して、作業を終了しました。

今回は、特定の個人のお墓をピンポイントに調査するというよりは、比較的大きな霊園などで東北学院に関わりのあった著名な人物をまとめて調査するというものになりました。これは、その霊園に行けば、このような人々のお墓を巡ることができますというMAPの作成を前提にこの調査が計画されたためです。

今後は、関東地方を中心にさらに継続して調査を行い、その成果を『東北学院史資料センター年報』や史資料センターホームページなどで発表していきたい、最終的には解説付きのMAPなどを作成して広く一般に公開していきたいと考えております。

# 仙台市戦災復興記念館「戦災復興展」

## 企画展：戦時下の東北学院Ⅱ

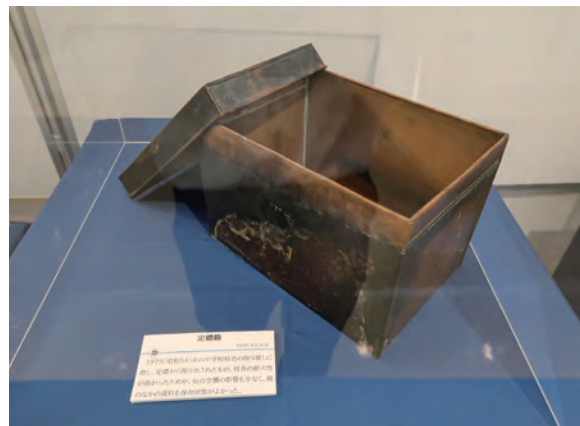
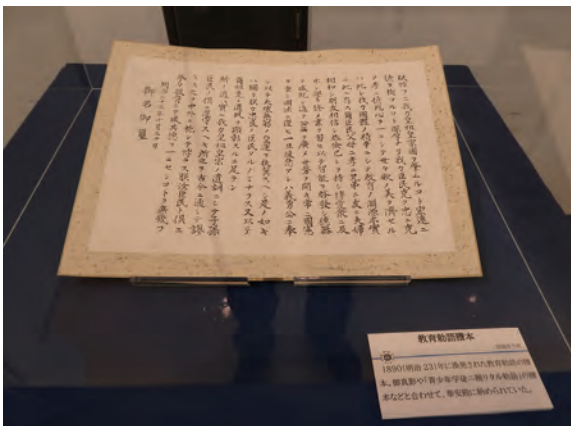
(2021年7月3日(土)～7月31日(土))

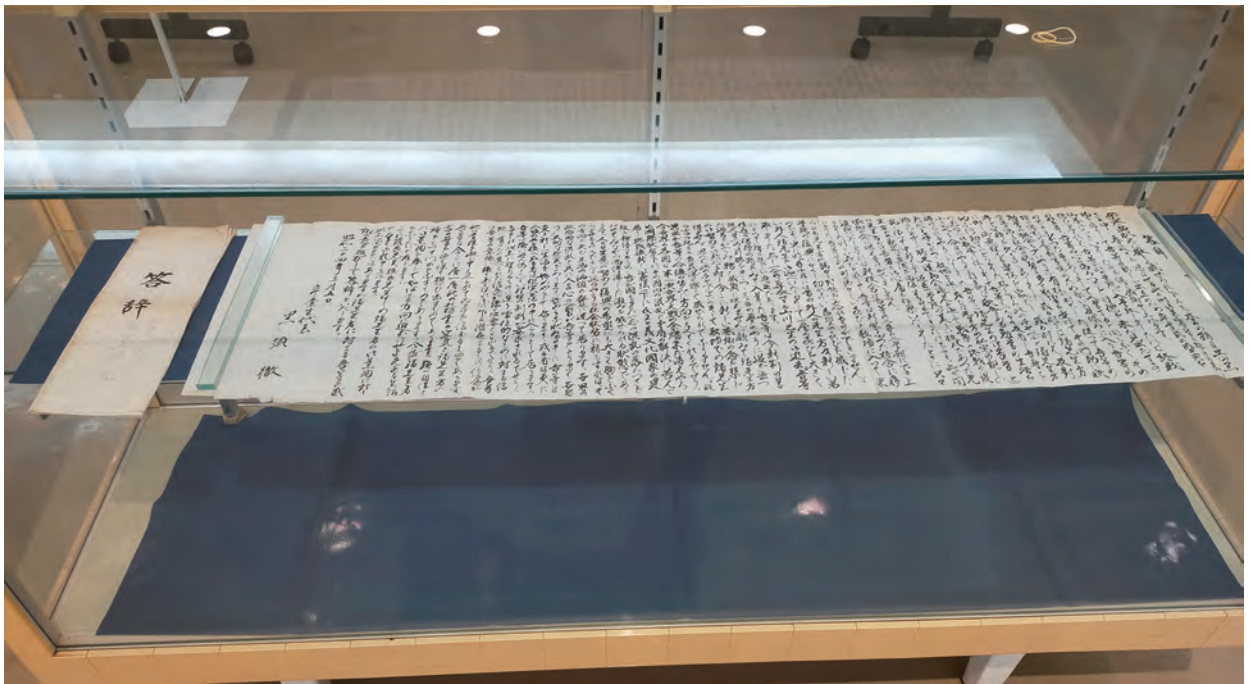
東北学院史資料センターでは7月3日から7月31日にかけて仙台市戦災復興記念館で開催された「戦災復興展」に参加し、企画展「戦時下の東北学院Ⅱ」を開催した。昨年に続き2回目の出展となる今回は「モノ資料から見る戦時下の東北学院」というコンセプトのもと、実際のモノ資料を中心に戦中から戦後にかけての東北学院や学生たちの姿について紹介した。

企画展「戦時下の東北学院Ⅱ」では実際の資料展示に加え、パネル展示として戦中から戦後にかけての東北学院や学生たちの様子を4つのトピックに分けて紹介した。まず、トピック①は「ナショナリズムの高揚と戦争拡大～ミッションスクール、文系学校としての受難～」と題して戦争拡大による社会の変化が東北学院に及ぼした影響として、御真影などを保管するための奉安殿の建設と航空工業専門学校への転身について紹介した。続くトピック②「戦時下の学生の姿～変わりゆく学校生活、そして学徒出陣へ～」では戦時下における学校生活の変化と学徒出陣について取り上げた。トピック③の「東北学院と仙台空襲～空襲への警戒と被災した中学校校舎～」においては、仙台空襲前後の東北学院の様子について「当直日誌」の一部や被災した中学校校舎の写真を展示した。最後のトピック④「戦後の混乱のなかで～戦争の傷跡と復興へ向けた希望～」では戦後の不安のなか復興へ向けて進んでいく学生たちの姿を『東北文学』や卒業生の「答辞」などの資料を通して描き出した。

パネルでの展示がメインであった昨年の展示に対して、「モノ資料から見る戦時下の東北学院」というコンセプトのもと開催した本展示は、実際のモノ資料を多く扱った。たとえば、航空工業専門学校の特色や教育方針が書かれた「東北学院航空工業専門学校設立趣意書」や学徒出陣に際して仮卒業となった学生たちについてまとめた「仮卒業証書授与台帳」など、パネル展示とリンクする資料を多く展示した。そのなかでも1979（昭和54）年の中学校校舎の取り壊しに際して礎石から掘り出された「定礎箱」は本展示を代表する資料である。「定礎箱」が埋まっていた中学校校舎は仙台空襲により内部の教室や講堂は焼失したが、赤レンガ校舎の持つ耐火性の高さから外壁が崩れることはなかった。「定礎箱」はこの校舎の耐火性のおかげか仙台空襲の影響が少なく、箱の中の保存状態もよかった。そのため、本展示では空襲を耐え抜いた資料として、箱の中の資料とともに紹介した。

昨年に引き続きコロナ禍での開催となった「戦災復興展」であったが、当センターが担当した企画展のほか、東北大学史料館や仙台・空襲研究会による企画も合わせて展示された。また、昨年中止となったイベントも一部開催され、多くの来場者を迎えて、結果としてより多くの人に当センターの展示を見てもらう機会となった。





# 東北学院史資料センターWEBコラム「敬神愛人」

## 2018年3月～2021年10月

### 東北学院開院式と「敬神愛人」

(2018年3月6日掲載)

仙台神学校として創設された東北学院は、5年後の1891（明治24）年に校名を「東北学院」と改称し、翌1892年11月18日に開院式が盛大に執り行われました。会場は、前年南町通りに完成したばかりのレンガ造りの壮麗な神学部校舎2階の礼拝堂で、当日は一般にも公開されました。県知事や仙台市長をはじめとする招待客たちが次々と人力車で到着し、午後



2時、鐘の合図によって式が開始されました。

院長押川は、演壇の上に懸けられた「敬神愛人」の額を引用しながら、次のように語り始めました。

「西洋人であるならば、ほとんど間違いなく『神への愛、人への愛』と言うであろうところを、『神を敬う』と言葉を選ぶところに東洋人の心そのものが表されている。敬は東洋においては、西洋における愛と同じく、すべてを結ぶ帯なのである」

この「敬神愛人」の額は、当時の書道の大家巖谷修の書で、本科4年生がこの言葉を選んだと言われています。この中には、やがて神学部第3回卒業生となる田村兼哉（神学校創設時の最初の6人の一人）や出村悌三郎（第3代院長）などが含まれていました。

明治政府が掲げた「敬神愛国」の教えから一語だけを取り換えることによって、「民族主義から一転して基督教主義に一変した」（『東北学院七十年史』より）ところに、当時の学院生の思想、信仰の表現の面白さが感じられます。なお、NHK大河ドラマ「西郷（せご）どん」の西郷隆盛は、「敬天愛人」という言葉を好んで使ったと言われていますが、押川が生涯を通じて尊敬していた人物が西郷隆盛とナポレオンであり、その最期まで居室に掲げられていたのは西郷の画像であったことも面白いところです。

この額は、その後土樋キャンパス本館2階の会議室の正面に掲げられ、現在は東北学院史資料センターに保存されています。



## 卒業式・入学式会場の移り変わり

(2018年3月13日掲載)

「アッセンブリー・ホール」、「スポーツセンター」と聞いて懐かしく思われる方も多いと思います。東北学院大学では、3月に卒業式、4月には入学式があります。今では入学式・卒業式ともに仙台市富沢の「カメイアリーナ仙台」（旧仙台市体育館）が会場として使用されていますが、これは1988（昭和63）年からのことで、それまでは仙台市川内の宮城県スポーツセンターで行われていました。（スポーツセンターは2006（平成18）年3月に閉館）



そもそも、なぜスポーツセンターを使用するようになったのかというと、1980年までは土樋キャンパス内の礼拝堂やアッセンブリー・ホール（現在は8号館が建っている場所に存在した体育館）を使用していたのですが、1966年に5000人だった学生数が1970年には1万人を超え倍増。学生数の急激な増加によって全学部の新生や保護者を一度に収容することができなくなり、入学式や卒業式は3回に分けて行わざるを得なくなりました。このような事情から1981年から（～87年まで）は学外の宮城県スポーツセンターで行うこととなったのです。なお、1981年は学生と保護者を合わせて約6000人の参加があったようです。



アッセンブリー・ホールからスポーツセンターへの会場の移行は、急激に増えた学生数に施設やキャンパス規模が追いつかなかった本学拡大期の事例のひとつと言えるでしょう。その対応として、1981年には「81年館」（現6号館）、1984年には「シュネーダー記念図書館」が完成し、さらにはこのころ政府が推進した大学キャンパス郊外化の動きもあいまって、1988年の泉キャンパス開学へと続いていくこととなります。

## 土樋キャンパスと桜の来歴

(2018年4月12日掲載)



厳しかった冬が過ぎて、仙台は例年に比べて早く3月31日に桜開花の便りが届き、4月4日に満開を迎えました。

土樋キャンパスには、本館南側に立派な桜の木があります。毎年、大ぶりの枝から頭上を覆うように桜の花が咲く光景が広がります。学生時代に「桜の下で!」と待ち合わせの場所にした、など数々の桜の木とのエピソードをお持ちの同窓生の方も多いかと思います。そんな桜の木は相当に年数が経っているのですが、はたしていつからこの場所に存在しているのでしょうか。



終戦直後のカラー写真を見てみると、まだ若々しい桜の木が今と同じ位置にあるのがわかります。ちなみに、右手には河岸段丘の石垣もみえます。戦前はここに標的を設置して、学生の実弾射撃訓練が行われたといわれています。また、同じく右手には木造の建物がみえますが、1945年7月、仙台空襲によって本館東側一帯の木造校舎はことごとく焼失していますから、終戦後に建てられたものでしょう。



では、もっとさかのぼってみましょう。東北学院が土樋に専門部校地を整備してまもない写真です。専門部校舎（現・大学本館）の竣工式を兼ねた創立40周年記念行事の写真ですが、いくつかの小さな木が植えられているのが確認できます。これも位置から考えると、あの桜の木と考えられます。そして、よくみるとそれぞれに支柱があるので、このとき植樹されたばかりだということがわかります。ということは、本館の完成とともに植えられ、樹齢90年以上だといえます。

おそらくあの美しい桜の木は、本館とともに盛況な創立40周年行事や戦前の軍事教育、大空襲と、まさに苦楽をともにしてきたことでしょう。

ぜひ、来年はそんなことにも思いを馳せながらお花見を楽しんでいただければと思います。

## かつては学食だった展示室（2018年7月4日掲載）

現在、東北学院史資料センター展示室のある礼拝堂の地下は、かつて学生食堂でした。土樋キャンパスで学食が始まったのは本院創立50周年を迎えた1936（昭和11）年のことで、当初は現在の大学本館1階にありましたが、1959年ごろに礼拝堂の地下へと移りました。



その学食の厨房に開業初期から1978年まで立ち続けていたのは中條はるいさんという方で、学生からは「学食のおばちゃん」という愛称で親しまれていました。メニューは、安くてボリューム豊かなAランチとBランチがあり、食欲旺盛な学生、特に運動部の学生に好評でした。

展示室を訪れた多くの大学卒業生の方からは、学食にまつわるお話をうかがうことができます。たとえば、「お金のない運動部の学生だった私をご飯だけを注文すると学食のおばちゃんはそっとお新香をつけてくれた」という何とも人情味あふれるエピソードです。また、ある卒業生の方は、「文化部だった私は Grill TG（洋食中心の学食）を利用していた」と教えてくださいました。その当時、泉キャンパスはまだなく文系の学生がすべて土樋キャンパスに通っていた時代だったため、礼拝堂地下の学生食堂には多くの運動部学生が集中して大変混雑していました。



その後、1988年の泉キャンパス完成によって礼拝堂地下の学食は泉へ移転しました。移転のための閉店に際して、運動部（体育会）の学生が主体となって「お別れパーティー」を企画しているという記事がこの年の2月に発行された『東北学院時報』にみられます。ぜひご覧ください。

## 本館前ロータリーの記念撮影

(2019年1月21日掲載)

創立40周年を迎えた1926年に晴れて専門部土樋校地（現大学土樋キャンパス）は完成しました。本館と正門、その間のロータリーなどは、基本的にその当時と変わりません。その後、礼拝堂は1932年、シュネーダー記念図書館（現大学大学院棟）は1958年に完成し、現在の三つの建物がそろった景観が完成しました。その背後の講義棟などは戦後につくられた建物です。本館前のロータリーはよく記念撮影が行われるスポットの一つです。



1937年7月にヘレン・ケラーが東北学院を訪れたことは、近年、改めて注目されています。その訪問の様子を撮影した場所が本館前ロータリーでした。背後に礼拝堂、左に見切れているのが本館の角と思われます。制服姿の少年たちが集合しているのも確認できます。当時は、東北学院に限らず東北帝大や宮城女学校の学生・生徒たちも彼女を出迎えました。



2年後の1939年5月、軍事教練の根拠となった現役将校学校配属令の制定15周年を記念して宮城前広場（現皇居前広場）で行われる「御親閲式」に参加するため、東北学院からは代表者数名が選抜されました。この写真も、ヘレン・ケラーの写真とほぼ同じアングルで撮影されたものです。たった2年しか違わないにもかかわらず、出迎えに集まる少年たちの姿と学徒兵の姿とは大きな変化を感じます。なぜなら、ヘレン・ケラーが東北学院を訪れた数日後に日中戦争が始まったのです。それは、国家総動員、総力戦の始まりでもありました。

今年も12月にイルミネーションと公開クリスマスが開催される予定です。



## 悲劇からの100年（2019年2月22日掲載）

2019年3月2日は、かつて東二番丁にあった中学部校舎が1919年3月2日未明に発生した南町大火によって焼失してからちょうど100年にあたります。



この校舎は1905年9月に完成し、大火は完成から14年目にしての出来事でした。校舎建設にあたっては、ドイツ改革派外国伝道局が全額負担するはずでしたが、資材の高騰によって不足分が出たため、院長シュネーダーがアメリカで4か月の募金活動を行い、建設費をまかなうことができました。

ドイツ人デ・ラランダの設計、正面中央と左右の大破風壁などドイツ・ルネサンス様式をとっており、外壁に使用された赤レンガと中央バルコニーの欄干や窓周りに配置された白い花崗岩とのコントラストが美しい建物でした。また、急こう配なスレート瓦の屋根と中央にそびえる時計塔は、建物の荘厳さを際立たせていました。

しかし、冒頭のとおり、仙台市中心部を襲った大火災によって校舎は土台と少しのレンガ壁を残すのみとなりました。その日の未明は、風速35m以上の強い北西風の夜であり、火災は火元から南東へとみるみる延焼し校舎も巻き込みます。事態に気づいた教職員や生徒が駆けつけて建物内から荷物を運び出そうとしますが、火の手が回るのが早く、もはやなす術がありませんでした。私邸から駆けつけたシュネーダーは燃え盛る校舎に入っていこうとしますが、校舎と中心しまいかと院長を心配していた生徒たちが何とか引きとめました。そのうちの一人の生徒のご子孫によると、生前にご本人が、「当時は『院長を失っては東北学院にとって大損失になる』との思いから引きとめた」とおっしゃっていたそうです。

その後、生徒数人に担がれて私邸に戻ったシュネーダーは、落胆のあまりしばらく立ち直れませんでした。しかし、中学部校舎の再建へと奮起し、焼失からおおよそ3年後の1922年6月、「赤レンガ校舎」として親しまれた2代目の中学部校舎が完成しました。



おりしも、南六軒丁（現土樋）では専門部校地の整備も控えており、もし、この驚くべきスピードで中学部復興ができていなかったら、専門部の発展はずっと遅れていたでしょう。

## 東北学院大学前史—東北学院専門学校の時代—

(2019年4月9日掲載)

東北学院大学は今年で創立70周年を迎えましたが、その設立にあたって、母体となった教育機関がありました。それは、1946（昭和21）年4月に、東北学院工業専門学校（旧航空工専）に代わって設立された東北学院専門学校（以下、専門学校）です。

専門学校は、英文科と経済科を置く文科系の学校でした。教職員には、戦前から東北学院に奉職していた者の他に、外地から引き揚げてきたばかりだった小田忠夫（後の第6代院長）や情野鉄雄（後の第7代院長）など、新しい面々もいました。また、1947（昭和22）年には、太平洋戦争の開戦後に強制送還されたアメリカ人宣教師たちが仙台に戻ってきました。宣教師の一人であるアルフレッド・アンケニー（後の第5代院長）は、専門学校で英会話の授業を担当し、また、理事として東北学院の運営にも



携わりました。

専門学校にはどのような学生たちがいたのでしょ  
うか。1947年8月20日付の『東北学院時報』によれば、当時の専門学校の学生数は1,164名（うち、女学生は31名）いました。英文科の教授だった情野は、当時の学生たちについて、自著『東北学院とわたし—情野鉄雄—』のなかで、次のように述べています。

そして学生層は、海軍兵学校、陸軍士官学校など、軍関係の学校を敗戦で中退した人たち、東北学院航空工業専門学校から転入してきた人たちなどい  
て、経歴も年齢も多様でした。しかし食糧不足で肉体的飢餓感も強い時期でしたが、それ以上に、精神的、また知的飢餓感も強い時期でしたから、学生たちが、本当によく勉強した時代でした。

敗戦後の混乱の中にあっても、なお知的好奇心を満たしたい若者たちの受け入れ先となった専門学校は、1949（昭和24）年に設立された東北学院大学にその役割を譲り、1951（昭和26）年、最後の卒業生を送り出してその使命を終えました。



本館南側（1949年3月撮影）

### 三校祖の肖像画（2019年5月16日掲載）

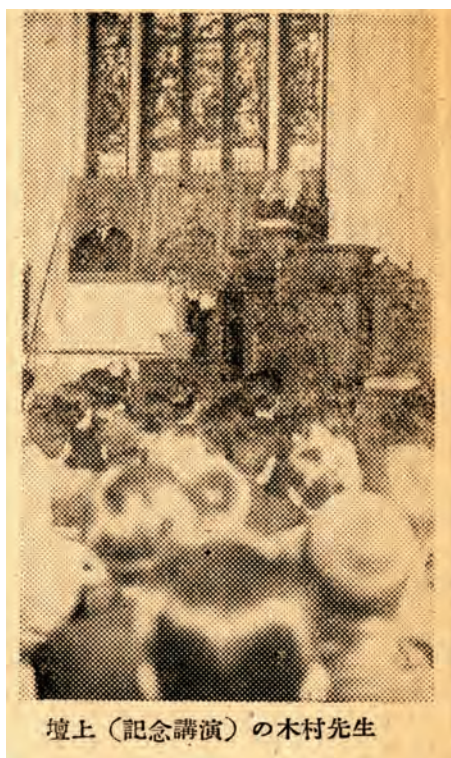
東北学院では、5月15日の創立記念式や、院長の就任式といった儀式の際には、必ず礼拝堂の正面に押川方義、W・E・ホーイ、D・B・シュネーダーの三人、すなわち三校祖の肖像画が飾られます。この三校祖の肖像画は、いつごろ、誰の手によって制作されたものなのでしょうか？



三校祖の肖像画の制作が計画されたのは、戦時中であった1942（昭和17）年のことでした。企画した

のは中学部奨学会（父兄会）、東北学院後援会（父兄会）、同窓会本部の三団体で、その目的は「校内の然るべき処に掲げ、その人格を偲び尊敬の念を忘れぬよう後進、学院生の教育に資したい」（『東北学院七十年史』）というものでした。制作を依頼されたのは、同窓生の布施信太郎です。彼は東北学院で美術教師を務めていた布施淡の長男で、美術団体の太平洋画会（現太平洋美術会）に所属する画家でした。肖像画が完成したのは、肖像画の隅に布施のサインとともに「18 SHOWA」とあることから、1943（昭和18）年と考えられます。

式典で飾られるようになった時期は定かではありませんが、1950（昭和25）年の創立六十五周年記念式典の写真が、その存在を確認できる古い事例となります。この時は右からシュネーダー、ホーイ、押川の順番で祭壇に配置されていましたが、1968（昭和43）年までの式典の写真を見てみると、押川とシュネーダーの肖像画は配置場所が入れ替わることがたびたびありました。順番が現在の形（右から押川、ホーイ、シュネーダー）に固定されるのは、1969（昭和44）年の創立記念式典以降のことです。

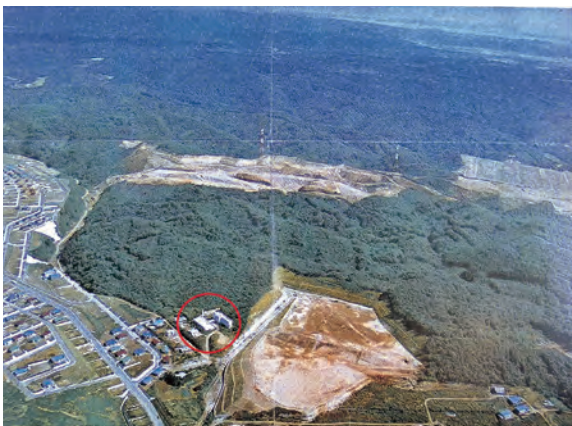


壇上（記念講演）の木村先生



## 空から学院を眺めたらー泉校地とその周辺の変遷ー (2019年6月24日掲載)

仙台市北部に位置する泉区には、榴ヶ岡高校と大学の泉キャンパスがあり、周辺には、アパート・マンションなどの賃貸物件、そして、飲食店や娯楽施設が並び立っています。こうした街並みは、ここ50年ほどの間に形成されてきたものであり、それは、榴ヶ岡高校や泉キャンパスの歴史とも深く関わっています。当時の生徒や学生たちが通学時に見たであろう校地と景色の変遷を、空からの写真で追ってみましょう。



写真① (1970年撮影)

写真①は、1970（昭和45）年に撮影されたものです。東北学院が新たな校地として泉に土地を取得したのは1965（昭和40）年のことです。当時、高校や大学への進学者が急増し、それに対応するための校舎の新設・増築が緊急の課題となっていました。しかし、土樋キャンパスや多賀城キャンパスの拡張などが優先されたこともあって、泉校地の開発にまで手が回らない状況でした。そのため、校地には、大学の男子学生用の寄宿舎しか建てられておらず（赤



写真② (1984年撮影)

丸の箇所)、後に榴ヶ岡高校の校地となる場所は更地のままでした。

写真②は、1984（昭和59）年に、北側から撮影されたものです。1971（昭和46）年、榴ヶ岡高校は泉校地に新校舎を建設し、その翌年4月には独立校となりました。新校舎の竣工はその年の8月で、以後、体育館や部室棟、礼拝堂の増設が行われました。また、1979（昭和54）年から泉校地総合運動場の開発が行われました。この間に、泉町は泉市となり（1971年）、泉パークタウンなどの大規模な住宅団地開発が進められ、国道4号線沿いには大型店舗が進出し始めましたが、写真の下部にあたる永和台団地にはまだ空き地も多く、また、写真上部に見える国道4号線の脇には、水田が広がっていました。



写真③ (1990年撮影)

写真③は、1990（平成2）年に撮影されたもので、1988（昭和63）年に完成した泉キャンパスが写っています。泉キャンパスの完成により、文学部・経済学部・法学部の1～2年生は土樋から泉へと学びの場を移しました。また、1989（平成元）年には教養学部が新設されました。こうして、泉校地の周辺には、学生向けのアパートやマンション、マンション（食事付き賃貸物件）が次々と建設されていきました。

2023（令和5）年に、大学泉キャンパスの校舎は新しくアーバン（都市型）キャンパスとして整備される五橋キャンパスに統合される予定です。泉校地とその周辺の光景は、これからどのような変化を遂げていくのでしょうか。



東北学院と「シップル館」－宣教師館が歩んだ戦後－  
(2019年9月17日掲載)

学校法人東北学院が所有する、旧宣教師館「デフォレスト館」。重要文化財に指定されているこの建物の名称は、明治中期から後期までの居住者であったJ・H・デフォレストに由来するものです。しかし、近年までこの建物は戦後の居住者であった宣教師の名前をとって、「シップル館」と呼ばれていました。

「シップル館」の由来となったカール・シップル(1904～1978)は、戦前から英語教師として東北学院で教鞭をとっていた人物でした。1948(昭和23)年、家族を連れて再来仙したシップルは、アンケニー夫妻他3名の宣教師とともに、後に「シップル館」と呼ばれる宣教師館に住むこととなりました。やがて、他の宣教師たちが住居を移したことで宣教師館にはシップル一家だけが住むこととなり、1955(昭



写真1 シップル夫妻

和30)年まで彼らの住居として利用されました。

シップルが引っ越した後、宣教師館は大学施設として利用されるようになりました。1957(昭和32)年に刊行された『東北学院七十年史』では、宣教師館(写真2の赤矢印の建物)は「教授研究室」と紹介されています。同じく土樋キャンパス構内にあった宣教師館(写真2の青矢印の建物)が「ブラッドショー館」という名称になっていることを考える

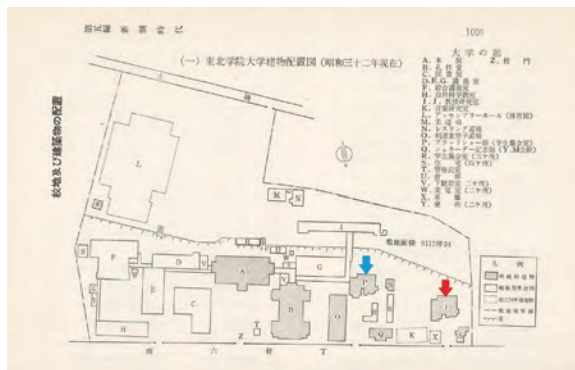


写真2 1957年の土樋キャンパス構内の図

と、このころにはまだ、「シップル館」とは呼ばれていなかったと思われます。「シップル館」という呼称が確認できるのは1968(昭和43)年のことで、同年10月10日付で発行された『東北学院大学学報』に、教授陣の研究室として「シップル館」の名前が見られます(写真3の右下)。

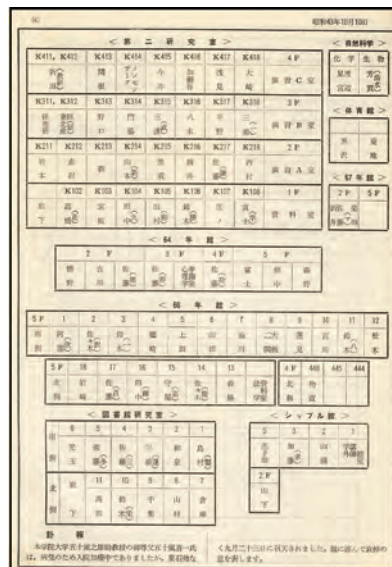


写真3 『東北学院大学学報』

「シップル館」は、1981(昭和55)年に現在の大学6号館(旧81年館)が竣工するまで、大学教授室として利用され続けました。その後、「シップル館」は大学院事務室、教職員の厚生施設などとして利用されたのち、2012(平成24)年に登録有形文化財となったことを機に、明治期の居住者に由来して「デフォレスト館」へと名称を変更しました。



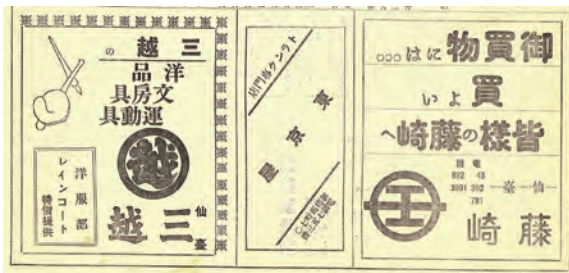
写真4 「シップル館」(1985年撮影)

今月28日のシンポジウム「重要文化財『デフォレスト館』の価値について」では、デフォレスト館の歴史的価値・特徴について、建築史や文化財学の専門の先生たちによる講演・ディスカッションが行われます。ご興味のある方は、ぜひご来場ください。  
※シンポジウム「重要文化財『デフォレスト館』の価値について」は2019(令和元)年9月28日に開催

1930年代の学都・仙台—学生新聞の記事から—  
(2019年10月25日掲載)

1930年代、東一番丁は仙台の繁華街として大変な賑わいを見せていました。学生たちにとっても、当時の東一番丁は貴重な遊び場であり、その様子を当時の学生新聞である『東北学院学生時報』（以下、『学生時報』）からも、うかがい知ることができます。

当時、江戸時代から仙台で営業を続けてきた藤崎の百貨店と、東京から進出してきた三越百貨店は、それぞれの色を打ち出して商戦を繰り広げていました。そして、その戦いは『学生時報』の広告欄でも展開されました。例えば、1933（昭和8）年5月30日付の『学生時報』第5号の一面には、藤崎と三越の広告が大きく打ち出されています。三越が仙台に進出したのはこの年の4月。学生を取り込むためか、藤崎の広告と異なり、三越は文房具や運動具など、学生向けの商品をアピールしています。この両百貨店は、この後もたびたび『学生時報』の広告欄に登場し、紙上での商戦を繰り広げました。



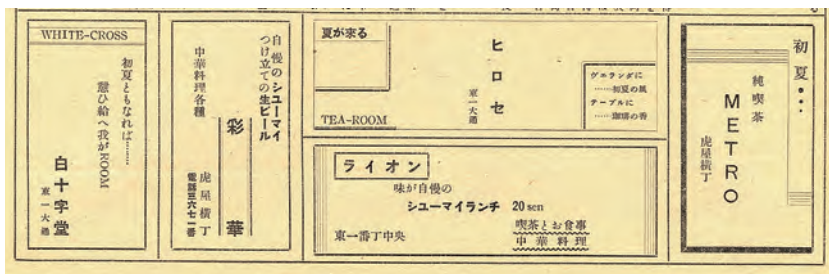
藤崎百貨店と三越百貨店の広告

『学生時報』の広告欄で目立つのは、喫茶店の広告の多さです。当時の喫茶店は、コーヒーを提供する純喫茶だけでなく、酒類を提供するお店やフルーツパーラー、さらには女給との交流を目的とする「カフェー」と言われるお店もありました。学生の中には喫茶店通いに夢中になる者もいたようで、『学生時報』には「休講 — それ行け一番丁」と、学生を皮肉る言葉が書かれるほどでした。

しかし、こうした街の様子も1940（昭和15）年ごろには変化が見られます。1940年3月2日付『学生時報』第39号の「銃後より戦線へ」という記事には、街の様子が次のように書かれています。

…諸兄の親しんだアフリカ（喫茶店の名前、筆者注）にも祝皇紀二千六百年の電気行灯が掲がつて居り私達は其を眺めながら真の意味でのコーヒーを味はつて居ります。（中略）このころの番丁は落ち着いてゐる。独特のとんかつ異国味のコーヒーの店はゆつたりとレコード音楽を響かせてゐる。無意味な放歌高吟の減じて来たことは頼もしい。…

緊迫した戦況は、仙台の街にも影響を与えていたことが分かります。やがて、1945（昭和20）年7月10日、仙台は空襲を受け、東一番丁など多くの商店街が全焼しました。戦後の復興期を経て、学生たちの遊び場もまた姿を変えていくこととなりました。



(左) 喫茶店や食堂の広告 (右) 東一番丁のネオン

## TG章と小泉成一（2019年11月29日掲載）

東北学院を象徴する「TG章」。東北学院のイニシャルであるTとG、そして十字架を組み合わせたこの徽章が誕生したのは20世紀初頭のことでした。そして、そのデザインをしたのは、小泉成一（写真2）という人物でした。



写真1 現在の公式TG章



写真2 小泉成一（1869～1921）

小泉は、1869（明治2）年2月、広島県福山市に生まれました。1922（大正11）年1月1日付の『東北学院時報』第45号によれば、両親に従って神奈川県鎌倉に移った小泉は、東京の彰技堂という洋画塾で絵を学んだ後、様々な学校で教鞭を振ったようです。そして、1901（明治34）年、東北学院の美術担当だった布施淡が3月に急逝したことにより、後任として彼の友人でもあった小泉が東北学院に赴任することになりました。

小泉が赴任した当時の東北学院は、押川からシュネーダーへの院長交代、さらに普通科における上級学校進学と徴兵猶予特典付与のための国との交渉（許可が出るのは翌1902年）など、めまぐるしい変革を迎えていた時でした。このような慌ただしい状況にあった1901年10月13日に開かれた普通科教員会にて、徽章および学帽の制定が議題に上がり、小泉ら5名が委員としてその形・意匠について選定することが決定しました。『東北学院七十年史』によれば、制服が登場する以前、学生たちは「和服に下駄足駄ばき」という恰好で、中には、新聞配達や牛乳配達の仕事から帰ってきたままの恰好で登校する者もいたようです。そうした状況もあって、制服・学帽を制定しようという話が、以前から学内でも持ち上がっていたようです。



写真3：普通科教員会で提出された徽章の案

写真4：国に提出された専門部の制服と学帽のひな型（赤丸がTG章）

1901年11月11日、教員会にて徽章の原案が提出されました。写真3の通り、初期案では十字の中に「G」が大きく書かれているデザインだったようで、現在の徽章とは異なっています。現在の形になった経緯について、当時、普通科の生徒だった小平國雄は学生時代の回想の中で、自分たち5年生が「小泉先生と協議して、独乙（ドイツ）の最高勲章を模型にとり現在のものを作製」したと述べています（1936年5月10日付『東北学院学生時報』掲載、小平國雄「五十年後を待望して」）。これが果たして事実かは不明ですが、小平がこれを良い思い出として誇っていることは、当時の生徒から見てもTG章が素晴らしいデザインだったということではないでしょうか。



写真5：徽章のついた学帽をかぶる中学部生徒（撮影年月日不明）

敗戦後のクリスマス礼拝 (2019年12月19日掲載)

今からおよそ70年前。第二次世界大戦敗戦後の日本社会は、めまぐるしい変革の中にありました。それは東北学院も同様で、航空工業専門学校から文系の専門学校への転換、共学化、六三制の実施、八木家からの土地寄付の申し込み、そして院長の交代といった様々な出来事が、数年の間に起こりました。

戦後の慌ただしい時代においても、東北学院では年末にクリスマス礼拝・祝会が行われていました。当時、中高や専門学校で発行されていた新聞を見ると、クリスマス礼拝や祝会のプログラムには、キャンドルサービスやYMCAによる讃美歌の合唱、学生による英語劇などが組み込まれており、とても賑やかなものだったようです。しかし、クリスマスに関する記事の中には、「今の時代では昔のように夜のクリスマスは帰りが怖いし、朝のクリスマスでは一人で歩けない」、「デコレーションは経費を節約して創造の喜びを味わおうと、出来るだけ生徒の手でやることとなつた」など、戦後の治安状況の悪化や、経済難をうかがわせるような内容が見られます。

一方で、経済的に苦しい状況にあっても、クリスマスツリーには本物の木が使用されていました。史資料センターが所蔵する資料の一つに、1948～49(昭和23～24)年頃に撮影されたと考えられる写真があります(写真1)。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の一角に立てられたクリスマスツリーは、2階席まで届くほどの大きな木ですが、どこから調達したものだったのでしょうか。



写真1 戦後のクリスマス (1948～49年ごろ?)

本学名誉教授である出村彰氏が、父親である出村剛(第四代院長)から聞いた話によれば、戦後のクリスマスツリーは、八木家から寄付されるはずだった八木山の土地から調達していたそうです。1946(昭和21)年、仙台の実業家であった八木家は、八木山に持っていた約68万坪の土地を東北学院へ寄付



写真2 「大東北学院計画」の記事 (1947年12月18日付「東北学院新聞」より)

することを申し出ました。この八木家からの申し出を受けて、1947(昭和22)年、東北学院では同地を校地の一部として使用することを決定し、小学校から大学までを抱える「大東北学院」の設立を計画しました(写真2)。最終的に土地を寄付される話は立ち消えになりましたが、こうした状況の中で、学生たちは自ら山の中に入り、クリスマスツリーとなる木を伐採し運び出していたようです。

戦後まもなくのクリスマス。それは、当時の世相に大きな影響を受け、またそれ故に制限も多いものでした。しかし、様々な苦勞の中で催されたクリスマスは、東北学院の教職員や学生たちにとって、記憶に残る印象深いものだったのではないのでしょうか。

今年も、クリスマスが近づいてきました。皆様にとって、来年も良い一年であるようお祈り申し上げます。



2019年のクリスマスイルミネーション

## 青根セミナーハウスのごこと（2020年8月6日掲載）

宮城県柴田郡川崎町青根温泉は、仙台藩伊達氏の御殿湯も置かれた温泉郷です。現在、ここに「青根洋館」と呼ばれるひとつの洋館が存在します。この洋館の側面には「贈 学校法人 東北学院 平成13年5月29日 旧東北学院自然科学研究所青根分室」と書かれたプレートが設置されています。この洋館はもともと東北学院のセミナーハウスとして使われていた施設を移築したものです。



東北学院自然科学研究所青根分室は、1959（昭和34）年11月に「先生と学生、または学生同士で宿泊できる教育施設」として米ヶ袋の旧宣教師住宅を移築したことから始まります。1959年12月6日付の『東北学院時報』では周辺の様子を「敷地約千三百坪、西北に大きな山々を背景に東南は開けて仙南平野を見下ろす眺望絶佳の地である」と評しています。



建設当時の東北学院自然科学研究所青根分室

この東北学院自然科学研究所青根分室に続き、1966（昭和41）年12月には近代的な建築様式の青根セミナーハウスが建設されました。これ以降、東北学院自然科学研究所青根分室は旧館、青根セミナーハウスは新館と呼ばれるようになり、その後、七ヶ浜町に建設された高山セミナーハウスに対して「山の家」として親しまれました。

1967（昭和42）年1月28日付の『東北学院時報』にはこのセミナーハウスの利用規定が抜粋されています。そこでは、「②本施設の利用者は、原則として東北学院教職員（各家族）および学生、生徒とする。ただし、この目的に反しない範囲において、学内使用に支障のない限り、教会、キリスト教主義学校、本院同窓会員本院父兄後援会員に貸与することができる」という利用者に関する規則や利用料金に関する規則が挙げられています。

	宿泊 利用料	朝食	昼食	夕食	冬期 暖房料 (11月～ 4月)	日帰り 利用料	日帰り 冬期 暖房料 (11月～ 4月)
本学学生 及び生徒 (付添教職員)	230	60	80	130	50	50	30
本学教職員 及び家族	330	60	80	130	50	50	30
その他	400	60	80	130	50	50	30

青根セミナーハウス利用料

この青根セミナーハウスは、学生のゼミ合宿や教職員修養会、宗教委員会、青山学院大学との合同合宿などの際に利用され、最盛期には年間の利用者数が1万人近かったと記録されています。また、当時ゼミ合宿などで青根セミナーハウスを訪れた際には、青根温泉の近くにある滝見台や不動滝、峩々温泉方面への散策なども行われ、蔵王の自然を堪能できることも青根セミナーハウスの魅力のひとつだったようです。さらに、この青根セミナーハウスの近くには小田忠夫学長が眠る公園墓地があり、宿泊した次の日の朝に墓前礼拝を行うこともあったそうです。

そんなセミナーハウスですが、昭和50年代後半から徐々に利用者数が減少していき、建物の老朽化も相まって1999（平成11）年3月には閉館が決定しました。その後、旧館である東北学院自然科学研究所青根分室は、明治時代後期から大正時代の様式がうかがえる現存する数少ない洋風建築であることから、2001（平成23）年には川崎町へ譲渡されることになりました。

そして、2003（平成15）年には現在の位置に「青根洋館」として移築復元されました。一階は観光案内を兼ねたカフェとなっており、二階には青根温泉とゆかりのある国民栄誉賞を受賞した作曲家である古賀政男に関する資料が展示してある古賀政男記念館が設けられています。



現在の青根洋館



東北学院青根セミナーハウス跡地

## 戦前の修学旅行（2020年8月25日掲載）

学校行事のひとつに修学旅行があります。仲の良いクラスメイトと共に、普段なかなか行くことのない東京や関西へ向かう修学旅行は、小中高生たちにとっては、まさに一大イベントです。そんな修学旅行ですが、東北学院ではいつから行われており、昔はどのような行事だったのでしょうか。

東北学院において、学校行事として「修学旅行」という言葉が使われはじめたのは明治時代まで遡ることができます。1898（明治31）年5月に発行された『東北文学』第30号の雑報のなかで「東北学院は一泊の見積りにて去る二十七日松島地方に向け修学旅行を試みたりしが翌日帰校せり」と報告されています。現代の修学旅行は、決められた学年になると東京や関西などへ向かう行事というイメージが強いですが、東北学院における初期の修学旅行は、少し離れた土地へ行くというもので、いくつかの学年が合同で行う行事のようでした。

また、1903（明治36）年11月に発行された『東北文学』第3巻第4号では「是迄普通科一年より神学部に至るまで同じ方向に行軍するの慣なりしが今秋は其趣きを異にし一年二年は松島石巻三年以上は金華山方面なりき」と報告されており、学年によって違う場所へ向かっているが様子がうかがえます。こうした変化のなかで、旅行先も県外へ向くようになります。

そして、1907（明治40）年にはじめて東京方面への修学旅行が実施されます。『東北学院普通科教員会記録』によると、普通科5年生及び専門部最高学年は三泊の予定で東京方面へ修学旅行を行い、「博覧会ヲ見物シ其他東京市内重要ナル箇所ヲ視察」と報告されています。こうした東京方面への修学旅行は1912（大正元）年から恒例化し、毎年行われるようになっていきます。



東京への修学旅行（昭和7年）



京都への修学旅行（昭和11年）

こうした修学旅行に関する報告は同行した先生により、『東北学院時報』の紙上でも行われました。それらの報告のなかで興味深いのは、東京方面へ修学旅行に訪れた際、現地の同窓生が出迎えや歓迎会などを開き、生徒と交流する機会があったということです。このことについて、当時教員だった須藤鬼一は1918（大正7）年12月15日付の『東北学院時報』のなかで「実際五年生は此の修学旅行によって、東京横浜の諸先輩に接し、其の厚情を味ひ、ホントウに同窓の気分を養ひ得て、近き将来に於て会員たるべき土台をこしらへるのである」と修学旅行での

同窓生との交流の意義を述べています。この同窓生との交流は生徒だけではなく、同行する先生たちにとっても旧交を温める貴重な機会となっていたようです。

そんな修学旅行について当時の生徒たちはどう感じていたのでしょうか。1937（昭和12）年6月10日付の『東北学院学生時報』には商科4年生が修学旅行へ行った際の感想をまとめています。そこでは「ゲーテの様に明るい光をあびて来たといふ感じである」と感想を述べており、自分たちの将来に「多少の支配力を持つ」であろうとしています。当時の生徒たちにとって、東京や関西というなじみのない土地での体験やそこで働く同窓生たちとの交流は新鮮で刺激あるものだったようです。

このような戦前の修学旅行は太平洋戦争の戦局悪化などの影響により、次第に厳しくなっていく、1943（昭和18）年には当時の文部省より正式に禁止されることとなりました。戦後の東北学院においては、1953（昭和28）年に中学校の第一回修学旅行を待つこととなります。（昭和28年11月4日付『TG新聞』より）

【3】 昭和十二年六月十日 東北学院学生時報 第二十四號

**可愛い子には旅**  
商科四年旅行記  
董 雄 吉

去國して南支那の脚を踏む。これは、我々の商科四年生が、六月十日、東京を以て旅立ち、南洋の南洋に旅立った。この旅は、我々の人生に於ける、最も貴重な経験の一つである。この旅を通じて、我々は、南洋の風土人情を、そして、同窓生との交流を、深く感じた。

（以下、旅行記の本文が続き、同窓生との交流や現地の様子について詳しく記述されている）

**藤進する**  
蹴球部

（以下、蹴球部の活動に関する記事が掲載されている）

**庭球部**

（以下、庭球部の活動に関する記事が掲載されている）

「可愛い子には旅 商科四年旅行記」(『東北学院学生時報』より)

スペイン風邪の流行と東北学院

(2020年11月19日掲載)

昨今、新型コロナウイルス感染症が日本を含めた世界中で猛威を振っています。こうした感染症の大流行について、今から約100年前の1918~20(大正7~9)年には、通称スペイン風邪と呼ばれるインフルエンザによる世界的パンデミックが発生しました。日本においても「流行性感冒」や「悪性感冒」と呼ばれ、1918~21(大正7~10)年にかけて断続的に流行し、多くの感染者を出しました。そうした世界的パンデミックのなか、当時の東北学院ではどのような状況だったのかを紹介していきたいと思えます。

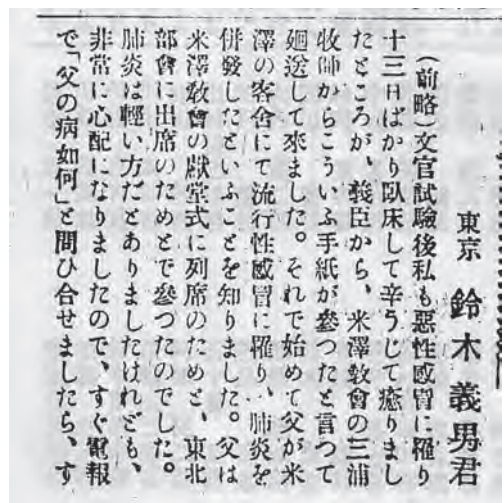
当時のインフルエンザによる被害状況について、1918(大正7)年12月15日付の『東北学院時報』(以下『時報』)では、「母校の窓から」というコーナーにおいて、「教師も生徒もバタ〜と片端からやられて、一時は中学部の教員室に毎日四五人位の缺勤者が更に〜に生じ生徒の方も甚だしい組になると十二三人及至十九人の缺席者を出すに至つた。」と報じています。一方、こうした被害を出しながらも「他のような休校騒ぎ」にはならず、「多数の生徒中一人も之がために斃れたもの」もいなかったと同紙では報告しています。また、インフルエンザの流行に対して、中学部では生徒を対象に、学校医による講話が催されていたことも記録されています。

さらに、上記のコーナーにおいては教員がインフルエンザに罹ったことや、教員や生徒、同窓生たちの関係者がインフルエンザにより亡くなったことが度々報じられています。1919(大正8)年2月25日付の「母校の窓から」では、「少し鼻がわるくとも

喉が痛んでも直ぐ夫ぢやないかと怖気立たせて居る」と当時の様子を伝えています。

こうしたインフルエンザの被害者の一人に、東北学院普通科を卒業し、当時東京帝国大学の学生であった鈴木義男がいます。鈴木は1918年11月の高等文官試験後にインフルエンザに罹りますが、鈴木本人だけではなく、彼の父もまた同時期にインフルエンザに罹り、その後肺炎を併発、11月21日に亡くなります。1919年1月1日付の『時報』には彼が三石という人物へ宛てた私信が掲載されています。そこには彼の父がなくなる前後の様子と「アア、もう父上は居ないのだなァといふ感じは限りなく悲痛なものであります」と当時の心境を述べ、「この頃やつと孝行がしたい心持になりましたのですから、ア、せめて二年でも三年でも生命ほしやと願はれました」と後悔の念を覗かせていました。

このような大きな被害を出したスペイン風邪は1920年以降、収束していくことになります。現在、新型コロナウイルスの影響により、大変な時期ですが一刻も早い収束を願っております。



『東北学院時報』に掲載された鈴木義男の手紙



## 労働会の思い出 (2021年3月4日掲載)

東北学院には「労働会」と呼ばれる組織が存在していました。労働会は経済的に豊かではない生徒が働いて学資を稼ぐための団体として、1892（明治25）年に創立者押川方義の手によって設立されました。労働会での生活は塾舎での共同生活を基本としながら、新聞配達や牛乳配達、味噌醤油販売、印刷業など幅広い事業を展開していました。

青木徹著『東北学院労働会物語』では「本書を、東北学院に青春を送った旧友に捧げる」として、著者が在学中であった1916（大正5）年から1920（大正9）年までの労働会での生活の様子が描かれています。本書では毎日午前三時から始める新聞配達や印刷所での活版印刷という労働会での仕事の様子に加え、クリスマスや送別会などのイベントで盛り上がる塾生たちの様子や学校で起こった様々な騒動、当時の仙台の様子が語られています。

また、1936（昭和11）年5月1日付の『東北学院時報』では、田口泰輔により「労働会の思ひ出」と題して1903（明治36）年当時の労働会の様子が語られています。記事では当時、労働会という名前があまり聞きよい名称ではなかったことや自由自治の生活であったこと、毎朝新聞配達や牛乳配達を行い、帰り次第大根汁に数杯の麦飯をかたむけて学校

へ走ったことなどのエピソードが紹介されており、「特に感謝すべきは貧と労働によって結ばれた友情と質実剛健なる精神と種々なる青年時代の誘惑から免れ得たことである」と結ばれています。

こうした労働会で結ばれた友情は固かったようで、卒業後も労働会出身者での集まりが催されることがありました。1933（昭和8）年10月1日付の『東北学院時報』にはそうした集会の報告がなされています。この記事では「労働会の存在は確かに學院スピリットの生きた源泉であり懐かしき想出のふる里」と述べられており、集会自体の様子は「当時の懐舊談に花が咲き楽しかったこと苦しかったこと、あれからそれへと爆笑、微苦笑の連発」で「十幾年振りかで全くあの頃の麦飯生活に返って了った」と大盛り上がりだったようです。

このように労働会で働きながら、同じ釜の飯を食べ、ともに学問に励む者同士の共同生活は、当時の塾生たちにとって、まさに青春であり、その後の人生にも大きな影響を与えるものとなりました。

そんな多くの思い出を残した労働会は、産業社会の進展とともに経営不振が続き、1921（大正10）年には廃止を余儀なくされます。そして、多くの生徒が青春を送った塾舎は、東北学院労働会寄宿舎と改称され一般学生も受け入れながら、1932（昭和7）年の最終的閉鎖まで続くこととなります。



労働会の学生たち



【写真】旧労働会を偲ぶ会

1952（昭和32）年に行われた「旧労働会を偲ぶ会」

## 泉校地の開発計画と幻の博物館構想

(2021年10月19日掲載)

1965（昭和40）年、東北学院は宮城郡泉町（現仙台市泉区）に10万坪を超える用地を取得しました。この広大な土地の利用について、当初は学生のレクリエーション施設やキリスト教関係の修養道場、当時東九番丁と多賀城、工学部寄宿舎と点在していた寄宿舎の統合や高校の設置などが計画されていました。しかし、実際には各キャンパスが拡張発展の時期だったことに加え、理事会が学生運動への対応に追われていたことから、泉校地の開発まで手が回らず、用地取得の翌年に男子学生用の寄宿舎が建設されたのみでした。



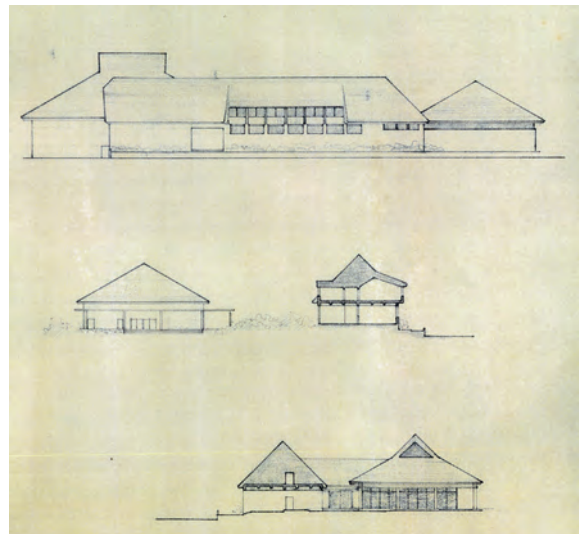
泉校地（1970（昭和45）年撮影）

用地取得から5年後の1970（昭和45）年、創立八十五周年記念事業を契機に泉校地の総合開発が模索され、榴ヶ岡高校の新築移転、大学のセミナーハウスと運動場の建設などが計画されます。そして、実際に榴ヶ岡高校の新築移転計画が実現し、1972（昭和47）年の新校舎完成に伴い東北学院高校榴ヶ岡校舎は移転し、榴ヶ岡高校として独立しました。

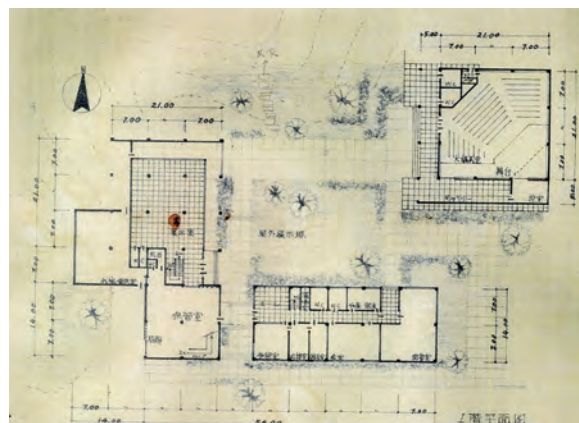
この創立八十五周年記念事業を契機にした泉校地の開発について、教員たちも関心を寄せていたようで、史資料センターには博物館学を担当する教員たちが泉校地に大学附属博物館建設を目指したと考えられる資料が保管されています。資料には博物館学を担当する二名の教員による「東北学院大学附属博物館建設願書」、博物館の概要が書かれた「東北学院大学附属博物館構想」と共に博物館の図面が付属しています。

「東北学院大学附属博物館構想」によると、建物は「和風と英国風の民家様式をデザインしたもの」で、将来的には「東北各地域の民家を付属せしめる」と書かれています。資料の収蔵・展示計画については民俗学と考古学の二部門を設け、民俗学部門では

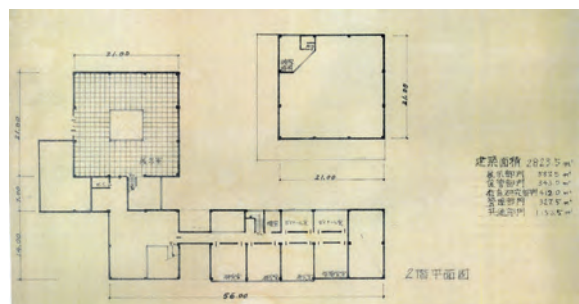
東北諸地域の信仰、祭祀、生活に関する資料の収集と研究や民家の移築、地域別の陳列方式を採用した展示のほか、隣接する大講堂内常設舞台における民俗芸能の演技採録を計画していました。考古学部門では、東北諸地域の各時期における生産関係資料の収集と研究、室内陳列と屋外陳列の方法を採用し、北方への伝播を重視した展示を計画していたようです。また、図面には展示室や屋外展示場のほかに、舞台を備えた大講義堂や図書室の設置も計画されており、かなり大規模な博物館を構想していたことがうかがえます。



博物館の外観



博物館の図面（1階）



博物館の図面（2階）

この壮大な博物館構想は事業として委員会に採用されなかったのか、そもそも委員会へ提出されたなかったのか、真相は不明ですが実現することはありませんでした。そんな大学博物館は、2009（平成21）年に東北学院大学博物館として、大学における研究成果の発表や学芸員を目指す学生の教育実習の場として土樋キャンパスに隣接して建設されることになります。

一方、寄宿舍と榴ヶ岡高校を除いた未開発の土地（約8万坪）については、1978（昭和53）年に拡充整備計画が開始され、3年後には総合運動場として整備されます。そして、1985（昭和60）年には創立百周年記念事業として泉キャンパスの整備計画が発表され、1988年の完成に伴い、大学の一部移転と教養学部新設がなされたのでした。

Webコラム・その他の記事は  
以下からご覧いただけます。

[東北学院史資料センターホームページ](#)



# 受贈資料一覧

2021年2月～2022年1月

日付	寄贈者	受贈資料
2021.02.02	拓殖大学創立百年史編纂室	創立百二十周年記念 校歌ができるまで 拓殖大学草創期の群像
2021.02.15	帝京大学総合博物館	帝京大学総合博物館企画展 キャンパス遺跡発見伝 古代多摩に生きたエミシの謎を追え
2021.02.15	帝京大学総合博物館	帝京大学総合博物館企画展 帝京大学理工学部創設30周年記念 理工学部のラボのなか! -コトワリとワザの探求-
2021.02.25	立教学院展示館	聖路加国際大学看護教育100周年記念展 立教学院展示館・第7回企画展 聖路加看護教育の100年 -知と感性と愛のアート-
2021.03.04	大阪府立中央聴覚支援学校	大阪府立中央聴覚支援学校 創立百二十周年記念誌
2021.03.08	日本大学企画広報部広報課	日本大学人物略伝 -日本大学をつくった先人たち-
2021.03.22	東北学院大学研究機関事務課	東北学院大学研究ブランディング事業報告書
2021.03.29	大阪市立大学大学史資料室	大阪市立大学の歴史 1880年から現在へ -140年の軌跡-
2021.04.08	神奈川大学資料編纂室	神奈川大学人物誌 神奈川大学編
2021.04.12	ブランディング事業推進室	ラーハウザー記念東北学院礼拝堂建造物調査報告書
2021.04.15	専修大学大学史資料室	専修大学史資料集 第一巻 -若き日の創立者たち-
2021.04.15	専修大学大学史資料室	専修大学140年 -大学改革の10年-
2021.04.15	ヴォーリズ学園	ヴォーリズらの教育事業100年小史
2021.04.16	登米市歴史博物館	青島貝塚 -発掘から100年の時を超えて-
2021.04.23	女子美術大学歴史資料室	女子美術大学創立120周年記念略年史 女子美百二十年 1900～2020
2021.04.23	京都大学大学文書館	京都大学大学文書館 外部評価報告書
2021.04.26	広島女学院	広島女学院130年史
2021.05.14	創価大学池田大作記念創価教育研究所	創価大学50年の歴史
2021.05.27	青山学院	青山学院一五〇年史 資料篇II
2021.06.21	国士館	国士館百年史 通史編
2021.07.13	庄司一幸	郡山教会百二十七年史(1) -郡山福音教会史・日本基督教団郡山教会史-
2021.07.13	庄司一幸	吉田菊太郎の生涯と業績および吉田家に連なる信仰に生きた人々
2021.07.26	名掛丁東名会	名掛丁東名会史II 名掛丁東名会 -きのう・きょう・あした-
2021.07.27	福澤諭吉記念慶應義塾史展示館	福澤諭吉記念慶應義塾史展示館開館記念図録
2021.07.30	大阪女学院短期大学	大阪女学院短期大学開学50周年記念誌 -大阪女学院短期大学の歩みとチャレンジ-
2021.09.24	鈴木真悟	日本列島秘史 -出雲、エミシ、アイヌ、サンカ、まつろわぬ民の真実を追う-
2021.11.29	自由学園	自由学園100年史
2021.12.13	日本女子大学	評伝 成瀬仁蔵 -女子高等教育から「社会改良」へ-
2022.01.05	東京基督教大学30周年記念誌編纂委員会	東京基督教大学創立30周年史 東京キリスト教学園のあゆみ 2000年～2020年
2022.01.14	九州学院	「朽ちない冠」を目指して 九州学院「第2世紀の歩み」
2022.01.14	日本聾話学校	創立100周年 日本聾話学校教育史
2022.01.14	日本聾話学校	日本聾話学校100周年写真集
2022.01.18	日本基督教団 八戸小中野教会	八戸小中野教会90年のあゆみ 1930年～2020年
2022.01.18	日本基督教団 八戸小中野教会	八戸小中野教会の歩み
2022.01.18	日本基督教団 八戸小中野教会	今泉三郎先生追想録 生涯を神と教会に仕えた人
2022.01.26	石村修	鈴木義男と今村力三郎

※他逐次刊行物類多数をご寄贈いただきました。感謝申し上げます。

## 東北学院の沿革

年 代	歴代役職者	事 項
1886(明治19)年		W.E.ホーイ仙台着任(1月)。押川方義、W.E.ホーイ兩名により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「 <b>仙台神学校</b> 」開設(5月)。教師2名、生徒6名で始まった。E.R.プルボー、M.B.オールドが来日(7月)、宮城女学校を創立(9月)。
1887(明治20)年		東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙台神学校を移転(5月)。
1888(明治21)年		D.B.シュネーダー夫妻仙台着任(1月)。オールド記念館落成(11月)。
1891(明治24)年		南町通りに仙台神学校校舎が完成(9月)。校名を「 <b>東北学院</b> 」と改称し、神学生のみならず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科2年・本科4年・神学部3年とする。
1892(明治25)年	押川方義	労働会創設(3月)。東北学院理事局を組織、初代院長に押川方義、副院長・理事局長にホーイ就任(8月)。東北学院開院式を挙行(11月)。
1895(明治28)年		予科・本科を改組し、普通科5年、その上に専修部(文科・理科)2年を設置。
1896(明治29)年	W.E.ホーイ	島崎春樹(藤村)、作文・英語教師として着任。
1898(明治31)年		理科専修部を廃止。
1900(明治33)年		第2代理事局長にD.B.シュネーダー就任(10月)。
1901(明治34)年	D.B.シュネーダー	第2代院長にD.B.シュネーダー就任。普通科長に笹尾糸太郎就任(4月)。普通科に制帽を制定。徽章TG章制定。
1903(明治36)年		東北学院同窓会結成。
1904(明治37)年		全校を普通科(5年)と専門学校令による専門科(3年)とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任(4月)。
1905(明治38)年	笹尾糸太郎	専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。東二番丁に普通科校舎完成。専門部に角帽を制定。徽章は全校TG章を用いる。普通科長に田中四郎就任(9月)。
1906(明治39)年		普通科寄宿舎完成。
1908(明治41)年	田中四郎	「社団法人東北学院」設置。創立記念日を5月15日に定める。同窓会会報第1号発行。
1910(明治43)年		校旗制定。
1911(明治44)年		創立25周年記念式典挙行。
1915(大正4)年		普通科を中学部と改称(5月・生徒数357名)。中学部長は田中四郎。
1916(大正5)年		『東北学院時報』創刊(1月)。南六軒丁(現大学土樋キャンパス)に専門部校地取得。
1918(大正7)年		専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。
1919(大正8)年		仙台大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼(3月)。仮校舎建築(9月)。
1920(大正9)年		中学部長に五十嵐正就任(1月)。
1921(大正10)年	五十嵐正	中学部寄宿舎再建(9月)。



年 代	歴代役職者	事 項
1922(大正11)年		<p>中学部校舎再建(東二番丁・通称赤レンガ校舎)(6月)。</p> 
1923(大正12)年		<p>東北学院教会設立(5月)。</p>
1925(大正14)年		<p>神学科を専門部より分離し、神学部(第1科・第2科)とする。専門部は文科、師範科、商科となる。</p>
1926(大正15)年		<p>南六軒丁に専門部校舎完成(現大学本館)、9月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行政(10月)。</p> 
1928(昭和3)年		<p>専門部3科とも予科を廃止、4年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成(3月)。</p>
1929(昭和4)年		<p>専門部を高等学部と改称。神学部第2科を廃止、第1科を神学部本科と改称し、3年の予科を置く。「財団法人東北学院」と改組(8月)。</p>
1930(昭和5)年	出村悌三郎	<p>高等学部師範科に専攻科1年を置く。</p>
1932(昭和7)年		<p>高等学部は3学期制を2学期制に改める。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂完成(3月)。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。</p> 
1933(昭和8)年	E.H.ゾーグ	<p>高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。</p>
1934(昭和9)年		<p>神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。</p>
1936(昭和11)年		<p>高等学部文科を文科第一部、師範科を文科第二部と改称。創立50周年記念式典を挙行政。院長シュネーター、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第3代院長に出村悌三郎就任(5月)。旧労働会建物および敷地を売却。第3代理事長にE.H.ゾーグ就任(6月)。</p> 
1937(昭和12)年		<p>神学部廃止、日本神学校と合同(3月)。高等学部は3年制となる。高等学部長にゾーグ就任(4月)。</p>
1938(昭和13)年	小泉要太郎	<p>中学部長に田口泰輔就任(4月)。</p>
1939(昭和14)年		<p>中学部長に出村剛就任(4月)。</p>
1940(昭和15)年		<p>南町通り旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。第4代理事長に出村悌三郎就任(10月)。</p>
1941(昭和16)年	宮城音五郎	<p>高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任(4月)。</p>
1942(昭和17)年		<p>高等学部商科第二部および中学部第二部を設置(ともに夜間)。</p>
1943(昭和18)年		<p>高等学部商科を高等商業部、中学部を東北学院中学校と改称。中学校長に出村悌三郎院長が兼務(4月)。</p>
1944(昭和19)年	核山元治郎	<p>航空工業専門学校設置。航空工業専門学校長に宮城音五郎就任(4月)。第5代理事長に核山元治郎就任(6月)。</p>
1945(昭和20)年		<p>中学校長に出村剛就任(4月)。航空工業専門学校を工業専門学校と改称(12月)。中学校校舎空襲により焼失。</p>
1946(昭和21)年	出村剛	<p>高等商業部および同第二部を廃止(3月)。東北学院専門学校(英文科・経済科)および同第二部を設置。第4代院長に出村剛就任。中学校長に月浦利雄就任(4月)。専門学校長に出村剛就任(4月)。</p>

年 代	歴代役職者	事 項
1947(昭和22)年		工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造2階建4教室増築完成。第6代理事長に鈴木義男就任(7月)。
1948(昭和23)年	月浦利雄	新制高等学校、同第二部を設置。月浦利雄同高等学校長ならびに中学校長兼任(4月)。専門学校長に小田忠夫就任(4月)。
1949(昭和24)年		東北学院専門学校から新制大学に昇格。東北学院大学文経学部(4年制、英文学科・経済学科)を設置。小田忠夫初代学長に就任。東九番丁寄宿舎完成。
1950(昭和25)年	鈴木義男	専門学校二部を東北学院短期大学部(2年制、英文科・経済科)と改称。第5代院長にA.E.アンケニー就任(3月)。
1951(昭和26)年		「学校法人東北学院」と改組。専門学校を廃止。短大別科を設置。第6代院長に小田忠夫就任。中高理科教室鉄筋コンクリート3階建完成。
1952(昭和27)年	月浦利雄	短期大学部に法科を設置。
1953(昭和28)年		中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任(4月)。総合運動場を多賀城市に開設。シュネーダー記念東北学院図書館完成(10月)。
1954(昭和29)年	A.E.アンケニー	多賀城第2寄宿舎完成。
1955(昭和30)年		創立70年記念式典挙行。中学校校舎鉄筋コンクリート造3階建9教室完成。『東北学院創立七十年写真誌』を刊行(5月)。在米同窓生、創立70年記念として鐘を寄贈(12月)。蔵王にTGヒュッテ「栄光」完成。
1956(昭和31)年	小田忠夫	中学・高等学校体育館完成(3月)。W.E.ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立(4月)。大学音楽館完成(10月)。
1958(昭和33)年		中学校赤レンガ校舎は都市計画により9教室を失う(4月)。中学・高等学校鉄筋コンクリート造4階建8教室完成(4月)。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成(9月)。
1959(昭和34)年	五十嵐正躬	中学高等学校一本化、中学校長に月浦利雄高等学校長兼務(1月)。短期大学部を東北学院大学文経学部二部(英文学科・経済学科)に改組。高等学校榴ヶ岡校舎を開設。『東北学院七十年史』を刊行(7月)。大学研究棟鉄筋コンクリート造4階建完成(9月)。自然科学研究室青根分室を開設(10月)。
1960(昭和35)年		短期大学部を廃止(3月)。
1961(昭和36)年		文経学部英文学科に専攻科を設置。
1962(昭和37)年		多賀城町(現多賀城市)に東北学院大学工学部(機械工学科、電気工学科、応用物理学科)を設置。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長に小田忠夫院長が就任(4月)。
1963(昭和38)年		押川記念館完成(2月)。工学部寄宿舎開設。大学オーデオ・ヴィジュアルセンター完成。野間記念剣道場完成(7月)。第7代理事長に杉山a郎就任(9月)。
1964(昭和39)年	山根篤	東北学院大学文経学部一部・二部を文学部一部・同二部および経済学部一部・同二部に改組。大学院文学研究科英語英文学専攻修士課程を設置。大学64年館完成(10月)。第8代理事長に山根篤就任(11月)。
1965(昭和40)年		東北学院大学法学部(法律学科)および大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を設置。宮城郡泉町市名坂字天神沢(現仙台市泉区天神沢)に10万坪の校地を取得(5月)。同窓会にTG十五日会発足(7月15日)。工学部4号館完成(10月)。中学校新校舎、中高礼拝堂完成(11月)。大学土樋寄宿舎完成。
1966(昭和41)年		大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻修士課程を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成(6月)。大学泉寄宿舎完成。青根セミナーハウス完成。



年 代	歴代役職者	事 項
1967(昭和42)年		工学部に土木工学科を増設。中学・高等学校運動部室完成(3月)。大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を経済学研究科経済学専攻修士課程に改組。大学67年館完成(5月)。中学・高等学校向山寄宿舎開設。
1968(昭和43)年		大学院経済学研究科経済学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻博士課程を設置。工学部5号館・6号館完成(3月)。中学・高等学校弓道場完成(3月)。大学新研究棟68年館完成(8月)。『東北学院大学学報』第1号創刊(10月)。
1969(昭和44)年	 二関敬	工学部旭ヶ丘寄宿舎開設。第9代理事長に月浦利雄就任(4月)。
1970(昭和45)年		工学部校地に東北学院プール完成。
1971(昭和46)年	 田口誠一	大学院工学研究科機械工学専攻修士課程、電気工学専攻修士課程を設置。倉石ヒュッテ完成。中学高等学校長に二関敬就任(9月)。榴ヶ岡高等学校長に五十嵐正躬就任(9月)。大学文団連棟焼失(9月)。
1972(昭和47)年		榴ヶ岡高等学校として独立(4月)。高山セミナーハウス完成(7月)。泉市市名坂(現仙台市泉区天神沢)に榴ヶ岡高等学校校舎が完成移転(8月)。榴ヶ岡高等学校体育館完成(12月)。
1973(昭和48)年	 清水浩三	東北学院同窓会館完成(4月)。米国アーサイナス大学に第1回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舎完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任(7月)。
1974(昭和49)年		大学院工学研究科機械工学専攻博士課程および電気工学専攻博士課程設置。第10代理事長に小田忠夫就任(3月)。
1975(昭和50)年	 情野鉄雄	大学院法学研究科法律学専攻修士課程設置。大学67年館増築完成(6月)。
1976(昭和51)年		創立90周年記念式典挙行。
1977(昭和52)年	 児玉省三	中学・高等学校長に田口誠一就任(4月)。榴ヶ岡高等学校長に小田忠夫院長兼任(4月)。
1978(昭和53)年		大学90周年記念館完成(2月)。榴ヶ岡高等学校長に清水浩三就任(4月)。中学・高等学校赤レンガ校舎、宮城県沖地震のため一部倒壊(6月)。TGヒュッテ焼失(8月)。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂(土樋キャンパス礼拝堂)に新パイプオルガンを設置(11月)。
1979(昭和54)年	 宗方司	大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程を設置。工学部計算センター完成(3月)。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式(3月)。大学78年館および部室棟完成(9月)。蔵王TGヒュッテ再建(10月)。東北学院展開催(十字屋仙台店・10月)。
1980(昭和55)年		中学・高等学校シュネーダー記念館完成(3月)。工学部機械工場および機械実験棟完成(3月)。榴ヶ岡高等学校礼拝堂および北校舎完成(8月)。泉校地総合運動場および管理センター完成(9月)。中学・高等学校文化部室完成(9月)。
1981(昭和56)年	 半澤義巳	大学81年館完成(3月)。『東北学院報』発刊(『東北学院大学学報』を改称)(4月)。情報処理センター設置。総合運動場プール完成(5月)。榴ヶ岡高等学校第1回海外研修(8月)。工学部体育館完成(10月)。
1982(昭和57)年		米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。第7代院長・第2代大学長に情野鉄雄就任(4月)。第11代理事長に児玉省三就任(4月)。図書館工学部分館完成(11月)。
1983(昭和58)年	 武藤俊男	高等学校第二部廃止(3月)。榴ヶ岡高等学校校舎増築完成(3月)。工学部礼拝堂完成(10月)。
1984(昭和59)年		新シュネーダー記念図書館完成。高等学校第1回海外研修(7月)。
1985(昭和60)年		大学整備計画案(教養学部泉校地移転など)公表(1月)。旧シュネーダー記念東北学院図書館を大学院校舎に改装(11月)。幼稚園新園舎完成(12月)。



年 代	歴代役職者	事 項
1986(昭和61)年	 倉松功	創立100周年記念式典挙行。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ヶ岡高等学校北校舎増築完成（3月）。
1987(昭和62)年		中学・高等学校長に宗方司就任（4月）。榴ヶ岡高等学校長に半澤義巳就任（4月）。中学・高等学校体育館武道館完成（12月）。
1988(昭和63)年	 脇田睦生	大学泉キャンパス完成、大学教養部を移転。榴ヶ岡高等学校礼拝堂増築完成（3月）。幼稚園長に橋本清就任（4月）。
1989(平成元年)		泉キャンパスに教養学部（教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻）を設置。幼稚園長に新妻卓逸就任（4月）。『東北学院百年史』発刊（5月）。
1990(平成2)年	 出原荘三	大学院工学研究科土木工学専攻修士課程を設置。
1991(平成3)年		多賀城キャンパス1号館完成（3月）。榴ヶ岡高等学校部室棟完成（3月）。中学・高等学校長に武藤俊男就任（4月）。中学・高等学校社会科教室完成（7月）。
1992(平成4)年	 杉本勇	大学院工学研究科土木工学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成（4月）。第12代理事長に情野鉄雄就任（6月）。法学政治学研究所を設置。
1993(平成5)年		工学部2号館完成。中学・高等学校移転決定（3月）。
1994(平成6)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻修士課程を設置。
1995(平成7)年	 赤澤昭三	榴ヶ岡高等学校を男女共学制に移行。第8代院長に田口誠一就任。第3代大学長に倉松功就任（4月）。人間情報学研究所を設置。
1996(平成8)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校家庭科実習棟完成（2月）。榴ヶ岡高等学校長に脇田睦生就任（4月）。榴ヶ岡高等学校第1回ホームカミングデー実施（9月）。
1997(平成9)年	 星宮望	大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻修士課程、アジア文化史専攻修士課程を設置。工学部運動場等新設。
1998(平成10)年		幼稚園長を田口誠一院長が兼務（4月）。高山セミナーハウス閉鎖。
1999(平成11)年		大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻博士後期課程、アジア文化史専攻博士後期課程を設置。大学設置50周年記念式典を挙行。青根セミナーハウス閉鎖。第13代理事長に田口誠一就任（4月）。
2000(平成12)年	 松本芳哉	文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部二部英文学科と経済学部二部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任（4月）。土樋キャンパス8号館（押川記念ホール）・体育館完成（9月）。大学第一回ホームカミングデー（同窓祭）開催。大学設置50周年記念事業（講演会・シンポジウム・シンボルマーク決定）を実施。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得（3万1千坪）。
2001(平成13)年	 久能隆博	文学部基督教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻に改称（4月）。東北学院資料室開設（5月）。東北学院シーサイドハウス完成。
2002(平成14)年	 永井英司	工学部機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学科を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科にそれぞれ改称。大学院経済学研究科に経営学専攻修士課程を設置。中学・高等学校長に出原荘三就任。榴ヶ岡高等学校長に杉本勇就任（4月）。
2003(平成15)年		第14代理事長に赤澤昭三、第9代院長に倉松功就任（4月）。幼稚園長に長島慎二就任（4月）。東北学院同窓会100周年記念式典挙行（11月）。



年 代	歴代役職者	事 項
2004(平成16)年	 平河内健治	法科大学院・総合研究棟完成(2月)。 <b>第4代大学長に星宮望就任(4月)</b> 。中学・高等学校長に松本芳哉就任(4月)。大学院法務研究科法実務専攻専門職学位課程(法科大学院)を設置(4月)。榴ヶ岡高等学校校舎増築(4月)。
2005(平成17)年	 平河内健治	<b>中学・高等学校新校舎完成(仙台市宮城野区小鶴)(1月)</b> 。東北学院同窓会館閉館(3月)。文学部史学科を歴史学科に、教養学部教養学科人間科学専攻、言語文化専攻、情報科学専攻を教養学部人間科学科、言語文化学科、情報科学科に改組し、教養学部地域構想学科を新設(4月)。
2006(平成18)年	 湯本良次	工学基礎教育センター完成(3月)。工学部機械創成工学科を機械知能工学科に、物理情報工学科を電子工学科に、環境土木工学科を環境建設工学科に改称(4月)。榴ヶ岡高等学校長に久能隆博就任(4月)。 <b>創立120周年記念式典挙行(5月)</b> 。
2007(平成19)年	 大橋邦一	中学・高等学校新寄宿舎完成。ハイテク・リサーチセンター完成(3月)。 <b>第10代院長に星宮望就任(4月)</b> 。中学校・高等学校長に永井英司就任(4月)。秋田オープンキャンパス開催(7月)。多賀城市と連携協定締結(11月)。
2008(平成20)年	 大橋邦一	第15代理事長に平河内健治就任(6月)。榴ヶ岡高等学校体育館・管理棟完成(9月)。教養学部創設20周年記念式典挙行・同窓会設立。
2009(平成21)年	 松本宣郎	経済学部経営学科を経営学部経営学科に改組、経済学部に共生社会経済学科を新設(4月)。大学院経営学研究科(修士課程)を設置(4月)。幼稚園長に平河内健治兼任(4月)。榴ヶ岡高等学校創立50周年記念式典挙行(11月)。東北学院大学博物館開設(11月)。
2010(平成22)年	 松本宣郎	バイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟を開設(3月)。東北学院発祥の地に記念碑建立(10月)。
2011(平成23)年	 佐々木哲夫	中学校・高等学校跡地に記念碑建立(3月)。文学部キリスト教学科を文学部総合人文学科に改組(4月)。幼稚園長に佐々木勝彦就任(4月)。
2012(平成24)年	 佐々木哲夫	榴ヶ岡高等学校長に湯本良次就任(4月)。工学部設置50周年記念式典挙行(11月)。
2013(平成25)年	 松本宣郎	<b>第5代大学長に松本宣郎就任(4月)</b> 。中学校・高等学校長に大橋邦一就任(4月)。幼稚園長に阿部正子就任(4月)。文学部史学科・歴史学科創設50周年記念式典挙行(11月)。
2014(平成26)年	 松本宣郎	第16代理事長に松本宣郎就任(4月)。
2015(平成27)年	 大西晴樹	<b>第11代院長に佐々木哲夫就任(4月)</b> 。法学部法律学科創設50周年記念式典挙行(5月)。
2016(平成28)年	 大西晴樹	<b>ホーイ記念館完成(3月)</b> 。 <b>創立130周年記念式典挙行(5月)</b> 。東北学院旧宣教師館(デフォレスト館)が国の重要文化財に指定(7月)。
2017(平成29)年	 阿部恒幸	工学部電気情報工学科を電気電子工学科に改称し、情報基盤工学科を新設(4月)。 『東北学院の歴史』刊行(10月)。
2018(平成30)年	 阿部恒幸	文学部に教育学科を新設(4月)。 米国ランカスター神学校と国際交流協定締結(7月)。
2019(令和元年)	 原田善教	教養学部創設30周年記念式典挙行(3月)。 <b>第12代院長に松本宣郎就任(4月)</b> 。 <b>第6代大学長に大西晴樹就任(4月)</b> 。 中学校・高等学校長に阿部恒幸就任(4月)。 榴ヶ岡高等学校創立60周年記念式典挙行(11月)。
2020(令和2)年	 原田善教	<b>第13代院長に大西春樹就任(4月)</b> 。 第17代理事長に原田善教就任(4月)。 幼稚園長に島内久美子就任(4月)。
2021(令和3)年	 河本和文	記念映画「東北学院の40年」完成(3月)。 榴ヶ岡高等学校長に河本和文就任(4月)。





## 利用案内

東北学院史資料センターは、広く一般の方々にも開放しております。

### 開室時間

月～金 9:00～17:00

(土・日・祝祭日および大学の定める休業日は閉室)



## 学校法人 東北学院

発行日 2022 (令和4) 年3月1日  
編集 東北学院史資料センター年報編集委員会  
発行 学校法人 東北学院  
〒980-8511  
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号  
TEL.022-264-6538  
<http://www.tohoku-gakuin.jp/>  
印刷 株式会社 東北プリント

ISSN 2434-6314



#### 表紙の写真

#### 院長退任・新院長就任式

1936（昭和11）年、東北学院創立50周年を記念して一週間にもわたる祝賀行事が催された。運動会や音楽会などの恒例行事のほか、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂において「院長退任・新院長就任式」が執り行われた。式典では院長交代を象徴するものとして「校鍵」が第二代院長のシュネーダーから理事ゾーグへ返還され、第三代院長に就任した出村悌三郎に手渡された。この「校鍵」の受け渡しは現在も院長交代に際して行われている。